

調味料は適切に（リリ
カルなのは短編集）

北乃ゆうひ／YU—Hi

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

筆者、北乃ゆうひが過去に投稿したり同人誌で発行したりリカルなのはSSをハーメルン用に再編集して色々としずつ投稿予定。

基本的に特定のカップリングがあるような話は少なめで、百合要素も少なめ（時々百合特化作品も混ざるとは思います）

中学生時代ネタと、ヴィヴィオ、はやてがメインのモノが多めかもしれませんがとらいあんぐるハートネタもちよい混ざるコトもあります。

各話ごとの繋がりは基本ありませんので好きなものからお読み頂けます。読んで下さった方が、どれか一つでも気に入っていただければ幸いです。

目次

【StS】ピユアなフリしたラッサムスー	1
プ	1
【中2】魔導探偵はやての事件簿〜花に沈む書道家〜問題編	37
【中2】魔導探偵はやての事件簿〜花に沈む書道家〜解決編	69
【1期】アリサちゃんの恋わずらいなの？	94
【Vivid】Red hot Idol	113
Worshipizza	173
【中2】そんなある日のSkill&a way	173

【Vivid】毒蜂 街に來たりて、八角	209
鷹 眼を光らす【とらハ3】	242
【VVT】知って悩んでTouch &	269
Go!【StS】	269
【A,s】お塩は適量で	269

【StS】ピュアなフリしたラツサムスープ

1.

「何かこういうの久しぶりねえ」

上機嫌に鼻歌を歌いながら、彼女は紙面にペンを走らせる。

電子技術魔導技術が発達し、物品や紙面でのやりとりをする情報伝達手段が少なくなり、映像による直接の会話やメールなどの手軽かつリアルタイムに近いやりとりが増えてきた昨今においては、こうやって自分の思いを紙面にしたためるといふ行為はほとんど廃れてきてしまっている。

それでも、世の中に本がなくならないのは、それを手に持つてその紙面に連なる文字を読み解くと言う行為が、人の人生や思いを読み解くことに似ているから、なのではないだろうか。

人というのは少なからず、他人の心を理解したいと思うのだ。例えばそれが、見ず知らずの作者という存在であったとしても。

自分で書いた手紙の紙面を軽く読み直しながら、彼女は少し顔を赤くする。

「改めて読むと少し恥ずかしいわね」

ややクセのある丸っこい文字は——時空管理局からすると犯罪組織扱いである——
ファミリーを束ねるボスのクセ字としてはやや可愛いすぎる気もする。

だが、手紙というのはそれが良いのではないか、とも思う。

電子メールなどでもフォントを選ぶことが出来るし、それで様々な表現をすることも可能ではあるが、それでも手書きによる書き手のクセ字というのは、どんなフォントよりも雄弁に思いを語る。

一字一句。その書き連ねる文字の、書き連ねる文章の、その一瞬。そのひと時の感情が、そこに現われるのだ。

恋文——などと言われるこの手のものは、スクールに通っている頃は、それなりに流行りもしたが、やはり電子メールや映像通信での手軽さに比べると、面倒くさいという側面から、僅かな間に廃れてしまった。

話を聞く限りだと、それはスクールガール達のある種の通過点らしく、世代の違う女性陣に聞いてみても、自分が関わった関わらなかつたは別にして、それなりにそういう出来事はあつたそうである。

その辺りできやつきやうふふと盛り上がれるのは、コイバナ好きの女の子らしさと言えるかもしれない——が、まあ男性陣からはくだらないと冷たい反応だつた。余談だが、お前は女の子つて年齢かと聞き返すのは禁止である。

それはさておき……それなら当時そういうものをもらったりしたらどう思うのか——と、ファミリーの面々に尋ねようと思ったのだが、だいたい返答が予想付いてしまったので、敢えて聞かなかつた。まったくもって面白くない。

それはそれとして——

「いやー……青春を思い出すわっ」

うきうきワクワクと筆を走らせた。それはもう、何か本気で恋する女の子に戻つたみたい。

だからこそ——というべきか、余計な装飾というものはしなかつた。

便箋も封筒も飾り気のない、だけど女の子が使うものっぽいというやつを敢えて選んだし、文字を書くのに使つたペンのインクもあくまで黒だ。

思いを伝えるのであれば、余計な装飾なんていらぬ。

電子メールなどであつた場合は、誰が書いても同じ文字にしか見えないので、逆に装飾が必要かもしれないが、こうした手書きの手紙であるのなら、むしろその文字そのものが思いを伝える装飾の役割を果たすはずだ。

「我ながら、ちよつと青臭いかなー」

口では言っているが、少なくとも執筆中はとてもノリノリであつたのは事実だ。

インクが乾いているのを確認し、便箋を丁寧に折りたたむと、それを封筒へ入れて

ハートマークのシールで封をする。

それから――

「んー……」

宛先は敢えて、『私の大好きなあなたへ』とだけして、名前は書かないことにする。差出人も同様に『あなたが欲しい私より』と小さく書いておく。

これで完成。

それをシワが付かない程度にひらひらと動かして、封筒の宛名などを乾かしながら、
「ヴェイローン」

自室を出て、弟の名前を呼ぶ。

「何だよ」

偶然にもすぐ傍にいたらしく、ぬっと不機嫌そうな顔をした男が顔を出してきた。

「この間ゲットした役に立たない携帯転送装置どこにしまったっけ？」

「それなら俺の部屋にあるけどよ……何に使うんだ？」

彼女の問いかけに、ヴェイロンは眉を顰めた。

それもそうだろう。件の転送装置は、大きいものをまともに転送出来ないのだ。人間を転送しようとする、せいぜい十メートルちよつと。脱出とか逃げ出したりするのに使えるかと思つて手に入れた一品だったのだが、これではあまり役に立たない。そんな

ものをわざわざ使いたいと言い出したのだから、訝るのも分かる。

「んー……この手紙なら、結構な距離飛ばせそうでしょ？」

「確かにな。小さければ小さいほど、軽ければ軽いほど、一応遠くに飛ばせるみてえだし——たぶん、その手紙なら二十キロくらいか」

「これでもそんなものかー……じゃあ、どっちにしる届け先の建物の近くまでは行かないとダメね」

「次元世界を跨げるとでも思ってたのか？」

「そうだったら苦労はないのになー……程度には考えてた」

姉の返答にやれやれとヴェイロンは肩を竦めながらも、少し待ってると告げて自室へと向かっていく。

「ふふふのふー……さあて、ちよつとしたおイタの始まりよ。おねーさん、わくわくしちゃうツ！」

彼女——フィツケバインファミリーのボス・カレンは、それはもう、いたずら大好きな猫が面白いいたずらを思いついた時のような素晴らしい笑顔を浮かべ、自室へ戻っていくヴェイロンの後姿を見送るのだった。

2.

時空管理局特務六課。

その名の通り、特殊な任務を遂行するスペシャリスト達が集まったといつても過言ではない部隊であり、その構成員の多くは数年前、機動六課という特殊部隊として、ミッドチルダ首都クラナガンを襲ったテロリスト達を倒した英雄部隊の面々である。

とはいえ、彼らとて任務外の通常業務や訓練などの時は、取り立てて特殊な人間などではなく、ごくごく普通の人間だ。

もちろん、こういう部隊であるし、つい先日フツケバインファミリーという犯罪者集団と大バトルをやらかしたばかりである。なので、その後始末として働き続けている人たちもいるのは確かであるが、そこはそれ。

少なくとも、エリオ・モンディアルとトーマ・アヴェニールの両名は、とりたてて忙しいようなことなどなく、二人で談笑しながら隊舎の廊下を歩いていた。

「ごめんね、エリオ君。なんかロツカー半分借りちゃって」

茶色い髪の方、トーマが申し訳なきようにそう言うと、長めの赤髪をうなじの辺りで束ねている長身の少年、エリオは首を横に振る。

「元々、私物は少ないから。気にしないでいいって」

トーマはそもそも特務六課の人間ではない。少々込み入った事情があり、特務六課預かりとなっているのだ。一応、便宜上は見習い隊員ではあるのだが。

「俺も私物は少ないんだけど……アイシスが面白がつて、俺の荷物漁りしてくるもんだから」

「あははは」

「笑い事じゃないって」

そして、その込み入った事情により、トーマはつい先日まで共に旅をしていたアイシスとリリイと同じ部屋で生活をしている。

一応、男と女であるからして、カーテンという仕切りは存在しているのだが、その触れれば揺れるほど脆弱な仕切りの向こうで、アイシスやリリイといった同じくらいの年頃の女の子が着替え等をしている状態というのは、非常によろしくない。年頃の男の子の、健全な脳みそ的な意味で。

「気持ちに分かるけどね」

「他人事みたいに言ってるけど、エリオ君だってキャロちゃんと同室でしょ？」

「んー……まあそうなんだけど。キャロとは兄弟みたいなものだし、わりと一緒にいるコトも多いから、慣れたというかなんというか」

「それ、キャロちゃん聞いたら怒りそう」

「え？　なんで？」

思わず聞き返すエリオだったが、確かに最近のキャラは良く分からないタイミングで不機嫌になることがある——と日頃のことを思い返す。

もし、トーマの言う通り不機嫌になる要因が今の発言にあるのであれば、気をつけておいた方が良くもしいれない。

「トーマは、キャラが怒る理由——分かるの？」

「何となくは。だけど、俺の口からは言えないかなー」

「そっか。なら聞かないけど」

是が非でも聞き出した方が身の安全は確保出来そうではあるものの、言いたくない人に無理やり口を割らせるというのは、エリオの性格上出来ることではない。

「話は戻すけど、キャラだって時々僕の私物に興味持つから、あまり僕のロッカーも安全とは言えないよ？」

「でも、キャラ口ちゃんなら黙ってこっそりと覗いたりとかしないよね？」

「うん、まあ。たぶん」

うなずきつつも返事が曖昧だったのは、誰かに乗せられてしまえば、結構一緒にやりそうな予感がしたからだ。

機動六課時代であれば、スバルやティアナがそのかしたりする可能性もあるが、今

はあの二人もそれなりの地位もあるし、そういういたずらをする歳でもないだろう。

「ただ、キャロはそうでもない——年齢や管理局員としての肩書きや地位に関してエリオも人のことは言えないが——」。

「起動六課時代以上に、そういうのに興味があるようなのだ。」

そこに、アイシスという起爆剤と出会ってしまったので、きっかけ次第ではキャロもそういうことをしかねない——気がする。全ては憶測であるのだが。

そんな感じで、年少チームの少年組は、女の子に振り回されて困るといふ、聞く人が聞けば怒りかねない話に盛り上がりながら、食堂へと向かうのであった。

3.

そして、年少チームの少女組。

「ふふふ、ここはロッカールームッ！」

「うん、それは見ればわかるけど」

黒髪に小さなポニーテールを作っている少女、アイシス・イーグレットがややテンション高めめに告げると、その横にいた桃髪の小柄な少女、キャロ・ル・ルシエが正反対

のノリで嘆息する。

「男の子が女の子を気にするように、女の子だって男の子のコトが気になるわけです」
「うん、まあそうだね」

アイシスにちよつと付き合つて欲しいと言われ、連れてこられたのが男性用のロッカーームなのだから、キャロとしてはどう反応して良いか分からない。

ちなみにロッカーームとは言うが、別にシャワールーム傍に設置してあるものではなく、単純な私物置き場みたいなものだ。

「キャロさんは、エリオさんのコト気にならないの？」

「どーゆー意味で？」

「いまいちアイシスの行動や質問の意図が分からずに、キャロは問い返す。

「主に私物とか」

「それは気になるけど、でも勝手に見るのはどうかと」

無論、ロッカーには鍵だつて付いている。アナログ式ではあるのだが、今の時代、かえつて電子ロック等よりは安全かもしれない。

「こんなアナログ式……このアイシスちゃんに掛かれば……」

なにやら針金でガチャガチャやると、ロッカーの内側からガチャリという音が聞こえた。

「ちよ、ちよつとアイシスッ!」

「私だつて気になるわけですよ。トーマの私物とか……というわけでオープン!」

キャロの制止もむなしく、アイシスは勢い良くロッカーを開く。

「あれ? いつもよりモノが少ない……」

「いつもやつてるの?」

「気が向いた時とか。時々モノが増えたり減ったりして面白いですよ。時々、エツちな本とかもありますし」

「え、えつちなほんつて……」

「話によると、ちようど今くらいが一番えつちいコトに興味あるみたいです。男の子つて」

赤くなるキャロに、少し口元を綻ばせつつそう告げるアイシスは、トーマのロッカー漁りに飽きたのか、それを閉め、ちゃんと鍵を掛けなおしてから、別のロッカーを見遣つた。

「アイシス?なんでエリオ君のロッカー見てるの?」

「だつて気になりませんか?」

「えつと、まあ——気にならないつて言つたら嘘になるけど……」

「私も気になりますし」

「気になるッ!？」

「あ、そーゆー意味じゃないですから安心して下さい」

告げて、アイシスはエリオオのロッカーの鍵穴をガチャガチャと弄り始める。

「そんなワケでエリオさんのロッカー、オープン!」

「アイシス。やっぱり勝手に開けたらダメだつてー!」

「あー、やっぱりトーマと同じカンジだなー」

結局、キャロの制止は虚しくロッカーは開いてしまう。

「ダメだつてこんなのー」

口ではそう言いながらも、やはりキャロは気になるのか、ロッカーの中をまじまじと覗き込んでしまっているので説得力の欠片もない。

「あれ? トーマの荷物が混ざってる? さては、私対策かなトーマめえ……」

「こ、この、本……」

スタイルの良い裸の女性が、右手で左の二の腕を掴みつつ胸を、左手で股間を隠している写真が表紙になっている本を見て、キャロが顔を赤くしながらあたふたしている。

良く良くその表紙の女性を見てみると、青髪のショートカットで、裸ながらもどこかボーイッシュな雰囲気を持っている気がする。

アイシスは、まだエリオと出合つて間もないが、それでも彼の趣味とは少し違う気が

して、ふと思う。

——そして、それが何となく誰かに似てるなど思った時、その本の持ち主に気が付いた。

「あー……それ、たぶんトーマの私物かと」

「いや、でも、えつと……」

そう告げても、軽いパニックから復帰出来ないのは、この小さな年上さんはこの手のモノに耐性がないからかもしれない。魔導師としての能力とこういうものはさすがに関係ないようだ。

まあアイシスもアイシスで、パニックになってないだけで、顔が赤くなっているし、その自覚もあるのだけれど。

表紙の写真そのものよりも、その表紙と一緒に書かれている内容を示唆した煽りが、余計なものを想起させるせいなのかもしれないが。

「エリオさんは、こーゆーの持っていないのかなー」

「エ、エリオ君は、こーゆー本、持っていない……はずだもん！」

「そう思いたいですよねー」

ニヤニヤと笑いながら、アイシスはロッカーを漁る。もはや制止する意志がすっかりなくなっているキャラ口と一緒に。

アイシスは面白がつて、キャロはエリオを真面目男子であると信じて、ロツカーを漁っていると、どこからともなく白い封筒が落ちてきた。

ひらりと舞つて床に落ちるそれに、キャロとアイシスは顔を見合わせる。

それから、アイシスは興味津々とばかりにそれを拾い上げた。キャロは不安そうに、アイシスが拾つたそれを覗き込む。

『わたしの大好きなあなたへ』

封筒の表にはそう書かれている。

「こ、これはーっ!」

「そ、そんなー……」

相変わらず両極端な反応をしながらも、興味そのものは二人とも失せることはない。

「差出人は誰かなー?」

アイシスが楽しそうに裏を見ると、

『あなたが欲しいわたしより』

と、書いてある。

「誰よツ!!」

「誰えツ!?!」

それから、二人は少しだけ眉を顰める。

「これ、エリオさんとトーマ……どっち宛てなのかな？」

「エリオ君のロッカーに入ってたら、エリオ君宛てだとは思うけど……」

「トーマは荷物をごちゃつとエリオさんのロッカーに放り込んだだけっぽいから、混ざっててもおかしくはないんだよねえ……」

「……………」

「……………」

僅かな沈黙。

そして、沈黙のままアイシスはエリオのロッカーを閉じて鍵を掛けなおした。

「この時間——二人は食堂……よね」

「うん。一緒に、食堂行ってくって言ってたし」

ロッカールームの時計を見ながら呟くアイシスに、キャロがうなづく。

「中は……さすがに、見ちゃうのは失礼か」

「気になるけど、そこまでやつちやダメだよ」

ロッカーを覗くまではイタズラで済むだろうが、まだ開封されていない手紙を勝手に開いて見てしまうのは失礼すぎる。手紙の差出人に対しても、エリオやトーマに対して
も。

まあ持ち出してしまっている時点で、礼儀もなにも無い気がするのだが、そこまでの

ことを、今の二人は気にする余裕を失っていた。

キヤロもアイシスも、自分では良く分からない苛立ちを胸に秘めつつ、食堂を目指すべくロツカールームを後にするのだった。

4.

「ありやー……これは想定外」

口調こそ困っているが、その表情は楽しそうである。それはもう、楽しみにしていたおもちゃを買ったら予想以上想像以上に面白かった子供のような、そんな顔だ。

「あの女共信じられねえな——なんで勝手に他人のロツカー漁ってんだ？」

一人じゃ嫌だからという、ワケノワカラネエ理由で連れて来られたヴェイロンは、様子を窺っていたモニターから目を離しつつ、低く呻いた。

「思春期の女の子ってそんなものよ？」

それに対し、この場へと連れて来た張本人であるカレンは楽しそうに告げる。

「オレの学生時代の同級生とかも、オレの知らねえとこでやってたってコトか？」

「可能性はあるわね」

「ゾツとしねえなおい」

出来る限り当時の女子達を思い出さないように頭を振って、改めてモニターを見遣る。

「んで、姉貴。これに何の意味があるんだ？」

「んー……」

ヴェイロンの問いに、カレンは下あごに細長く綺麗な人差し指を当てて少し思案してから、何か閃いたように軽くうなずいた。

「古来より伝わる、先人達の素晴らしい言葉があるコトをヴェイは知らない？」

「あん？」

意図の読めない姉の問い返しに、ヴェイロンが眉を顰めると、彼女はニマアと口を歪ませながら、その素晴らしい言葉とやらを口にした。

「ひ・ま・つ・ぶ・し」

「帰る」

「あー！ ヴェイいく帰らないでえ〜」

即座に立ち上がり踵を返すヴェイロンの足に絡みつくように、カレンは抱きついてそれを制する。

「うるせえ離せ！」

「おねーさん一人にされると寂しくて死んじやうからあ〜」

「なら丁度いい一度死んでその馬鹿直してから帰って来い！」

「あ〜んもう〜ヴェ〜イ〜ロ〜ン〜ン〜！」

敵対しつつ利用させてもらつてる特務六課の連中には見せられないし、見せたくない光景だ——そんなことを思いながら、抱きついて駄々を捏ねる姉を引き剥がす作業をしつつ、ヴェイロンは深く深く嘆息するのだった。

5.

食堂にて、エリオとトーマスが注文した料理を丁度食べ終わった時——

「エエリイオくううん」

「トオオオオマアアアア」

何やら、もう不機嫌を通り越したすごい顔をしてるキャロとアイシスがやってきた。

そのあんまりにもあんまりな形相に、思わず二人は飲んでいた水を吹き出してしま
う。

「ふ、二人とも……ど、どーしたの？」

「別に」

「特になにも」

嘘だ——と、エリオとトーマは思うもののそれを口にする勇気を彼らは持つことが出来なかった。

「これ」

そして、席に着かずにアイシスが一枚の封筒を差し出してきた。

「エリオさんのロッカーから出てきました」

「僕は現時点でツツコミを入れたい」

思わず呻くエリオだったが、アイシスは聞く耳持たずに続ける。

「トーマの荷物もエリオさんのロッカーに入れてるんだよね」

「えーつと……」

エリオのロッカーを開けられている時点で言い逃れもなないのだが、トーマは思わず目を泳がせて、言い訳などを色々と巡らせる。

「そんなワケでこれがどっちの持ち物なのか教えて」

メラメラと何やら瞳に炎を灯しながらこちらを見てくるキャロ。アイシスもだいたい同じような表情をしている。

「どっちの持ち物って言われても」

とりあえず、エリオは差し出された封筒を手にとった。

宛名も送り主の名前も分からないその封筒は、だけど雰囲気から何であるかは知れる。

「これ、ラブレター!？」

思わずトーマがテンションを上げるが、アイシスに睨まれて上がった分の倍の数値分マイナスされた。何でこんなに睨まれるのかわけが分からない、と思いつつ怖いことは変わりないので口を噤む。

「これ、トーマのだよな?」

周囲に女性の多い生活が長いエリオは、即座に状況を判断してトーマにその責任を擦り付ける。

相手が女性であるのならともかく、トーマのような同世代の男友達なので、気兼ねがない——そんなわけで、彼には自分の身代わりにアイシスとキャロの雷をもらってもらおう。

即座にそういう思考が出てくる程度には色んな経験を積んでいるエリオであったが、「え?」でも、ロツカーはエリオ君だったんだから、エリオ君宛ての可能性もあるよね?」

自分と似たようなオーラを出しながらそう返してきた。

迂闊だった——と、エリオは胸中で舌打ちする。

考えてみれば生い立ちは違えど、トーマは自分と似たような境遇で育つて来たのである。そして、彼の人生もまた周囲に女性が多い人生なのだ。こういう状況下での突破方法として、同じようなことを考えていてもおかしくはない。

現に、トーマの目からは——

(自分だけ逃げようたつてそうは行かないよ?)

という意志が伝わってくる。これは中々手強い。

「ふーん……二人とも知らないんだ?」

ずずいと顔を近づけて訊いてくるキャロに、二人は無言でぶんぶんと頭を縦に振る、「中を見てもいい?」

不機嫌になりながらも、勝手に開けずちやんと訊いてくるのはキャロらしいというかなんというか——まあこの迫力の前にダメだという言葉を吐けないので、二人は何度も首肯するしかないのだが。

そうして丁寧に封筒を開けて、中から出した便箋を読み始めるキャロ。

何だか徐々に顔を赤くしていつている。

「……?」

エリオとトーマが訝っていると、よほど気になったのかアイシスがそれを横から覗き

始めた。そんなアイシスに、キャロは便箋を手渡す。

それを読み進めたアイシスもまた、顔を赤くし始めていく。

どうやら、あの手紙のおかげでキャロとアイシスの怒りは静まったようであるが――

「エリオ君ッ、トーマッ！」

「は、はいッ！」

先程までの不機嫌さが嘘のように真面目な調子になったキャロに呼ばれ、二人は思わず背筋を伸ばす。

「こんな手紙をもらっておきながらどつちのモノか分からないなんて失礼ですッ！」

そもそも勝手にロッカーを覗くのは失礼じゃないのか――なんてツツコミはもはや野暮以外のナニモノでもなさそうなので、口にはしないが。

「そうだよ！　こんな可愛い手紙まで書いてるのにッ！」

色々と納得しかねるのだが、真面目な上に女性に対してあまり強気になれない二人は黙って聞くことしか出来ない。

フツケバインのヴェイロンや、あるいはカレン。そうでなければ、エリオ達の上司であるはやて辺りならば、ロッカーの件を理由に反論し、逆に相手を説教して有耶無耶にした上で手紙を回収。その後、暫く姿を晦まし、ほとぼり冷めた頃に帰ってくるといった強引な手段を講じるのだが、エリオとトーマはそういう捻くれた手段が取れない真面

目な人間なのである。今はその真面目さが足を引つ張っているのであるが。

この状況を打開する手段はもはや第三者の乱入しかありえない。

誰でも良いから来て欲しい——そんなことを思いながら、エリオとトーマは大人しくキャロ達に怒られていた。

そこへ、救いの女神かもしれない人がやってくる。

「あれ？ 四人で何してるの」

「スウちゃん！」

「スバルさん！」

思わず目を輝かせるトーマとエリオ。よつぼど二人からの理不尽なお説教に参っていたらしい。

「えと？ 何？」

何やら真面目な顔をしているキャロとアイシス。雨に濡れた子犬が近くを通る人を見上げているかのようなエリオとトーマ。その二組の間に視線を巡らせつつ、スバルはどうリアクションとって良いのか分からずに頬を搔いた。

その時、スバルの目に映ったのはテーブルの上の手紙だ。

「なにこれ？」

それをスバルが手に取るのを、四人はそれぞれの思惑の中で『しまった！』と頭を抱

えたり舌打ちをしたりする。

そしてそれにスバルが目を通してる間に、トーマはエリオへ思念通信を送る。

《エリオ君。スウちゃんを読んでる今のうちに逃げない？》

《でも、それをしたらキヤロ達が……》

《ほとぼり冷めた頃に戻ってくればいい気がするんだ。今怒られ続けるか、もしかしたら怒りが収まってもかもしれないことを希望に逃げるか、だよ》

エリオは僅かに逡巡した後、トーマにうなずく。

《それじゃ、そうしよう》

念話で告げてエリオはトーマの手を取ると、高速移動ソニックムーブを起動して食堂から逃げ出した。

背後からキヤロとアイシスの叫びとも怒声とも取れる声が聞こえるが、それを無にして隊舎の廊下を駆け抜ける。

「キヤロー！」

「アイシスー！」

「ごめーん!!」

二人は律儀に謝罪しながら。



「あははははは……！ オトコのコ達は大変だねえ……！」

「まさかその厄介ごとの原因作った女がこつそり様子見ながら腹抱えて爆笑してるだなんて夢にも思ってたねえだろうよ」

やれやれと嘆息しながら、ヴェイロンはターゲットにされたエリオとトーマに思わず同情してしまうのだった。

6.

食堂からだいぶ離れた場所まで移動したところで、エリオはソニックムーブを解除する。

「とりあえず、逃げてきちやっただけど」

「どうしようか」

顔を見合わせ、二人して頭を抱えた。

正直言って、このままほとぼり冷めるまで姿を晦ませるのが一番ベストな気がして仕方がない。

まあ現実的に考えてさすがにそれは無理なのだが。

「差出人を探す、とか？」

トーマの言葉に、エリオは肩を竦める。

「見つけてどうするの？」

「えっと、どっち宛てにだしたのって……」

「訊いてどうするの？」

二度目の聞き返しに、トーマはお手上げだと、両手を挙げて示した。

途中でトーマも気付いたのだろう。それは差出人に対して極めて失礼なことだ。

あれが本当にラブレターなのだとしたらなおさらである。それに――

「悲しませないように断る方法が思いつかないしね」

エリオの言葉にトーマはうなずく。

最初からあの手紙――のみならず、この手の手紙は、断るつもりでいたのだ。

特に二人もこれといった理由はないのだが、思春期の少年がそれなりに悩み、出して

きた答えなのである。

その思考の奥底には、自覚がなくとも誰かしらへの仄かな恋慕が含まれているのかも

しれないが、それは本人達すら知る由もない。

「それに、探すって言っても手紙は食堂に置いて来ちゃったしね。手がかりとか何もな

「い」

付け加えるのならば、自分達は中身をまともに見ていない。

チラ見すらしてない手紙から筆跡で人を探すことなど、不可能だろう。

「それもそうだね」

二人はぐつたりと嘆息する。

本気でどうしよう——そんなことを二人が考えていると、二人の傍に突如魔法陣が展開された。

「!？」

驚き硬直するトーマと、即座に思考を臨戦モードに切り替えるエリオ。

だが、その魔法陣は——

「キャラちゃんの……召喚陣？」

そう、キャラロが使用する特殊な魔法。召喚術の魔法陣だ。

しかし、このタイミングで展開されるこの魔法陣はいったいなんなのだろうか。

その疑問も、ほどなく解答を得る。

「みーつけた」

魔法陣から出てきた人物の放つ、獲物を見つけた肉食獣のような低くも、喜びを隠し切れないような声に、二人は思わず顔を引き攣らせた。

「ア、アイシスー!?!」

「だけじゃないんだなあ」

その言葉に呼応するように、術者本人もまたその魔法陣から現われた。

「自分を他所に召喚するって、やってやれないコトないんだね」

ニコツ——と笑うキャラであったが、二人はその笑顔が黒いものに見えてしかたない。

「何で二人とも逃げるのかなあ?」

そんなの二人が怖かったからに決まってる——という言葉は、エリオもトーマも喉の奥から出てこないように、グツと答えた。

「ふーん、答えないんだ」

「それじゃあ二人とも、もうちよつと私達とお話しましょうか?」

顔の上半分に影を降ろしながらも、いつもどおりの笑顔を浮かべるアイシスとキャラに、トーマとエリオは情けなくも、素直にうなずいてしまうのだった。



「修・羅・場〜♪ 修・羅・場〜♪」

ぬふふふふんつと鼻歌交じりに観察してゐる姉の姿を見、

「本気で、何でそんな楽しそうなんだよ……」

いい加減、トーマ達が哀れに思えてきたヴェイロンは大きく嘆息する。

その時、ふと目の端が捕らえた違和感に眉を顰め、その原因を探す。

「……………これは？」

目に映つたのは、特務六課で起きているドタバタ悲劇の原因を作るのに使つた転送装置。

何故それを違和感に思つたのか、訝しみながらヴェイロンは手を伸ばし、その理由に気が付いて、ますます眉間の溝を深めた。

「なあ、姉貴——」

「なあにー？」

上機嫌に振り向くカレンとは対照的な引き攣つた笑みを浮かべながら、

「こいつ、何だと思う？」

ヴェイロンはその転送装置の中にあるモノを指差した。

「あれ？」

指されたものを見て、カレンは思わず子リスのように可愛らしく首を傾げる。

そこには、自分が書いたラブレターがそのまま残っていた。

「どうやら、転送に失敗していたらしい。」

「じゃあ、あの騒ぎ……何?」

「俺が知るかよ」

「ま、いいわ」

うふふーつと、上機嫌のままカレンは転送装置の設定を弄ってから、改めてボタンを押す。

「どうやら今度こそちゃんと飛んでいったようだ。」

「今さらかよ」

「このタイミングだからよ」

言つて、カレンが示す特務六課の様子を見遣れば――

♪

「?」
キャロとアイシスによる理不尽なお説教の最中、四人の頭上に何か光が現われた。

思わず四人が見上げると、その光は収まりそこから一枚の便箋が落ちて来る。それをアイシスが手を伸ばしてキャッチした。

「ア、アイシス……さすがに、無警戒でのキャッチって危険じゃない？」
「うん……今、わたしもキャッチしてから思った」

エリオの指摘に、アイシスは思わず苦笑する。

あからさまに怪しい光から出てきた手紙。それが単なる手紙であるとは限らないのだ。

管理局の施設とはいえ、何らかの手段によつて、敵対している組織がこういったものを送り込んでこないとも限らない。

「でも、一応、何の仕掛けもない手紙みたいだけど……」

とはいえ、今の騒ぎの原因になっているラブレターといい、このどこからともなくやってきた手紙といい、紙による意志伝達というのは珍しい。そんなものが二つも、自分達の手元にあるというのも、非常に稀有な事態といえるかもしれない。

それはそれとして——と、アイシスは手紙の宛名を見る。それをキャロが横から覗き込む。

『私の大好きなあなたへ』

アイシスとキャロの様子を見ていた男子二人は、空気がより冷たくなったことに気が付き、思い切り顔を引き攣らせる。

無言で、アイシスは便箋の裏を見る。

『あなたが欲しい私より』

確信する。アイコンタクト。エリオはトーマの手を取る。そこまでの流れは食堂と同じ。そして次の展開も――

《ソニックムーブツ!》

これ以上は危険だと判断した二人は、高速で廊下を駆け抜ける。

そんな男子二人を、

「エリオ君ツ!!」

「トーマアツ!!」

二つの叫びが追いかけるのだった。

7.

「何や騒がしいなー」

特務六課部隊長八神はやては、ベッドの上に身体を起こし読んでいた書類から顔をあげ嘯いた。

「表情と口調がチグハグですけど?」

「いやー、若い子が元気なのはええコトやな」

ずつとこの医務室のベッドに居たはずなのに、全部分かつてるような口調の上司に、
ティアナ・ランスター執務官は思わず頭を抱えた。

「上手いことやってくれてありがとなー」

「本当にこれでよかつたんですか？」

「アイシスちゃんは、トーマとリリイ以外にはまだ心開けてへんようやったからな。こ
ういう馬鹿騒ぎにでも巻き込まれれば、少しは壁も薄くなるんちやうかな、と」

「巻き込まれる……というか、中心人物ですよ」

「そこは嬉しい誤算や」

「絶対嘘ですよねそれ」

エリオかトーマの私物ロッカーの中にラブレターを入れておけば、アイシスの心の壁
が薄くなる——最初にそう言われた時は、このちびたぬ隊長は一体何を言っているのか
と思つたものだが、よもやこんなダバタ騒ぎを想定していたとは、完全に予想外だつ
た。

こうなることを初めからから想定した上で、わざわざティアナにラブレターを入れて
こいと言つたのだろう。

「誰も見てなかつたからとはいえ、正直、すごい恥ずかしかつたんですけど」

「まああれを書くとき私も恥ずかしかつたんでおあいこつちゆうコトにしてくれへん

「？」

もつとも、ティアナが恥ずかしがるのも想定のうちだ。むしろ、意味もなくドギマギしてる様子を隠れ見ていたとは、はやては口が裂けても言う気はないが。

「あれ、はやてさん直々の執筆だったんですか」

「書いてる時は思わず昔を思い出してしまった」

「やつぱりそうなります？」

「まあな……ほんつと、男子なんてクロノ君となのはちゃんのお兄さんに、ロツサくらいしか縁なかったなあ思うと、悲しくて悲しくて」

「ナカジマ三佐はそこに入らないので？」

「ティアナは今の三人の中に師匠を加えても問題ないかと？」

「ごめんなさい」

半眼になって睨まれ、思わずティアナは謝った。

「話戻すけど、有事が起こればエリオとキヤロもプロやしな。ドタバタモードから仕事モードに切り替えられるやろ。二人がシリアスやってれば、トーマとアイシスだつてとりあえずはドタバタを止めるやろうし、しばらく放つておいても問題あらへんよ」

「分かりました」

一つうなずいてから、ティアナは苦笑する。

「あの、聞いても?」

「何や改まって」

「部隊長つて、そこまで部下に気を回せないと出来ないものですか?」

「そんなコトあらへんよ。自分が出来へんのやら、出来る副官や部下がおればええ。全部が全部自分で出来るような部隊長なんておらへんつて。」

私が色んなコトを全部出来てるように見えるんやったら、それはティアナの見てないところで、他の部隊員達が色々やつてくれてるだけや。私はそれをまとめただけなんよ」

その言葉に少しだけティアナが安堵したところへ――

「エリオ君ツ!!」

「トーマアツ!!」

廊下の方から二人の少女の大音声が聞こえてくる。

「いやー……エリトマコンビの災難やなあ」

しみじみと、だが笑いを堪えながら呟く部隊長に、

「原因が何を言ってるんですか、まったく」

カレンに対するヴェイロンと似たような表情で嘆息するのだった。

l
o
s
e
d.
[
L
o
v
e
L
e
t
t
e
r
P
a
n
i
c
!!
V
e
r.
F
o
r
c
e
|
c

編 【中2】魔導探偵はやての事件簿〜花に沈む書道家〜問題

0.

第九十七管理外世界地球。極東地区。日本国。

思えば遠くまで逃げてきたものだと思う。

自分で言うのもなんではあるが、指名手配されているとはいえそこまで大きな罪状でもないのだ。

ただ、逃げてしまった。逃げ通せてしまったが故の、手配状。

さすがに管理外世界までは手が届くまい。

仮にこの世界を突き止められたとしても、この世界の技術力や状況を考慮するとおいそれと手出しは出来ないだろう。

確かにミッドチルダに比べれば技術力は低い。

だが、自力で宇宙へ飛び立つだけの技術力を有しているし、それなりの軍力も備えている。

さらには、大きな星であること以上に、多言語多文化世界であるがゆえ、自分を探し

出すこともそう簡単にはいかないことだろう。

一つの文化体系や言語体系を調べるだけでは、調査を開始できるような世界ではない。

この世界の、この国は、自分にとっては理想郷だ。これは第二の人生のようなものだ。だから——絶対に、誰にも邪魔なんてさせたくない。

この世界で生きていく理由もできた。ここで、生きていたいのだ。

1.

「なんか、ごめんね。せっかくみんなで泊まりに来てるのに、変な催しがあったりして」友人のアリサ・バニングスが申し訳なきようにそう告げるが、他の四人はそのことについてはまったく気にしていなかった。

「ええって、ええって。こんなホテルにタダで泊まれるってだけで、充分や」八神はやてのその言葉に、他の三人もうなづく。

ここは観光地にほど近い高級ホテルだ。

普通に生活していれば、はやてにはまったく縁のない場所である。

そんな場所をこうして利用できるのだから、不満など出るはずがない。

「それにアリサちゃん、変な催しつていうのは失礼だよ」

やんわりと咎めるすずかに、アリサは唇を尖らせた。

「大物書道家、大河内源慈おおこうちげんじの、なんかの賞の受賞記念の式典兼個展なんて、興味がなきや変な催しじゃない」

「アリサ……」

「アリサちゃん……」

ミもフタもないと言えばその通りな物言いに、フェイトとなのはも苦笑した。

ロビーの右側にある大きいイベントホールの方には人が集まり、何やら記者会見のようなものをしているようだ。

あれが終われば、あの部屋は氏の個展会場となるのだろう。

ともあれ、アリサではないが、さしたる興味もないことだ。気にせず、友人達とのプチ旅行を楽しむことにしよう。

——はやてがそう思った矢先だ。

「その質問はッ！ この場において関係があるのかッ!？」

野太い声が大きく響いた。

誰もが思わず、その声のした方を見遣る。

どうやら、記者会見の最中に記者が失礼な質問でもしたのだろう。

「記念の式典に、何故死んだ娘のコトを聞かれなければならないッ!!」

怒鳴り声の内容に思わず納得をしてしまう。

それはそうだ。娘さんに何があったのかは分からないし、何かマスコミにとって興味のある事柄なのかもしれないが、少なくともこのような祝典の場であるべきものではない。

「どこの世界のマスコミもこうなんやよなー」

「実感籠もってるね、はやてちゃん……」

すずかの言葉に、思わず苦笑を浮かべて、なのはとフェイトに視線で同意を求める。すると、二人もはやてと似たような表情を浮かべてうなずくのだった。

「魔法使いも大変なのねー」

何とも言えない顔をする三人に、アリサは嘔うそぶく。

魔法使い——そう。はやてとなのはとフェイト。この三人はただの中学生ではなかった。

異世界の魔法を使うことの出来る魔法使いで、その魔法使い達の組織である時空管理局という場所に属している。

知らないものが聞けば荒唐無稽だと思われる話であるが、ファンタジーよりもSF寄りなこの魔法の話は、紛れも無く事実であり、三人のトップシークレットでもあった。

「あのね、みんな」

なのはが話を変えるように、ロビー左手の小さいイベントホールを示す。

「ちよつと気になるから、あつち見えてきてもいいかな？」

見遣ればそこでも個展が開かれていた。

神河春秀展。

どうやらフラワーアレンジメントの展示をしているようだ。

「習字とか善し悪し分らないけど、あれなら楽しそうね」

「それじゃあ部屋に荷物を置いてから、みんな覗いてみよつか」

2.

「この神河春秀かみかわはるひでさんって人、顔写真とかないんだね」

配布されている無料パンフレットを見ながら、フェイトはそんなことを呟いた。

「まあ本人があまり露出したがらない人だから」

それに対して、そう答えるなのはに、四人は好奇の視線を向ける。

「何よ、知り合い？」

「うん。お母さんの」

なのはの母親はかつてフランスでパティシエをしていたという話だ。この神河氏もフランスで修行していたとパンフレットに書いてあったので、その辺りの知り合いなのかもしれない。

展示されている様々なアレンジメントは、こういった作品の善し悪しを詳しく分からないはやてにも、素敵だと思わせるものが多いある。

それは、はやてだけでなく、他のみんなも同じだろう。

「小さい頃はお花屋さんに憧れたりとかしたけど」

「こういうのを見るとやっぱりいいなーって思いはしちゃうわね」

「お花って、飾り方次第でこんな風になるんだね」

「ちよう習ってみたくならへん？」

「確かに」

五人でアレンジメントを見ながら、アレが好きコレが良いなどと話しているうちに、さほど広くもないホールを半周ほどすると、一際大きいアレンジが目に入った。

そのアレンジメントの前には——失礼ながら——花よりラグビーや柔道の方が似合いそうな、大男と、彼に寄り添うようにしている女性がいる。

（ん……あつちの女性、どこかで見たコトあるような……）

はやてが訝っていると、なのはがその男性に小さく手を振った。

「お久しぶりです。神河さん」

「ん？ どこかでお会いしたことが？」

「高町なのはです。覚えていませんか？ 小さい頃、母に連れられ数度お会いしたコトがあるんですが」

なのはの言葉に、合点がいったのか男性——神河氏は大きくうなずいた。

「ああ、なのはちゃんか。大きくなったから気付かなかった。桃子さんに似てきたね」
「よく言われます」

神河氏にそう笑ってから、なのはは訊ねた。

「ええっと、そちらの女性は？」

「ああ。彼女はアヤメ・スズライト——俺のアシスタントで……その、まあ婚約者だ」
大柄な体格にはお世辞にも似合わないはにかみ顔で、頬を掻きながら彼は言った。

そんな彼に五人は思わず微笑んで、祝福の言葉を投げかける。

それに、彼はありがとうと恥ずかしそうに応じた。

だが、当のアヤメ女史はどうにも様子がおかしい。

「どうかなさいました？」

「あ、いえ——ごめんなさい。なのは……さんでしたっけ？ 知人にあまりにそっくりだったから驚いてしまって」

フェイトに問われると、彼女は慌てて言い繕うように手を振った。

それから改めて、五人と二人は互いに自己紹介を済ませた。

「え？　じゃあ神河さんって、顔や見かけに似合わない——って言われるのが嫌で、前に出てこないんですか？」

「おかしいでしょう？」

アリサに対して、いらすらつぽい顔でアヤメ女史が笑う。

「おい、アヤメ……勘弁してくれ」

「にやはは。やつぱり相変わらずなんですな」

「そういう君は本当に母親に似てきてるよ。見掛けによらず、いたずら好きで、いじれそうな相手を見つけると目を輝かすところとかね」

「あ、それ——母だけじゃなくて父もそうです」

「俺のような人間からすると色んな意味で最悪な夫婦だ」

苦々しくうめく——が、そこには決して不快感はなきそうだ。それどころか、どこか懐かしそうな顔をしているのは、フランスにいた頃を思い出しているのかもしれない。

そうして、神河氏達と談笑をしていると、

「あの——ご歓談中に、失礼します」

横合いから、一人の女性が声を掛けてきた。

た。

だが、女性はそれを気にした様子はなく、首を横に振った。

「昔はもう少し優しかったんですけどね」

「優しかった……？」

過去形だったことが引つかかったのだろう。フェイトが思わずそう聞き返すと、女性
はうなずいた。

「私の双子の妹が事故で死んでから、少し変ってしまっただけです。一緒に橋から落ちた
のに……妹は父の娘らしく、書道家としての才能を持ってましたから。同じ事故で才能
のない私だけが生き残ってしまったから、父は——」

そこまで言った後で、彼女はハッと顔を上げた。

「すみません。余計なお話を」

慌てて頭を下げる彼女の手をフェイトが取った。

「え？」

きつと、フェイト自身も意識してやったことではないのかもしれない。

それでも、彼女の境遇と自分の境遇を重ねてしまったのは確かなのだろう。

「あ、えっと——いきなりすみません。けど、その……気持ちが良い分かったモノですか
ら、つい……」

「貴女は……」

握られた手に自分の手を重ねてから、女性は儂く笑った。

そんな彼女の笑顔に、なのはが少し哀しそうな顔をしたのは気のせいだろうか。

「ありがとう」

女性はゆつくりと自分の手をフェイトから離れた。

「それでは、神河様、スズライト様。それからお嬢様方、失礼致します」

丁寧にお辞儀をすると、彼女はそこから離れていく。

その後姿を見ながら、はやては確認するように神河氏に尋ねた。

「あの人、向こうで記者会見とかしてはった書道家先生の娘さんです？」

「ああ。大河内真百合おおこうちまゆり。あの気難しそうなオツサンの娘とは思えないくらいに、出来た

人だよ」

はやての答えてから、神河氏は大きく息を吐いた。

「何だかケチが付いちまった気分だな。せっかくだ、なのはちゃん達。話の続きがてらに食事でもどうだ？ 近くに旨いステーキハウスがあるんだ。ここで会ったのも何かの縁だし、奢らせてもらおうよ」

「ハル……奢るのは構わないけど——女の子を食事に誘うのにステーキってどうかと思
うわ」

苦笑するアヤメに対して、なのは達は顔を見合わせる。

断る理由はない。

五人はそれをアイコンタクトだけで済ませると、神河氏に笑ってうなずき、代表してなのはが答えた。

「喜んでご一緒させていただきます」

3.

「そちらは失敗作だと何度言ったら分かるんだ！ まったく、美百合みゆりならこのような間違えはしないというのに」

「……すみません、お父様」

部屋にカバンを取りに戻るといふ神河氏らをロビーで待っていると、エレベータの方からそんなやり取りが聞こえて来て、はやてはそちらへと視線を向けた。

「妹は父の才能を受け継いでいた、か」

そのやり取りに、フェイトは複雑な表情を浮かべている。

そんなフェイトの手をなのはは優しく取るつた。

「なのは……」

なのはからは何も言わなかったのは、彼女なりの優しさなのだろう。

大河内親子のやり取りはエレベータが来るまで続いた。

フェイトではないが、さすがに真百合女史が可哀想に思えてくる。

到着したエレベータが開くと、丁度それに神河氏が乗っていたらしい。

神河氏と大河内氏は僅かな間、睨み合うように動きを止め、やがて両者は互いを無視するようにすれ違った。

先程、わざわざ真百合女史が謝りに来たことといい、今の両者の様子といい、思っていた以上に激しいケンカでもしたのかもしれない。

「何をモタモタしている真百合？」

苛立ったような大河内氏の声に、はやては視線を神河氏からそちらへと戻す。

それに申し訳なさそうにしながらも、真百合女史は何故かエレベータに乗るのを躊躇っていた。

思わずはやてが眉を顰めるが、大河内氏はその理由に気付いたのだろう。

「……そんな顔をするな。このコトについては謝る必要はないと何度も言っているだろう」

無然とした様子のまま、彼は娘へと手を差し伸べた。

「とつと来い。書はともかく、秘書としてならお前はそれなりに使えるんだ。仕事は

まだあるのだからな」

そして、彼女はその手を取ってエレベータに乗ると、ドアが閉まった。

「はやて？」

「お？」

「いや、行くわよって何度も言ってるんだけど」

「すまへん。なんやぼーつとしとった」

「みたいね。大丈夫？」

「いやー、プチ旅行とはいえ、ここまで思ってたより長旅やったからな。ちよう疲れてるのかもしれない。まあ、ご飯食べれば回復するやろ」

「現金な身体ね」

「合理的やと思わへん？」

「どうかしら」

そんな軽口を叩き合いながら、アリサと共に、少し先を歩いているのは達を追いかけるのだった。

ディナーパーティを終えた後、大河内源慈は、パーティ参加者が居なくなった後で、改めて身内だけでホテル横のバーで小さな祝賀会をしてもらっていた。

ハッキリ言つてしまえば、大きな祝賀会などよりも、顔見知りだけで行われるこちらの小さな飲み会の方が嬉しいものだ。

本音を言えば日本酒が一番の好みではあるが、ワインやウイスキーも嫌いではない。その小さな飲み会を終えた源慈は、このホテル自慢のエレベーターに乗つて宛がわれた部屋に向かつていた。

ドア以外はガラス張りのこのエレベーターは、自慢というだけあつて、見晴らしが良く、ここから見える夜景も素晴らしい。

この夜景を見て欲しいが為に、わざわざ階段の踊り場の壁もガラス張りにしているのだから、オーナーがそこにこだわっているのだろう。

そのこだわりは素晴らしいと、源慈は思う。

例え相手に理解されなくてもそのこだわりを貫くことが出来るのは本物だと言える。う。

そんなことを考えながら、手に持っていた花束を見た時、ふと生意気な若造を思い出した。

そういう意味では、あの洋風生け花の小僧も間違いなくプロの芸術家であると認めて

いいだろう。

源慈自身は気に食わない点が多々ある作品だが、そこを指摘すれば食って掛かり、そこをこだわりだと宣言してのけた度胸と、そこを曲げたら自分の作品ではないと思っ
ている信念は素晴らしい。

人間としても、芸術家としても相容れないかもしれないが、それでも良き男であることは認めよう。

ただ自分と同じような気難しい性質を持っているだろう彼を思うと、婚約者だというあの女性はこの先、自分の娘と同じような苦勞をするだろう。

苦しめるつもりはないのだが、それでも作品が絡んだ時や、自分の性格から、どうしてもキツイ当たり方をしてしまう。

「そうさな……真百合は、明日辺り、近くの観光地にでも連れて行ってやるか。日頃の勞いも兼ねてな」

ほろ酔いの源慈は上機嫌のままエレベータを降りて、自分の部屋へと向かう。

良い部屋ではあるのだが、エレベータから遠いのが煩わしい。

少し歩くと、右手側に西階段が姿を見せる。

部屋の番号は忘れてしまったが、この階段の正面の部屋から、四つ先が自分の部屋だとは覚えていた。

間違っていたとしても、その前後の部屋だろうし、正しい部屋なら鍵が合う。間違っていたら鍵が合わない。そういうものだろう。

酔っているからか、かなり大雑把に考えて、源慈が階段を通り過ぎようとした時、後頭部に強烈な衝撃が走った。

グラグラとする視界と混濁する意識の中で、それでも源慈はその衝撃の原因を探る為に背後を見遣った。

そして、その正体を認識するなり、彼は階段へと向かう。

走っているつもりなのに、まったく身体が動かない。

酔っているからではない。視界が明滅し、意識がはつきりしなくて、正しく身体を動かせないのだ。

よろよろと、身体が傾くのを踏ん張りながらようやく階段へと辿り着いた。

だが、階段から降りて逃げようとした際、足を踏み外してしまった。

そのまま踊り場へと身体が叩き付けられる。

(真百合……美百合……)

自分はこの場で死ぬのだと、漠然と理解した。

だからこそ、今この場で唯一この世に残る家族のことを考える。

(真百合……お前は……)

それは、彼の最後の力だったのかもしれない。

偶然にも手放すことなく手に持っていた花束がここにある。

覚束ない手付きでそれを無理矢理解き、そして――

5.

「被害者は書道家大河内源慈。昨日、このホテルで祝賀パーティを行われており、今日は彼の個展が開かれる予定だったようです。

発見後、救急車で運ばれ、どうやら一命を取り留めたようです。発見者の手当てが完璧だったコトと、発見が早かったことが助かった要因だとか」

深夜と明け方の中間のような時間帯、部下の説明を聞きながら水樹警部補はホテルのロビーを越えていく。

裏を返せば、偶然とはいえその発見者が居なければ、被害者は亡くなっていたということだ。

「それで、その発見者というのは？」

「第一発見者は、このホテルに宿泊していた、八神はやてという十四歳の少女です」

「あら？ そんな若い子が簡単に泊まれるようなホテルかしらここ？」

「一緒に宿泊していた友人の一人が、このオーナーと知り合いだとか」
「そう」

だとしたら、連休を利用した小さな旅行か何かだったのだろう。

それがこんな形で中断してしまったのは、可哀想だとは思う。だが、少女達がここに宿泊していなければ大河内源慈は亡くなっていたのだと思えば、奇跡のようにも思える。

「まあ後付の結果論ね」

「はい？」

「独り言」

訝る部下にそれだけ告げると、現場の階段までやってくる。

踊り場には、何故か様々な花が散らばっていて、節操のない花畑のようになっていた。

その中心——丁度、人が一人横たわれるくらいの場所だけ床が見えていることから、そこに大河内源慈が倒れていたのだろう。

「一応、大河内氏が倒れていた際の写真データもあります」

「用意がいいわね」

「発見者の少女が、応急手当での前に撮っていたそうです」

「何者なのその子？」

思わず警部補がそう呟くと、それに応える声があった。

「何者言われても困りますけど……まあ知り合いに刑事さんがいますし、この手の事件に巻き込まれるんも初めてやあらへんでしたので」

河内弁に近いイントネーションの話し方。

その声のした方を見れば、前髪にバッテンの髪飾りをつけた十四歳前後の少女がそこにいた。

なるほど。この少女が、第一発見者の八神はやてなのだろう。

「もしかして、現場も保存してくれたのかしら？」

「ええ。手当ての時、多少触ってしまったんですけど、だいたいは。あ、私の指紋とか必要でしたら、取ってくれて構わへんですよ」

それは警察としてはありがたいのだが、どうにも話を聞く限り彼女の対応は現職の刑事のそれと遜色がないような気がしてくる。

いくら知り合いに刑事がいて、事件に巻き込まれるのが初めてではないとしても、ここまで冷静に対応できるのだろうか。

まるで、普段からこういうことをしているようにも思えるが。

「刑事さん？」

「ああ、ごめんなさい。よかつたら発見した時の現場の状況とか教えてもらえるかしら

？」

「はっ」

そううなずく少女の姿は、敬礼などはないが、それがあつても違和感がないほどしつかりしたものであり——ありえないことだとは思うのだが——、もしかしたら自分よりも上の階級の警察官ではないのだろうか、水樹警部補は思わずそんなことを考えてしまふのだった。

6.

夜、何となく目が覚めたはやては、その後中々寝付けなかつた為に、少し外を歩いて来ようと部屋を出た。

エレベーターへ向かう為、西階段の前を通りかかつた時に違和感を覚えて周囲を見渡していると、微かに血のような臭いを感じたのだ。

小さな違和感よりもその臭いになったはやては、その近くを見て回つたところ、大河内源慈氏が倒れていたのを発見したのである。

踊り場で倒れていた氏は、頭から血を流しており、意識は既に無かつた。

とにかく、友達を起し、ロビーへ連絡を入れ、救急車を呼び、応急処置を行った。

「普通、血を流して倒れている人を見たら慌てる人が多いはずなんだけど」

「はやてが指示を飛ばして、それになのはとフェイトが従ってキビキビ動いてるのを見ると、正直パニックとかどっか行っちゃいました」

「私もです。周囲が冷静だとわりと冷静になれちゃうんだなあって実感しました」

警部補はその二人の言葉を受けて、なのはとフェイトと呼ばれた少女達をまじまじと見遣る。

何やら二人は居心地が悪そうに身動きしている。だが、この二人も、はやてから感じたものと同じような同業者的な匂いを感じるのだ。

深く詮索しない方が良いかもしれない——そう思いながら、警部補は気を取り直す。

そもそも、このアリサとすずかという少女は、それぞれバニグンスと月村の娘さん達なのだ。だとすれば、この三人が友人であるのと同時に彼女らのボディガードなんだからとしても、驚かない……と、思う。たぶん。

「警部補。十四階、十五階の西階段近くの部屋に宿泊していた、大河内氏に関わりのある方々をお連れしました」

部屋へと入ってきたのは三人。

泣いているのは、十五階に宿泊していた大河内氏の娘である大河内真百合。

困ったように頭を掻いている大男は、十四階に宿泊している神河春秀。

そして泣いてる真百合を慰めている女性は、神河春秀の婚約者であるアヤメ・スズライト。神河春秀の隣の部屋に宿泊している。

「こういう場所に連れてこられたってコトは、俺ら容疑者つてことですか？」
「現場の近くに宿泊されましたから、事情聴取させて頂くだけのつもりではありませんが」

——そうして事情聴取を初めてはみたものの、さしたる情報は手に入らなかった。そもそも、犯行が行われたのは深夜で、部屋のドアは分厚く外の音を通し辛い。

仮に部屋の前で犯行が行われていたとしても、よほど大きな音がしない限りは、音が聞こえないし、熟睡していたのであれば、音が聞こえたところで起きない可能性もあるのだ。

真百合は事件当時、自室で習字の練習をしていたらしい。部屋の洗面台では道具を洗いづらかったので、廊下にあるお手洗いの流しに行くために一度部屋の外に出ている。その時の時間こそ分らないものの、廊下はすでに薄暗かったので消灯時間は過ぎていたようである。

神河春秀とアヤメ・スズライトの両名はそれぞれ自室で休んでいたということだ。

三人ともそれを証明する術がない。

これ以上の事情聴取はあまり意味がないだろう。

「そういえば、神河さんはフラワーアレンジメントをされているのですよね？」

「ええ？ それが何か？」

「もしよろしければ、ちよつとこちらの写真を見て頂きたいのですが」

だが、それ以外のことであれば、多少知恵を借りることは出来る。

「大河内さんが倒れられていた時の写真なのですが、彼が握っているこの花……千切れてしまっているのですが、何と言う花か、お分かりになりますでしょうか？」

見せられた写真に思わず顔をしかめながらも、それでも彼は、大河内氏が握っている千切れた植物をジッと見つめた。

「カキツバタ……ですかね？」

それからおもむろにそう応えた。

「ふむ」

さすがにこの写真からでは自信が無さそうだが、被害者が握り締めていたことからダイイングメッセージのつもりで握ったことは容易に想像できる。

カキツバタ——この植物について調べてみる必要があるかもしれない。

そうして、警部補が部下に指示を出そうとした時、

「やっぱりすごいですね神河さん」

「なのはちゃん？」

高町なのという少女がそう感心するなり、神河春秀の目がやや細まった。

7.

空気がひり付くのを無意識に感じ取ったのだろう。

はやては自分の背後にいるアリサとすずかの身体が強張った気配を感じ取った。

だが、その直後に、二人を落ち着けるためか、フェイトは二人の間に入ってそれぞれの手を握る。

「どうしてだいなのはちゃん」

「いえ、私も多少お花に興味がありますから他の人より詳しいつもりですけど、さすがに薄暗いこの写真の、しかも握り締められ千切れたものからじや、見分けが付かないですから」

「……………」

睨むような神河氏の視線を涼しい顔でやり過ごし、なののはは告げる。

「菖蒲と花菖蒲とカキツバタ。これらはプロでも時々見間違う花ですよ。それを良く見分けられるなーって感心しただけです」

なののはの言葉に、水樹と名乗った警部補の目も細まる。

すると、神河氏は観念したように両手をパタパタふって大きく嘆息した。

「わざわざ花菖蒲と言ってくれたのは、俺の為？ それとも、俺を試す為？」

「心理的にはきつと、神河さんと同じです。他の人に通じる言い方を、あまりしたくなかったから……ですわね」

「それはありがたいね。だが、さすがに隠しておく、俺もなのはちゃんもこの警部補さんからずっと睨まれかねない」

「そうですわね」

きつと、その一般に通じる名前というのは、知り合いの名前と一致してしまうのだから。

「刑事さん一応前置きしておく、今なのはちゃんが言った通り、この写真からじゃ先程の三種類の花のどれかは見分けが付かない」

「菖蒲、花菖蒲、カキツバタね。それで、花菖蒲には別称があると」

なのはと神河氏がうなずく。

そして、彼はとても苦しそうな面持ちで、その別称を告げた。

「……アヤメと言うんだ」

瞬間、アヤメ女史に視線が集まる。

「わ、私は……やってませんッ！ さつきだって、私はずっと部屋に居たって言ったじゃ

ないですか!」

「落ち着いてください、アヤメさん。まだ貴女と決め付けるつもりはありません」

取り乱すアヤメに、警部補が慌てて言い繕う。

決め付けるつもりはない——そうは言うが、被害者がダイニングメッサージとしてそれを握り締めていた以上は……

「あれ?」

ふと、疑問が湧いた。

慌てて自分のケータイから、撮影した写真データを呼び出す。

「はやて?」

「なあ警部補さん」

「何かしら?」

「何で犯人は大河内さんにトドメささへんかったのかな?」

「……どういふことかしら?」

「大河内さんは背後から鈍器で殴られた——あの傷はそういう傷ですよね?」

「ええ」

「鈍器で殴るつちゆうコトはそれなりの殺意があつた言うことや。それやったら、死んだかどうか確認するもんとちゃうかな。衝動的にやってもうたのなら、殴った後で冷静

になつて怪我の具合を確かめに行つても不思議やない」

「……言われてみればそうね」

——にもかかわらず、犯人は倒れた大河内氏の周囲にわざわざ花をばら撒いた。まるでダイイングメツセージを作らせるかのように。

「いや、ちやう……」

写真を見ていて気が付いた。

良く見れば、乱暴に開かれた花束の和紙が落ちてゐる。

「大河内さんは、わざわざ花束を開いて花を握り締める程度の余裕があつた。それだけの余裕を被害者がもっているのであれば、トドメを刺すにしろ、心変わりして助けるにしろ、犯人側にも何かをする余裕があつたはずなんよ」

それをしなかつたのは、やらない理由があつたのか、やれない理由があつたのか。

（やれない——理由……）

その理由に、はやては心当たりがあつた。

（あの時のアレが、私の想像通りの理由やとしたら……）

だが、だとしたら、この散らばつた花の理由が説明出来ない。

「ちやう、確認したいコトあるんで、出かけてきます」

「ちよつと、勝手に——！」

警部補の静止を無視して、はやては部屋を飛び出すと、十四階と十五階の西階段前の廊下をカメラに取って、見比べた。

「はやてちゃん、あんまり勝手やると、睨まれちゃうよ?」

そんな風に心配してくれるのはに悪いと思いつつも、忠告を無視して訊ねる。

「なのはちゃん……それなりにお花の知つとるんよね?」

「え? うん、まあ……」

「遺体の周囲にばら撒かれてるお花の中に、アヤメはある?」

「……たぶん、ない……かな」

「それじゃあ、オジサンの下敷きになつてる花でパツと分かるお花はある?」

「えーつと、デルフィニウムに、カサブランカ……じゃなくてシベリアかな? それから

……ガーベラに、カスミソウ……わりと、オーソドックスな花束の材料だと思ふけど」

それに一つうなずいて、今度は、

「アヤメってこれ?」

階段の前の廊下に飾られたアレンジメントひとつを指すと、なのはがうなずいた。

「なるほど。オジサンを見つけた時の違和感は、別にあの人が倒れてたからってワケ

じゃなかったんやな」

「はやてちゃん?」

「夕食の席で、神河さんは、各フロアの東西の階段前にそれぞれ違うお花を飾った言う
とったやろ？」

「言つてた気がするけど……」

訝しむなのは、はやては二つの写真を見せる。

「あれ？ 同じ？」

十四階と十五階、どちらも同じアレンジメントが飾つてあるのだ。

「せや。元々十五階に飾つてあつた花をオジサンの周囲にばら撒いたから、下の階から
半分もつてきて誤魔化したんやろな」

何故そんなことをわざわざしたのか。

それを考えていると、ふと気がついた。

「いや、おかしい。オジサンの様子を確認できなかった理由を考えると——」

頭の中で、状況をまとめていく。

大河内源慈の安否を確認しない理由。

ダイニングメツセージとして握られていた花。

源慈の周囲に花がばら撒かれていた理由。

「なのはちゃん、アヤメの花言葉を一応聞いておいてもええ？」

「えつとね……」

なのはの答えを聞いて、はやてはもの悲しげに息を吐いた。

「狙ったのか偶然か——どちらであれ、誤解と、優しさと、勘違いと、ボタンの掛け違い……つてところやな。あと、隠し事つてオマケ付けても良いかもしれへん」

「はやてちゃん？」

「証拠らしい証拠つて言うたら、安否の確認ができなかった理由そのものくらいしかあらへんけど……謎は全て解けたつてやつやな」

「さすが捜査官殿……つて言えばいい？」

「そんな大層なもんやないけど……まあ、事件解決やよ。あの刑事さんの所に戻ろうか。まだみんなおるやろうしな」

犯人は、やつぱりあの三人の中にいる。

8.

「ちよつと、はやて。どこほつつき歩いてたのよ」

戻つてくるなり、アリサにそんなことを言われて苦笑した。

もつとも、それは別にアリサだけでなく、他の人たちもそうだろう。

「まあまあアリサちゃん。ちよつと確認したいことがあっただけや」

「それで、確認したいコトってなんだったのかしら？」

水樹警部補の冷たい眼差しを受け止めながら、はやては真つ直ぐに彼女を見返した。

「それは、後ほど説明させて頂きます。一つ言えるコトがあるとすれば、犯人と——そして、この事件のあらましが分かったというコトくらいです」

「……いいでしょう」

思ったよりもあっさり、女刑事はうなずいた。

「聞かせてもらおうわ」

「ありがとうございます」

まずはお礼を告げて、それからはやては告げた。

「では、真相を話す前にちよう場所移動をしたいと思います。真百合さん、神河さん、アヤメさんも一緒によろしいでしょうか？」

三人がうなずくのを確認し、水樹警部補にも視線で確認する。

「それでは十五階に行きましょう。そこでお話を始めます」

— T o B e A n s w e r E p s o d s

【中2】魔導探偵はやての事件簿〜花に沈む書道家〜解決編

9.

「さて、それでは話してもらいましょかしら？ あなたの推理を」

階段の前まで来たところで、水樹警部補にそう促されたはやては、ひとつ頷いてからかたまり始める。

「まず——この事件は、犯人と、それとは別の人物の誤解によって、花が散らばるといふ奇妙な形が出来上がっておるっちゅうコトを先に言っておきます」

全員が訝るような顔を見せる中、はやては廊下に飾つてあるアレンジメントからアヤメを一つ抜き取つた。

「大河内源慈おほこうちげんじさんは、自分が死ぬのだと思つた時に、何かしらの理由でら自分の持つていた花束をバラして、そこからアヤメを握り締めたちゅうんは、みんな知つてる通りや」

ピコピコと、アヤメを手で弄びながらはやては続ける。

「でもそれは、ダイイングメッセージなんかやなかつた。まあ正しく言うなら、死の間際に残そうとした言葉やからダイイングメッセージで間違いないんやけど、別に犯人を示

す意味のある言葉ではあらへんかったんや」

「なんだって……?」

みんなを代表するように声を上げる神河氏。それに答えるように、はやては視線を彼に向ける。

「別の意図があつて握られたそれが、たまたまアヤメだっただけなんや。そやけど、たま通りがかりに血を流して倒れてる大河内さんを見かけた人は、それをダイイングメッセージだと勘違いしてもうた」

視線だけでなく、身体も神河氏に向きなおすと、はやては手で持っていたアヤメを彼に投げた。

それを思わずキャッチする神河氏。

はやては彼がそれを受け取るのを確認してから、真つ直ぐに見据えて告げた。

「そやろ? 神河春秀さん」

「……………」

「貴方は何かアヤメさんとイザゴザがあつた末のコトではないかと、そう勘違いして、その手からアヤメを取ろうとした。」

せやけど、それが上手くいかず千切れてしもうたんや。焦りながらも、それでもアヤメさんをかばう一心で、方法を考えた。それが、十五階にあつたアレンジを倒れてる大

河内氏の周囲にぶちまけるコトやったわけや」

千切れてしまったものは仕方ないが、不自然に千切れた花を握られているというのは、警察も何か疑う可能性がある。

「そして花束に使われていたアヤメだけ回収し、それ以外のばら撒いた花だけでなく、花束からアヤメだけを回収した」

千切れているとはいえ、握られていたのはアヤメだ。手から回収され、周囲にアヤメが散らばってれば、それがアヤメだとバレてしまう。

それを誤魔化すための苦肉の策であったのだ。

「だけど、なんで十五階なのよ？ アレンジだったら十四階にも飾ってあるでしょ？」

「うん。アリスの言う通りだと、私も思うけど」

アリスとフェイトの金髪コンビに、はやては首を横に振った。

「出来なかつたんよ。物理的に——ではなく、心理的に、な」

何故ならば、十四階のアレンジメントにはアヤメが使われているのだ。

「それをぶちまけるいうコトは、花束からわざわざアヤメを回収した意味がなくなってしまう。それに、アヤメが落ちていけばアヤメさんへの疑いをより深くしてしまうかもしれない。そう思ったんやろうな。そして、同時に自分がしてしまったコトの罪悪感から、逆に警察や救急に連絡するのが怖くなったしもうたんや」

そうして、慌てて部屋に戻った。

自分以外の誰かがいずれ見つけてくれる——と。既に死んでしまっていると思いでいたが故に。

「その通りだよ……。まさかあの時点でまだ生きてるなんて思いも見なかった」

「なぜ、確認しなかったのかしら？」

警部補の言葉に、彼は自嘲気味に口の端を小さく動かしてから答えた。

「アヤメが握られているコト。そればかりに気を取られてしまったんですよ」

「ハル……」

彼の取った行動は間違っている。間違っているが、それでもアヤメのことを第一に考えての行動だ。

それを理解出来たからこそその、複雑な表情で、アヤメが彼の名前を呟く。

「それで、その後にはやてちゃんがオジサンを……」

「いや。それもちやう。その次に、発見したのはアヤメさん。貴女やろ？」

「……………」

「そして、貴女は神河さんがやったのではないかと、そう思った。アシスタントをしとつたアヤメさんは大河内氏の周囲にばら撒かれた花が、十五階のアレンジなんやとすぐわかったんやろな」

アレンジが不自然に一つ無くなっていることが、神河氏へ繋がってしまいかもしれない。そんな想いから、彼女は近くにあった十四階の花の半分を十五階に持っていった飾ったのだ。

「でも、私じゃない……私は、あくまで花の半分を上を持っていっただけ……」

下唇を噛み締めながらのアヤメの言葉に、はやては分かっていると頷いた。

「そうやな。確かに神河さんとアヤメさんのやったコトは、犯罪や。そやけど、大河内氏を殴ったのは別の人や」

全員が息を呑む。

「犯人はたぶん、衝動的に殴ってもうたんやろ。そやけど、それで殺すことは出来へんかった。殴られた大河内さんは、犯人から逃げる為に近くの階段へと駆け寄った」

その時、殴られた痛みと薄暗い廊下という状況のせいで、階段から足を踏み外したのだと思われる。

「階段の踊り場に倒れた大河内さんの様子を本心では見に行きたかったんやろうけど、体質的にそれが叶わへんかった」

体質と、血を流して倒れる大河内氏の両方からくるストレスとプレッシャーで、結局、犯人はその場から逃げ出した。

そのせいもあり、大河内氏は意識を失う前に、花束をバラし、花を握り締める猶予が

出来たのである。

「その犯人の体質というのは？」

水樹警部補に訊ねられ、はやては答えた。

「高所恐怖症や」

多くの面々が訝る中で、いち早くなのはが階段の踊り場を見遣る。

「踊り場の壁は、ガラス張りだからだね」

「せや。夜とはいえ、そこから眼下を見れるんや。そのせいで怖くて倒れた大河内さん

に近寄れへんかったんよ」

そして、そこから奇妙な偽装の連鎖が始まってしまったのである。

「そうやろ？ おおこうちまゆり 大河内真百合さん？」

いつの間にか泣くのを止め、愕然とした視線をはやてに向けている真百合にみな視線が集中した。

「最初に、どうして花をばら撒いたのか——それを考えとったんやけど、そもそも花をばら撒く余裕があるんやったら、なんでダイイングメツセージを残させるようなことをしたのか、思ったんよ。もしかして、殴った犯人と花をばら撒いた犯人は別におるんやないかってな」

「でも、それじゃあ私が犯人だなんて……」

何かを言おうとした彼女に、はやては首を横に振った。

「まあまあ——最後まで聞いてくれてもええやろ？ 真百合さんが高所恐怖症やないかと思つたんは、昨日の夕方、エレベーター待ちをしながら、大河内さんに叱られとつた時や」

彼女はエレベーターに乗るのを躊躇つていた。それに対して、大河内氏はそれを怒ることなく、手を差し伸べていたのを思い出したのである。

「たつたそれだけのコトで？」

「確かにたんにモタモタしとるだけやつたら、そうは思わへん。せやけど、大河内氏はそれまでの怒りが嘘のように消えうせ、真百合さんに手を伸ばしたんやろ？ その直前に、妹さんと一緒に橋から落ちたとも聞いてたからな。その可能性はあるんやないかって——そう思つたんや」

そこまで告げてから、はやては軽く息を吐いて、震える真百合を真つ直ぐに見つめた。「殴るのに使つたもんはまだ処分出来てへんやろ？」

衝動的なものだつた故に、部屋に戻つて落ち着いてくると逆に怖くなつてきたに違いない。部屋のすぐそばにある階段で、先ほど自分が殴つた父親がいるのだと思うと、怖くて外に出れなかつた可能性が高い。

「どんなにキレイに洗つてもルミノール反応はそう消えるもんやない。きつと、習字道

具の中にある鈍器に使いそうなものから出て来るはずや」

部屋の中ではそうそう処分できるものでもないだろう。窓から投げ捨てるという方法も取れなくはないが、高所恐怖症であることを思えば、カーテンを閉めた後は窓に近づくようなことはしないはずである。

「それでも犯人やないし、高所恐怖症でもないって言うんやったら、まずは部屋の中を警察に調べさせて、その上で、この階段上って十六階に行く途中の踊り場から、窓の外を数分間眺めてきてくれへんですか？」

はやてに言われ、登り階段の前まで行くが、真百合はそこで大きく嘆息した。「認めるわ……お父様を殴ったのは私よ」

目を伏せて、搾り出すようにそう告げる彼女に、フェイトは思わず前に出た。

「まさか、理由は——」

「ええ。きつと、貴女には一番理解できるんじゃないかしら？」

10.

妹ともに橋から転落した事故。

二人して同じ場所から落ちたのに、生き残ったのは自分だけ。

当時こそ、父親は自分だけでも生きてくれて良かったと言ってくれていたものの、そ

れでも時が経ち、ようやく気持ちの整理が付き始めた頃から、父親の様子は変わりだした。あるいは本性が出てきたのか。

書道の話となってくると、元々人が変わるような人ではあったのだが、それがかなり露骨になってきたのだ。

妹のことばかり話した後で、こちらに当たってくる。

まるで、お前ではなく美百合が生きていて欲しかったとでも言うような様子が、心苦しかった。

それでも、せめて父親に居てくれてよかったと言って欲しくて、父親の秘書を始めた。秘書とは勝手に名乗っているだけではあるのだが、書道以外のことに無頓着な父の作品を守るという意味合いもあった。それをちゃんと理解してくれているのかは分からなかったが。

そういった部分が良く分かっていかなかったようだが、それでも、スケジュールの管理などを始めると、それなりに父もありがたがってくれた。

だけど――

初めこそ、そう言ってもらえて、昔の父に戻ってくれたみたいで嬉しかったものの、次第にやはり、辛くなってきてしまったのだ。

秘書としての事務の仕事もやって当たり前前になってしまったからか、また妹と比べら

れ始める。

それがどうしようもなく辛かった。

昨日のエレベーターの前で、怒られた時、自分の中で何か弾けてしまったのだ。

もやもやした気分のまま、それでも父のことを理解しようとした。始めた書道の真似事。たまたまその日による、その気分をぶつける為にやってみたものの気分は晴れず。

いい加減寝ようと思いい、道具を洗うべく廊下に出た時、父の後姿を見つけたのだ。だいたい酔っているようでこちらには気づいていない。

気がつくのと、持っていた道具で父を後ろから殴っていた。

父が血を流しながらこちらに振り向き、目を見開いた時、血が凍るかと思った。

その後のことは良く覚えていない。ただ、もうダメだと、ここで父を殺すしかない、と、混乱した頭で考えていたのだけは覚えている。

だが、そこで父は階段へと逃げ、そして足を滑らせた――

「その後のコトは、そちらのお嬢さんの推理通りよ」

全員が彼女の話の話を黙って聞いてた。

なんと声を掛けるべききかと、みなが悩んでいるのだろう。

そこへ最初に声を掛けてきたのは、やはりフェイトと呼ばれていた長い金の髪の少女だ。

「それでも——耐えるべきだったと、私は思います」

「貴女も、似たようなコトがあつたんでしよう？」

「はい。姉を亡くしてます。そして、母は姉を亡くしたショックで人が変わってしまいました。姉は左利きで、母の才能は受け継がず、明るい人で、私は右利きで、母の才能を受け継ぎ、そしてどちらかといえば大人しいタイプです。なのに……双子だから、母は常に私を姉とダブらせて……」

重々しく息を吐き、一度目を伏せてから、フエイトは顔を上げた。

まっすぐにこちらを見据えて、優しくも儚い赤を湛えた瞳を揺らす。

「それでも、私は母が大好きでした。姉を亡くしてから、母親は何かの研究に没頭してしまいました。でも、それが終わればきっと元の母に戻ってくれると信じてました」

「どうして？ どうして、そんな風に信じられたの？」

「だって、母さんとの思い出がありましたから。母さんの優しい笑顔の記憶が、胸こゝろにありましたから」

いつかは元に戻ってくれると、そう信じていた——彼女はそう語る。

確かに、厳格ながらも、時々自分達子供のために車を出して遠出をしてくれたことがあつた。

あまり笑う父ではなかったが、はしやく自分達を見る目は、間違いなく優しくあつた。

それでも、妹が死んでからの父は――

「私の母の研究はエスカレートして、自分の研究所まで建てました。そして、ある日、その研究所は訳があつて崩壊。たまたまそこに居た私は、なのはに手を引かれて助けられました。母さんはそのまま……」

既に、彼女の母親は死んでいる――その事実には、真百合はショックを受けていた。

いつか元に戻つてくれると信じ続けた結果は、元に戻る前の事故死。

そして、信じる事が出来なくなつた自分は、父を殺そうとした。

「だから、真百合さんのお父さんが一命を取り留めたコトに私は安心したんです」

「なんで貴女が私の父のコトを……」

「だって、私は今になって……もつとちゃんと母さんと向かい合えばって後悔してるんです。本当はあの穴に、なのはの手を振り払つても、母さんを追つて飛び込んでも良かったんじゃないかって……そんなコトまで今でも時々考えます」

でも、自分は今を生きていて、そして死んでしまつたが故に、自分の思いを母に伝えることは出来ない。

「でも、真百合さんのお父さんは生きています。だから、ちゃんともつと、向かいあつてください。自分の胸の中を、お父さんにぶつけてみてください。凶器は持たずにただ強い心を胸に持つて」

気がつけば、自分の目から涙が流れ始めている。

「わた……しは……」

何か言おうと思った。だが、言葉が何も出てこない。頭が回転してくれない。

忘我とは、こういうことを言うのだろうか。

後悔してるのか、反省してるのか、何も感じていないのか——それすらも判断出来ない。

そんなこちらの心中を察しているのだろうか。フェイトは、昨日のように手を握ってくれた。

「真百合さん」

声を掛けられ、はやての方へと視線を向ける。

「大河内さんがどんな意図があつてアヤメを握り締めたのか——それは本人に聞かないとわからへんです。でも、もしかしたら、アヤメの花言葉を知っていたのかもしれない」

「花言葉？」

聞き返すときに、チラリと見えた神河氏はハツとした顔をしていた。

いったい、アヤメにはどんな花言葉があるというのだろうか。

そして、はやての言葉を引き継ぐようになるのはがその花言葉を告げた。

「いくつかありますけど——『愛』『良い便り』、そして……」

すでに、涙で視界がぼやけている。

本当に父は死の間際にそんなことを考えていたのか。

真意は直接聞くしかない。だが、例え偶然であったとしても、アヤメが握られたことに意味があつたのではないだろうか。

『あなたが大切』

「う……ああ……くう……」

もはや涙と嗚咽を堪えられなくなっていた。

その場に崩れるようにひびきを突いて、口元に手を当てる。

どうして——自分はこんなことをしてしまったのだろうか。

「それと……なんやけど、花言葉を知らなかった場合の考え方やと……別にアヤメである必要はなかったんやと思うんよ。ただ、あの花束の中にあつたシベリア——白百合以外だったら、何でも良かったんやと思う」

涙でぐしゃぐしゃになったまま、顔を上げる。

「真百合さんは、大河内さんが振り向いて顔を見てきたと言うたやろ？ きつと、殴られた理由もちやんと理解してたんやと思う。だから、それを受け入れた。受け入れた上で、真百合さんが出来る限り容疑者から外れ、逮捕されないようにと……そう思って、わ

ざと真百合さんが怪しまれ難い、偽りのダイイングメツセージを残そうとしたのかもしれへん」

全部推測に過ぎない——そう、はやては告げる。

だが、どちらの場合であつたとしても、父は美百合ではなく、自分のことをちゃんと好きでいてくれたのだと分かつた。

「あ、ああ……」

だとしたら、自分はとんでもない勘違いの大馬鹿野郎ではないか。

「大声出して泣いちゃっていいと思いますよ」

フェイト達の友達である、もう一人の金髪の少女がそんな言葉を投げかけてくる。

その少女の横にいる黒いロングヘアの少女もそれにうなずいて、優しく告げた。

「泣いてすつきりしたら、ごめんなさいって言いに行きましょう——まずはそれからです」

子供から、まるで幼い子をあやすような言葉を投げられる。

だけど、それが嬉しかった。こんなことをした自分にもこの娘達は優しい言葉を掛けてくれる。

「年下で申し訳ないですけど、私でよければ」

そして、フェイトが崩れ落ちた自分を抱きしめてくれた。

同じような境遇の中で、それでも母親を信じ続け、今を生きている彼女が眩しかった。「私もフェイトさんのように強くなれるのかしら」

泣きながら思わず独りごちると、それにフェイトが応えた。

「それは無理だと思います」

「……………」

「だって真百合さんは真百合さんです。私じゃありませんから。だから、真百合さんは真百合さんらしく強くなって、そうして強くなったなら、自分らしくと胸を張ってください。えへん、と」

その言葉に、さらに涙があふれ出て、真百合はしばらくフェイトに抱かれたまま泣き続けるのだった。

11.

こうして、すれ違いと誤解と勘違いが交わった事件が幕を閉じた——
「せやけど、一つオマケがあるんやったな」

水樹警部補は、真百合女史が泣き止んでから、連れて行くといっていた。

そして警察署へ連れて行く途中、大河内氏の病室に寄っていくと言っていたので、そ

の後の顛末が少し想像出来た。

きつと、意識を取り戻した大河内氏は酔っ払って勝手に足を滑らせたとしても、言うことだろう。

高所恐怖症である彼女がエレベーターに乗るのを躊躇った時、大河内氏は手を差し伸べていた。本当に真百合さんのことを何とも思っていないければ、あの手は出ない。

つまりは、そういうことなのだろう。

「ま、こつちの事件のことはひとまず置いておいて……や」

念話で呼び出した人物が、どうやらやってきたようだ。

「……他人の空似じゃなかったのね……。あの子は高町なのは——エースオブエース」

「そういうことや。ま、今この場にいるのはしががない小娘捜査官だけやから、安心しい」

「良く言うわ——夜天の王の二つ名を持ち、高町なのはと並び称されるエース魔導騎士のくせに」

話題にされないフェイトちゃんがちよつと可哀想や——そんなどうでも良いことを少しだけ、考えつつ、はやては彼女を真つ直ぐ見据えた。

「アヤメ・スズライト。本名はアイリス・ベルベット。時空管理局で手配を掛けられている窃盗犯。何でまた地球におるか、わからへんけどな」

「帰らないし、逮捕されるのも御免よ」

「ロストロギア盗んだ人をハイそうですねか言うわけにはいかへんのや」

アヤメが殺気を出す。思わずはやても構えるが、彼女は大きく息を吐いて、それを消した。

「これは返すわ」

そして、デバイスの機能を使って収納してあったらしい、ロストロギアをはやてに向かって放り投げた。

「返してくれるんはありがたいんやけど、それでも窃盗は窃盗やよ？」

「……そのロストロギアには感謝してるの」

「……………」

「その本来の機能は知らないわ。でも、どん底まで落ちていた私を救ってくれたのよ。そのロストロギアは私をこの世界へと転送した。そして、ハルに出会ったッ！」

「河神さんのコト、本気なんやね」

「ええそうよ……だからミッドに帰るわけにはいかないの」

真っ直ぐにこちらを見据えてくる彼女に、はやても真っ直ぐに視線を返す。

「ややして——」

はやては力を抜くように息を吐いた。

「アイリス・ベルベツトは、ロストロギアを盗むつもりはなかった。だが、たまたま盗ん

だものがロストロギアであり、何を盗んだのかも知らぬまま逃走している最中にロストロギアが発動し、管理外世界へと転移した」

それから、まるで報告書を読み上げるかのようにはやてが語りだす。

「転移先の世界にて、少々厄介な事件に巻き込まれており、逮捕して連れ戻すコトは現地世界の混乱を招きかねない為、逮捕はせず。タイミングを見計らい対話を試みたところ、反省の色がありロストロギアは返却された。

このことから、しばらくこの世界にて様子を見ることにする。監視者はその該当世界出身であり、この事件の担当官でもある、八神はやてが行う」

そこまで言うてから、はやては肩を竦めた。

「上を納得させるのが難しそうやけど——まあこんなもんやろ。後でどん底だった理由をちゃんと教えてな。それと懲役を何とかできて、罰金だけはどうにもならへんから、そこは覚悟しておいてな」

アイリス——いや、アヤメ・スズライトがどれだけ神河氏のことを想っているかは、はやても充分に知っている。

ここで、そちらの事情なんて知るかと連れて行くことは、さすがにはやてもしたくなかったのだ。

下手したら始末書ものかもしれないが、自分の始末書一枚で、幸せになれる人がいる

のなら、それもアリではないだろうか。

無論、それは彼女が反省し、自ら更正に向かっているからだ。

さすがに、傷害現場を荒らしたことはかばい切れないが、それは地球での事件だ。アヤメ・スズライトとして、彼女は罰を受け入れることだろう。

「アイリス・ベルベットに未練はあらへんの？」

「無いといえば嘘になるけど、天涯孤独で友達もまともに居なかつたんだもの。新しい人生を歩むのも悪くないと思ってるわ。何より、アイリスよりもアヤメで居た方が幸せなのよ」

その言葉に、はやては少しだけ意地の悪い笑みを浮かべた。

「ええコト教えてあげるな。日本語ではアヤメなんやけど、アメリカの言葉だと、アイリス言うんよ？」

「え？」

「結局、どっちもアヤメおねーさんやってコトや」

それからはやては一枚の紙を手渡す。

「私の連絡先です。当分は無理やけど、しばらくしてミッドに帰りたくなったら連絡してくれば、何とか考えますよ」

そのメモがしっかりとアヤメの手に握られたのを確認すると、はやてはくるりと踵を

返した。

「それじゃあ、私はみんなのところに戻りますね。戻ったら、普通の日本の女子中学生なんですよ」

そう告げると、はやては手をヒラヒラとさせながら去っていく。

「どこが普通の女子中学生よ……」

受け取ったメモを握り締めながら、アヤメはその後ろ姿に深々と頭を下げた。

「こんな複雑になっちゃった事件を推理して解決しちゃってるくせに」

口では毒づくが、感謝で胸がいっぱいだった。

現場を荒らしたことで、自分もハルも警察に連れて行かれるだろう。

だけど、それに逃げるつもりはない。アヤメ・スズライトとして責任は取るつもりだ。

それはきつとハルも同じだろう。

「涙が乾いたら、私も戻りましょう。戻ったら、私だって普通の地球人、アヤメ・スズライトなんだから……」

[Tenderness which a flower and murderer
s hid. | closed.]

|| || || 当時のコピー本のあとがき || || ||

あとがき

お久しぶり、あるいははじめまして、北乃ゆうひです。

プライベートで色々あつて、心身ともにいっぱいばいばいで、原稿なんてやつてる余裕がなかったのですが、それでもせめてコピー誌でも良いから何か出したいと苦心して

たら、なんか妙に凝ったものが出来た気がします。

二冊でワンセットのミステリー。いかがだったでしょうか？

北乃的にミステリーは二度目です（一度目はブログ「のたり」にうPつてあります）。まあその時に二度とミステリーなんてやりたくねえなんてのたまったのですが、懲りずにやっちゃいました。

はやてが主役。単にはやてに、『謎は全て解けた』とか『事件解決やよ』って言って欲しかっただけです。

なのに、なんでこんな複雑な構成になってるんでしようねえ……（聞くな
一応、解決編を見ずとも読者が推理出来る構成にはしたつもりです。

ノックスの十戒もちゃんと守れているハズ。

きつと、たぶん。

時間的にも精神的にも書く余裕がない時に限って、こういうネタばかり沸くから不思議なものです。

それでも、このあとがきを皆さんがお読みになられていると言うことは、何とか形にはなっているようで、嬉しい限り。

本当は僕らの推理ノート風のつもりだったのですが（容疑者が三人なのはその名残）、気がつくと金田一少年風になってましたので、はやての推理ノートから急遽、事件簿に変更したりして。

あ、余談ですが、警察官をどうしよか悩んだんですよね。探偵ものにはつきものの。剣持警部とか五十嵐警部とか目暮警部みたいなポジ。

最初はとらハのリストイもってこようと思っただけ、彼女出すとサイコメトリーで事件解決しちゃうんでジョーカー過ぎて……。

そんな訳で、思いつきの女警部補さんが生まれましたとき。

え？ 警部補の名前？

ノリに決まってるじゃないですかー。

次回また魔導探偵はやてをやるとしたら田村刑事か植田刑事が出てくるかもしれない
せん（あ

さて、製本作業は後日やるのですが、仕事の都合、たぶんイベント前日に徹夜でしょ

う。きつと。

まあ、死なない程度にがんばるとします。あるいは、がんばった結果、本書があなたの手元にあることでしょう。

まだ、後書きのスペース余裕があるんですが、時間がないしネタもないので、もったいないですが、この辺で失礼します。

そんなワケで、読んでくださったみなさん。そして、色々とギリギリな北乃を支えてくれる友人や、ツイッターのフォロワーさん達みんなに、最大級の感謝を込めて（ありがとうございます）。

closed. | 22 / 10 / 2011 / 15 : 17 / ENDROLL |

【1期】アリサちゃんの恋わずらいなの？

アリサ・バニングスは自室で窓の外を眺めていた。

何か見えるわけでも何かあるわけでもなく、ただなんとなく、眺めていた。

「はあ」

嘆息。

これがどこから来たものなのかはイマイチ判然せず、そもそも理由すら思いつかない。
い。

なのはの家から帰ってくる途中からずっとこんな感じだった。覇気が出ないというか、胸が苦しいというか。確かに会ったこのない人がなのはの家に来ていたとはいえず、自分は人見知りするタイプではない事を自覚している。それに人見知りとは出合った直後に起こるものであり、ひとしきり遊んでからなるのはおかしい。

なぜか、顔も熱い。不思議と思い描くは……彼？

肩を竦める。始めて出合ったから印象に残っているだけだろう。

ぼんやりとした思考でふと気がつく。

自分の周囲には偶然か必然か、聴こえてくる喧騒はどこか遠巻きで、屋敷に人がいる

はずだし、きつとその廊下を通っているメイドとかがいるはずにも関わらず、音らしい音や声らしい声は聞こえない。

「お嬢様」

何となく自分が呼ばれた気がする。ただその声もやはりどこか遠巻きであり、まるで呼ばれているのが自分ではないように思える。

もしかしたら、ここからかなり離れた場所に住んでいる友人が家で呼ばれている声が聞こえたのかもしれないと思いはしたが、そんな自分の空想にあるはずないじゃないと胸中で苦笑した。

「お嬢様」

そもそもその友人の家に住んでいるお手伝いさんは二人とも女性だ。こんな渋い男性の声なんてだせるはずがない。

「お嬢様」

そうまるで、アリスのお付である鮫島のような――

「……つて、鮫島?」

「ああ、お嬢様ようやくお気づきになりましたか」

鮫島はホツと胸を撫で下ろすように息を吐く。

「えーつと、ごめん。ぼーつとしてたかも」

「はい。お部屋の外よりお呼びしていたのですが、お返事がありませんでしたので、無礼を承知で入室させていただきました」

深々と頭を垂れる鮫島。普段のアリサならそんな行為は適当に流す事なのだが、さすがに今回の場合、呼び掛けに応じなかった自分が悪い。にもかかわらず、頭を下げられるのは——別に珍しい事ではないが——なんとなくバツが悪かった。

「いいわよ別に。今回は返事しなかったあたしが悪いんだし」

「ありがとうございます」

こういつた時に、こんな不遜な言い方ではなくもつと寛大な物言いが出来ればきつと大人なんだろうな——などと思うが、どういう態度が寛大といえるのかよく分からない。

その為、アリサにとってはこれが精一杯の寛大さだと、本人は思っている。

「それで？ 何の用？」

「はい。夕飯の準備が出来ました事を申し上げます」

「わかったわ。それじゃあ行きましょう」

椅子から立って、少し身体を伸ばす。

「お嬢様、どうかなさいましたか？」

「え？」

突然の質問にアリサは鮫島を見、目をぱちくりさせる。

「なのはお嬢様のお宅からお帰りになられてからご様子がおかしいようですが」

「そう?」

「はい」

深々とうなずいてから、鮫島は続ける。

「ご友人方と何かおありで?」

言葉ではそう言っているが、鮫島からはどこことなく——またケンカでもされたんですか、と言ったものを感じ、それを踏まえてアリサは首を振った。

「別にケンカはしてないわよ。変わった事だつてなかったわ」

そこまで答え、少し思い出したことを付け加える。

「強いて変わった事を上げれば、フェイトのお兄さんが遊びに来てたくらいかしらね」

それだつて別に変な事ではないでしょ、と肩を竦めるアリサに、彼はどこか意味深な表情で訊いてきた。

「そのフェイトお嬢様のお兄様のお顔はどうでしたか?」

「そうね……カッコよかったけど……それがどうかしたの?」

質問の意図が分からず眉をひそめるアリサに、鮫島は自らの思考の結果を、

「お嬢様……」

淀む事なく、躊躇う事なく、詰る事なく、噛む事なく、真っ直ぐに、内角高めの剛速球——でもちよつとカーブ気味——で告げた。

「恋を……されたようですね」

実はその発言が、どんなキャッチャーも取ることが出来ない暴投であつたなど、この時のアリサは気づきもしなかつた。



クロノ・ハラオウンはゆつくりと目を開けた。

見慣れぬ天井。起き抜けの頭で周囲を見渡し、ようやく思い出す。

「そっか。なのはの家に泊まつたんだっけ」

今居るのは二階に二部屋ある客間の一室。フェイトも一緒に泊まつたのだが、彼女はなのはの部屋で寝ている。

クロノも誘われたのだが、さすがに男女が一緒に部屋なのは色々と問題があると思ひ、何とか説得してこの部屋にしてもらつた。もつとも、自称なのはの友達は同室らしいが。

「まつたく。うら……いやらしい奴だ」

誰も聴いてはいないだろうが、出かけた本音を言い直し咳払い。

とりあえず布団から出て時計を見る。一般的には早い時間ではあるが、クロノからしてみると割りと普通の時間である。仕事の関係でここ最近の睡眠時間が短かった事を考えれば、むしろゆつくりと休めたと言えなくない。

それでもやはり一般的には早い時間であるため、あまり物音を立てるのはまずいかもしれないな……などと考えていたのだが、どうやらそれは考えすぎであったようである。

「わりと……みんな起きてる？」

隣の——なのはの部屋のみんなはまだ起きてはいないようだが、この家全体としては目覚め活動していた。

「なら……」

クロノは手早く着替えると、運動がてら庭へと出る。

ちようどそこへ、早朝のロードワークから恭也が帰ってきた。

「おはようございます。恭也さん」

「ああ、おはよう。早いなクロノも」

「ええ。少し、運動をしようかと思ひまして」

「そうか」

相槌を打ってから恭也はややクロノを見つめる。

「あの……なんですか？」

「いや……クロノ。腕に覚えは？」

「それなりには」

その答えに恭也は満足そうにうなずく。

「それじゃあ、適当に身体が温まったら道場に来ないか？ 一本やろう」

「僕でよければ」

微かな笑みを浮かべるクロノに、恭也も小さな笑みで返す。

どこことなく、よく晴れた早朝に似合うような、そんな爽やかに感じなくもない二人のやり取りの間に一陣、優しい風が吹く。

だが、

「ほーほっほっほっほっほっほ」

唐突に、そんな空気をぶち壊す気満々としか言いようがなく、その上で大よそご近所の迷惑を考えていない高笑いが響き渡った。

あまりにも怪しい。怪しすぎるその高笑いに、クロノと恭也は臨戦態勢で声した方へと身体を向ける。

そこには――

パチパチパチ拍手が聞こえた。

「——な!？」

「——ッ!？」

その拍手から遠ざかるように、クロノと恭也はそれぞれ飛び退き驚愕する。

「きよ……恭也さん……この人……」

「ああ……まったく気配がなかった」

二人にしてみれば戦慄に値する事態だ。この初老の男性——鮫島氏に殺意があったのなら、間違いなくやられていた。

だが、そんな二人を余所に、鮫島氏は素晴らしいものを見せてもらったかのように自らの主人に賞賛を送る。

『デモンストレーション』としては完璧でございませうお嬢様。『あの人の振り向いてもらいたい。気付いて私の小さな思い作戦』……今の感じでしたらお嬢様が思いを寄せる殿方もきつと振り向く事でしょう。その証拠にこちらのお二方は振り向かれました」

「ていうか……あんな高笑いされたら誰だつて振り向く」

クロノは執事とその主人にツツコミを入れるが聞く耳を持っていないようである。

「突つ込むべきは作戦名だと思ふんだが」

呆れたように、恭也。

だが、どうであれ二人は聞いちゃいない。

「して、お嬢様——アリサお嬢様が一目惚れしてしまったかも知れないというクロノ様とはどちらに?」

「え? そこ。鮫島から見ても左。恭也さんじゃない方の男の子」

指を差し事も無げに言うが、鮫島氏の顔は先ほどのクロノと恭也とは比べ物にならないほどの驚愕した顔をした。

そして、

「いけなああああああいい!! 危険が危ないですぞお嬢様ああああああつ!!」

叫ぶなりアリサを抱きかかえて思い切り跳躍した。間合いが開く。いや——この場合、間合いが開いたからどうだという事もないかもしれないが。

「さ、鮫島?」

「危ないところでしたお嬢様。極秘裏に練習していたはずの『届け私の思い。どこまでも作戦』が敵に漏れてしまっていたようです!」

「作戦名が違っていないか?」

「まさか、ターゲットがこの場所に居るとは私の想定外でした!」

「さつきから僕ら、ナチュラルに無視されてますね」

「ああ」

話の流れからすれば一応当事者と言えなくもないハズなのに、すっかり蚊帳の外気分な二人は同時に嘆息する。

と、それと同時に今更ながら、クロノは鮫島氏が実はさりげなくとんでもない事を言っていた事に気がついた。

「二目惚れ？ 誰が？ 誰に？」

聞くまでもないし自問するまでもない。そもそもその答えは彼が口になっている。

「えーつと……」

「しかしわざわざ向こうから出向くとうは好都合。さあ、お嬢様こちらを」

当惑しているクロノを余所に、執事はアリサに何やらスイッチのようなものを手渡す。

「それは昨晚お嬢様がお考えになられた作戦をベース私が作りました恋文ボタン。名づけて『一所懸命恋をしました作戦』。さあ、それを押せば彼方よりクロノ様へ恋文が届きますぞ」

「うん。それはいいんだけどさ、鮫島。あたし、ラブレターなんて書いた覚えはないけど恋文ボタン——とか言うらしいそのスイッチを受け取りながら彼女は首を傾げる。」

「はい。それに関しましては、僭越ながら私が」

「書いたの？」

「はい」

クロノの問いに恭しくうなずき、続ける。

「お嬢様のお気持ちを考えまして、お嬢様になりきり一字一句お嬢様の筆跡をコピーして書かせていただきました」

「恐しくて心底想像したくない絵面だな」

うかつにも鮫島氏が乙女の恥じらい風にラブレターを書いているシーンを想像し、まった恭也は心に深い傷を負いうめく。

「ささ、お嬢様。ボタンを」

そんな落ち込んだ恭也を無視して、執事は主人を促す。

「なんか釈然としないけど、まいっか」

「押すのッ!？」

いともあっさりとボタンを押したアリスに驚くが、それから間もなくクロノに向かって何かが飛んできた。

それはクロノの目にも恭也の目にをしつかりとした形で移っていた。

矢。その矢尻には何かが結んである。矢文だ。間違いなく。

それが、クロノの脳天めがけて飛んでくる。

「わっ」と

声は出したがとりたてて慌てる事なくクロノは余裕を持つて避けた。

しばらくそれを無視していたのだが、やがて、

「なぜ、その文を手に取りお読みにならないのですかクロノ様！ お嬢様が一日千秋の思いで一睡もせずに書上げたという涙なしには語れないシロモノだというのに！」

「さつきあなたが書いたって言って言ってませんでした？」

「そんな妄言でお嬢様の思いを踏みにじるのですか!？」

「そうよ！ あたしが一生懸命に書いたのよ！」

胸を張りさあ読めと言わんばかりのアリサと、ハンカチを噛み、ああ口惜しやと嘆く
鮫島氏の対応に困りながら、クロノは恭也に目配せをする。

沈痛な面持ちで恭也はうなずく。

気重げに、クロノは矢へと近づくとその文に触れた。

刹那——クロノの経験から来る本能が警鐘を鳴らす。それに伴う反射神経に身を任せその場所から一瞬にして飛び退いた。

何故か矢があつた辺りに土煙が俟っている。やがてそれが静まると土煙の原因が姿を見せる。

それを見、

「ちよつと待てえええええつ!!」

クロノと恭也は同時に叫んだ。

手斧。狩猟用の投げやすい斧。ハンドアクスとか呼ばれるアレが、矢を砕き地面を割るように刺さっていた。

「ちっ」

執事の舌打ちが聞こえた気がする。被害妄想が生んだ空耳かもしれない。

「鮫島……あれはさすがに……」

「何をおっしゃいますお嬢様」

斧を指差す主人に、大仰な仕草で首を振ってから諭すように告げる。

「よろしいですか？　すでに矢文とは時代遅れなのです！　今の時代は火力！　だからこそ、斧文の時代が到来したといえるのです」

「そうだったの……知らなかったわ」

なぜだか言いくるめられてしまっているアリサを横目にクロノと恭也は——まだ何か飛んでくるのではないかと警戒しながら——斧を見る。

その刀身に、字が彫ってあった。丁寧な女の子の字で。

「やっぱり、この文字ってあの人が彫ったんですかね？」

「だろぅな……」

うんざりとしながら、二人は彫ってある文字を読む。

【私の変人になってください】

頭が痛くなった。きつと気のせいではないはずだ。

「嫌な誤字だなあ……」

「まったくです」

二人して頭を抱えていると、ヌツつと二人の間に執事の顔が現われてた。

「わッ!」

「うおっ!」

「またも心配なく近づかれさすがにプライドが傷つき始めたクロノと恭也を横目に鮫島氏はじーつと斧を見つめ……そして、

「しむうあああああつたあああああつ
!!!!!!」

叫んだ。

その後、アツと言う間にアリサの横まで戻ると沈痛な面持ちで主人に告げる。

「申し訳ございません。私としたことが……」

「どしたの?」

イマイチ事情を理解できずアリサ。

さすがにあの位置から斧に書いてある文字は読めないらしい。

「私とした事が語尾に読点を打ち忘れておりました」

「誤字はッ!?」

「もう止せクロノ。もう言葉は通じない。甘んじて鮫島さんの行動を受け入れよう」

「そんな意味不明な泣き寝入りって……」

妙な悟りを開いた恭也にクロノは涙する。

「しかし……」

そんな二人を知ってか知らずか、鮫島氏はこちらに意味ありげな視線を向けて、ふむ……とうなずく。

「ここまで私とお嬢様を追い詰めるワナが用意されているとは」

「あたし達……何かされた?」

ワリと冷静なアリサに執事は大げさにうなずく。

「はい……ですので一旦はここで退きましよう。クロノ様に出会ってしまったせいかわりサお嬢様のお顔も赤くなられていますし」

言うが早いか、鮫島氏はアリサをお嬢様抱つこで抱き上げると恭しく一礼をしてから、身体をこちらに向けたまま背後へ向かつて跳躍。塀の上に着地する。

「それではクロノ様、恭也様。また後日、日を改めてお伺いいたします。では」

再び礼をすると、なぜか一瞬だけ強風が吹いた。その風に二人は思わず目を伏せる。目を開くともうそこには執事の姿も気配もなく、なぜか主人の気配すらなくなっている。

た。

しばらく呆然としていたクロノはやつとの思いで、

「な、なんて面妖な……」

喉からその言葉を搾り出す。

そんなクロノよりもう少しだけしつかりと立ち直った恭也は彼の肩をポンと叩き告げた。

「よかったな。君を好いてくれる女の子がいたぞクロノ」

恭也にしては珍しい——非常に珍しい爽やかな笑顔でそう言うと言の中へと消えていった。

「え？」

ぐるぐると、よかったなという言葉が頭の中を回り続け呆然とするクロノ。

アリサと執事が現われる前に吹いたような朝に相応しい爽やかな風が、そんな彼の頬を撫でていった。



「おはよーすずかちゃん」

「おはよう。なのはちゃん」

「あれ？ アリサちゃんは？」

「うん。風邪引いちやっただって」

「確かに、昨日の帰り、ちよつと辛そうだったけど……」

「帰り、お見舞いに行こうか」

「うん……あ！ そういえばアリサちゃんって言えば……」

「どうしたの？」

「お兄ちゃん、クロノ君組みとアリサちゃん、鮫島さん組みが言い争ってる夢を見たんだ」

「全然想像できない夢だね」

「あ、あははは……で、朝起きたらさ、夢と同じ光景が外で展開されてた気がしたんだけど……気のせいだよ」

「そうだよ。四人が争う理由なんてないし」

「そうだよ。夢、夢」

「うんうん」

「こんな寒い日の朝にネグリジェ姿で高笑いなんて、いくらアリサちゃんでもしないよね」

「それ、ほんとどんな夢？」

結局、アリサの顔が赤かったり、呆っとしていたのは、多々単純に風邪をひいていただけという。まあわりと、そんなどうしようもなくどうでもいい話。

【t h i s b u t l e r a d v e n t | c l o s e d .】

【Vivid】Red hot Idol Worship
pizza

1.

「あ、せや」

道を歩きながら、不意にはやてが何かを思い出す。

「これから行く村なんやけどな、閉鎖的な村やから充分に警戒するようにな。特にヴィオとシヤンテ」

ミッドチルダ北部ベルカ自治領のさらに北東。

聖王教会本部の北東にある荒野地帯を抜けた先にある、枯れ木の森。そこは、旧ベルカ領にして、当時は聖地の入り口とも言われていた土地である。

現在のナワバリで言えば、管理局と聖王教会との管理区画のちょうど境目だ。

八神はやてが、シスター・デイド、シスター・シヤンテ、ヴィヴィオと共に向かっているのは、ちょうどその境目にある村である。

「その村で、私のコトを司令って呼ぶんと、ヴィヴィオのコト陛下って呼ぶんは禁止な」
「では、なんとお呼びすれば？」

ストレートヘアに赤いヘアバンドをした聖王教会の教会騎士——ディードの問いに、はやては軽く逡巡してから、答えた。

「私のコトは隊長とかでええよ」

「じゃあ、久しぶりに部隊長つて呼んじやおう」

何やら嬉しそうにそう言うヴィヴィオに、

「おう。それでええよ。何だつたらなのはちゃん達のように、はやてママでもええし、せつかくやから、はやてちゃん呼んでくれてもええからな、ヴィヴィオ」

「はいッ、ぶたいちよーッ！」

「快活な笑顔で無視かいッ」

にこやかな笑顔ではやての言葉をスルーするヴィヴィオ。

そんなヴィヴィオとは裏腹に、複雑な顔をしているのがシャンテだ。

「八神隊長はともかく……陛下のコトをなんて呼べば……」

ヴィヴィオがそんなシャンテの手を取って、キラキラ輝く瞳で告げる。

「名前を呼んでッ！ ヴィヴィオって！ 呼び捨てで全然おっけー！」

「え、ええ……、でもな……」

見習いとはいえ、聖王教会のシスターだ。

自分達が奉る聖王陛下の直系であるヴィヴィオの名を、気軽に呼ぶのは気後れしてし

まう。

「では私は、チャンピオンやヴィクターお嬢様のように、ヴィヴィお嬢様と呼ばせていただきます」

「はいッ！ 陛下よりもそつちの方で常と呼んで欲しいですッ」

「ふふ。気に入って頂けたようで何よりです、陛下」

「もーッ！ 陛下つて呼ぶの禁止ーッ！」

「ああ、何だか久々に聞いたお言葉です」

「実は軽く私のコトからかかってるッ!？」

「そんなコトありませんよ、陛下」

「うー……」

ヴィヴィオがデイドに唸っていると、シャンテが意を決したように告げた。

「じゃあ、あたしはヴィヴィ様つて呼ぶ」

それにヴィヴィオは表情を一転させ、再びシャンテの手を取った。

「様なんていらなによッ、シャンテ！」

「いやです。ヴィヴィ様」

「もー！ シャンテのいじわるー！」

別にシャンテも意地悪をしているわけではないのだが。

そのまま、ヴィヴィオとシャンテが仲良くじゃれ初めているのを横目に、デイドがはやての横に着く。

「わざわざ呼び方を指示したのは何故なのですか？ 陛下呼びの禁止は、村のコトを思えば理解出来るのですが……」

これから向かう村は、聖王教会と袂を分かった別の一派が作った村とも言われているのだ。そんな場所で、ヴィヴィオを陛下と呼ぶのは危険が伴う。

「司令呼びに関しては、こんな辺境の村にわざわざ重役が来たってコトで変な警戒させてまう可能性があるしな」

その言葉にデイドがうなずく。

「理解しました」

それから申し訳なさそうに、告げる。

「それにしても、申し訳ありません。八神司令。せっかくの休日でしたのに、陛下共々このような辺境につきあつて頂いて」

「構へんって。私も歴史に関するもんは好きやしな。仕事で来てるデイドとシャンテはともかく、二人に好奇心で同行しとるヴィヴィオには保護者が必要やろ？」

本来の保護者である母親二人は生憎と、今日明日の連休を取れなかったのだ。なら自分が買つて出るのもやぶさかではない。

「こちらとしても、司令にお付き合い頂けるのは心強くあります。改めてよろしくお願
いしますね」

「おう。このはやてさんに、任しとき」

丁寧にお辞儀をするデイドに、はやてはそう言いながら笑顔を返した。

2.

オリヴィエ・ビレッジ。

現在、管理局・聖王協会双方で合同調査している遺跡『忘れられた望郷ぼうきょうの園跡えんせき』のほ
ど近くにある村。歴史的な観点から見ると、この遺跡と村には関連があると思われる。

最後の聖王オリヴィエ・ゼーゲブレヒトの名を冠したこの村は、非常に閉鎖的である。
生活の大半を自給自足で賄っており、村人達が村の外へ出てくることは滅多にない。

土地柄、わざわざ赴く者も少なく、その為に噂や憶測ばかりが飛び交い、詳細不明の
村とされている。

聖王教会と袂を分かった者達が作った村ともされており、それにも関わらず村名に聖
王オリヴィエの名を冠することから、聖王——特にオリヴィエ——に対し、偏執的な信
仰をしているのではないかと推測される。

もつとも、それらは全て外からのぞき込んで得た程度の情報に過ぎず正確さには欠くので留意されたし。

「……というのが、上から手渡された資料なのですけれど……」

ホロウインドウを閉じて、改めて村の入り口を見ながらティードが困ったような顔をする。

「閉鎖的な村……かあ……」

同じような顔で、シャンテもその入り口を見る。

「閉鎖的で偏執気味って聞くと、来るもの拒んで去るもの殺すみたいなイメージあるんやけどな……」

「うーん……そんな物騒でも、閉鎖的でもない気がするんだけど……」
首を傾げるはやてに、ヴィヴィオは苦笑する。

——おいでませ、オリヴィエ・ビレッジ——

——旅人さん・旅行者さん、大歓迎——

「どうなんや、この横断幕は……」

村の門から向こうは人の姿がほとんどなく寂れた様子ではあるのだが——ここだけ

妙に派手なのだ。

「歓迎されている……のでしょうか？」

デイドの疑問に、はやては答える術が見つからない。

入り口だけみれば大歓迎ムードのだが、村人がこちらに気づいて近寄ってくるわけでもないところが判断に困る。

「まあ、入ってみれば分かるんじゃないかなあ……」

シャンテの言うことももつともだ。

そもそも、この二人のシスターは、この村の詳細の調査に来ているのだ。

何事もなく友好的であるなら、『望郷の園跡』調査隊のキャンプ地として宿泊施設を借りれないかの確認をする。

古代遺失物や遺跡の類を隠しているようであれば、出来る限り穏便に調べる。

その辺りのことをしつかりと確認するのであれば、村に入るしかない。

「せやな。とりあえず、入らないとあかん」

四人は改めて互いの呼び名について確認しあうと、若干の緊張と共に、村へと足を踏み入れた。

3.

いぎ、横断幕をくぐって村へと入ってみるものの、人の気配は乏しく、歓迎されていないとは思えない。

村の中心には、奇妙なモニUMENTが建っているのだが、その周辺にも村人らしい村人は居なかった。

いや、正しくは居ないわけではない。

確かに周辺から視線のようなものは感じているし、人の気配もある。だが、村の中を歩いている人が居ないのである。

「この手のモニUMENTっていうんは、人が集まりやすいはずなんやけどな」

ましてや、村の中心にあるのだ。おばさん達が井戸端会議するにはもってこいのものだろう。

「それにしても何を象ったものなんだろうね？」

「直立したナメクジの背中から四本腕が生えたような……かろうじてナメクジになる前は人型だったような……そんな魔王の像？」

首を傾げるシャンテと、見たままの感想を口にするヴィヴィオ。まったくもって、子供は素直である。

「案外、オリヴィエ陛下を象っている可能性もありますね」
「せやな」

デイドの言葉に、ヴィヴィオの口元が引くついた。

「聖王教から袂を分かった宗派や。考え方によつては、聖王を魔王扱いする邪教であってもおかしくはあらへんしな」

「ううっ……魔王扱いでもこんな姿は嫌だなあ……」

はやてとデイドのやりとりに、ヴィヴィオがガチで落ち込む。

「ほ、ほら！　へ……ヴィヴィ様！　まだそうと決まったワケじゃないからッ！」

そんなヴィヴィオの肩に手をやりながら、シャンテが必死にフォローする。

それを横目に見、苦笑しながらはやては腕を組んだ。

「しかし、デイド。どないする？　手分けして回るほど広い村やないし、せやかて村人に会えへんとなると、調査も何もないよ？」

「そうですね。人の気配はあるのですが……みな、家から出てくる気配はないようです……」

デイドは顎に手をやり、困まり顔で考える。

「部隊長、デイド」

「ん？」

「はい?」

ヴィヴィオに呼ばれ、二人はそちらへと顔を向ける。

「あれあれ」

その横で、シャンテがいずこかを指差した。

そちらに二人が視線を向けると、なにやら看板の掛かった民家がある。

位置としては、やや村はずれと呼んでも良さそうな場所であるが――

「……『オリヴィエ・ビレッツジ名物遺跡探検アドベンチャー』……?」

口に出してその看板を呼んで、はやては眉を顰めた。

「閉鎖的な村……なんですよね?」

あまり表情を崩さないデイドも、さすがに困惑を顔いっぱい浮かべて訝つてい
る。

「とりあえず、行ってみない?」

「うん。行ってみよう」

シャンテとヴィヴィオは行く気満々のようだ。

もつとも、現状では特にやることもない。看板が出てる以上は何らかの催しがあるの
だろうから、行く価値はゼロではないだろう。

「せやな。どうや、デイド?」

「異論はありません」

そうして、四人は手書き感溢れる——ポップでフレンドリーなモノを目指すも、センス古くさく、しかも一昔前のセンスだったとしてもそれすら外した感じの——看板の掛かった建物へと向かうのだった。

4.

「……これ、開けていいんだよね？」

「ヴィヴィお嬢様のお気持ちは充分に理解できますが、これが何らかのアトラクションや催しであるのなら、特に我々が遠慮をする必要もないかと」

などとデイドは答えるものの、やはり彼女も躊躇いはあるようだ。

そんな二人をよそに、

「んじゃ、私があけよーっと」

シヤンテは躊躇いなく、ドアに触れた。

玄関とは別に、『入り口』と掛かれたプレートの下がったその扉が開き、中へと入って

いくと——

「……ッ!？」

やたらと驚いた顔の初老の男性が待っていた。

「や、驚かれても困るんやけど」

はやてが思わずそう言うのと、男性はハツとしたような顔をしてから、営業スマイル——

「だろう。たぶん。かなりきこちないが——を浮かべた。

「ようこそ。久々のお客さん過ぎて反応できなかつたよ」

「一応、歓迎はしてくれるんだ」

シャンテのわりと失礼なもの言いにも、彼は特に動じた様子なくうなずく。

「こんな村だからね。余所から来る人が珍しいんだ。村おこしとかがんばってるんだけ

どね」

「村おこしって……村の入り口の横断幕とか、この家みたいなの？」

ヴィヴィオの問い、男性は大きくうなずいた。

「ああ。なのに、何故か余所の人達が来てくれなくてね」

何故だろうと首を傾げる彼にツツコミを入れるべきか否かを逡巡して、はやては肩を

竦めた。

ツツコミは入れずに、出し物の内容を訪ねることにしたのだ。

「ところで、遺跡探索言う看板でてますけど？」

「ああ。本物の遺跡の中を歩けるよ。大人八百、子供五百ね」

「ほい二千六百」

「まいどありー」

はやては躊躇いなくお金を出して、話の先を促す。

「その暖炉が入り口になってるよ。狭いから気をつけて。それと、順路から外れた場合の安全は保障しないよ」

「逆に言うと、順路から外れない場合の安全は保障していただけるのですか？」

デイードの問いに、彼はうなずく。

「遺跡管理人の名において。そこは誠実に」

雰囲気だけなら、信用してよさそうではある。

「ところでおじさん、この暖炉の先にある遺跡に名前つてあるの？」

ヴィヴィオの質問に、おじさんは笑顔で答える。

その顔は、孫を見るような笑顔だ。

「村のモンは、『見棄てられた聖棺』って呼んでるな」

最初こそぎこちない笑みだったが、本当にお客さんを待ち望んでいたのかもしれない。

「ロスト・アーク……」

彼から教えてもらった名前を、ヴィヴィオは舌の上に乗せる。初めて口にするのに、何故か初めてな気がしない。

「ヴィヴィオ。ぼーつとしとると置いてくよー」

「あ、みんな待ってー」

暖炉の縁に手を掛けているはやてに呼ばれ、ヴィヴィオが慌てて後を追う。

そうして、暖炉から『見棄てられた聖棺』へと入っていくはやて達。

四人が完全に遺跡の中へと入ったのを確認してから、管理人は旧式の通信装置の受話器を手を取った。

「わたしだよ、ターク」

『ああ、管理人か。どうした?』

受話器の向こうにいる男——タークは、どうやら先ほどまで寝ていたらしい。どこかぼんやりとした調子だ。

「ちゃんと身だしなみを整えてくれよ。久々のお客さんだ」

『ほう?』

「しかも、英霊派のシスターさんご一行だ」

『それは楽しみだ』

管理人の言葉に、タークは受話器越しにもハッキリと分かるほどの好奇の笑みを浮かべて見せる。

「そんなワケで、丁重におもてなしをしてくれよ」

『任せておけ。それが仕事だ』

タークの意を確認すると、管理人は受話器を置く。

それから、スプリングがヘタれた椅子に深く座りながら、天井を見上げて嘯うそぶく。

「さあ、お客様ご一行。遺跡探検ツアー……存分に楽しんで下さいませ」

5.

「そういえば、私やシスター・デイドの格好にツツコミとかなかったね」

暖炉内の階段を先行して降りながら、両手を頭の後ろで組んでシャンテが拍子抜けしたように言った。

「言われてみればそうですね」

それにデイドはうなずき、はやても同意する。

「聖王教として袂を分かった村やからな。村人が出てこないのも、修道服を見たからかもしれへん……と、思っと思ったんやけどもなあ……」

「どういうコト？」

唯一その意味が分からなかったらしいヴィヴィオが、子リスのように首を傾げる。

「ほら、この村が聖王教と袂を分かった人達かもしれないって資料にあつたでしょ？」
「うん」

「だから、聖王教の別派閥でもある私たちに敵対心とか警戒心みたいのがあつたんじゃないかなって、思ってたんだけど」

「あ、そっか」

シヤンテの解説に、ヴィヴィオが納得する。

「だけど、実際には普通に歓迎されてたよね？」

そのヴィヴィオの素直な言葉に、はやては苦笑しながら、告げる。

「この管理人のおじさんは、な」

「少なくとも、村人全員が歓迎してくれている——と、考えるのはいささか早計ですよ、ヴィヴィお嬢様」

はやての言葉をそう補足するデイドに、ヴィヴィオは眉を顰めた。

「うーん……そうじゃないといいなあ……」

そんなやりとりをしていると、石造りだった階段の感触が金属的な硬質感に変わったのに気づく。

「お？ そろそろかな？」

楽しそうにステップを踏んで降りていくシャンテ。

「あ、シャンテ！ 私が一番乗りしたい！」

それを追いかけていくヴィヴィオ。

彼女達とは裏腹に、はやてとデュードは難しい顔をする。

「本物の遺跡っぽいなあ」

「ええ。管理局も教会も関知していなかった遺跡が、まさか観光スポットにされているとは……」

「本当に観光スポットなんかも怪しいけどな。トラップなんか生きておつたら、余所者の処刑場代わりに使えてまう」

「陛下達を止めなくても？」

「あの二人やしね。そこまで過保護にせんでも平気やろ。怪しい思つたら、進む前に私たちに確認するって」

そうして、階段を抜けると、そこは金による装飾をされた煌びやかな場所だった。

「すっげー！ なにこれー？」

シャンテは素直に驚いているが、その横でヴィヴィオが複雑な表情を浮かべている。

「部隊長、デイド。この感じって……」

「せやね。《ゆりかご》にそっくりや」

「聖王に縁のある地——それ自体は、偽りではなさそうですね」

とはいえ、ここで立ち止まっていても仕方がない。

「とりあえずは、順路って看板通りに進もうか」

はやての言葉に異を唱えるものはおらず、ひとまずは看板通りに進むこととなった。

6.

順路と書かれた廊下を歩き、最初に遭遇した扉。それを開くと——

「何これ……」

シャンテが思わず顔をしかめた。

「アンチマギングフィールド。本気で、生きた遺跡なんやね」

はやてが小さく呟く。

「通称AMF。シャンテはまずこの環境に慣れるのを優先してくださいね」

「慣れろって言われましても」

デイドに言われ、シャンテは困ったように顔を顰める。

魔法を使う際に必要な、魔力結合作業。AMFはその内部での魔力結合を阻害する性質を持つ一種の結界だ。

初めて足を踏み入れるシャンテに、この環境に慣れろというのは、些か酷な話かもしれない。

「ヴィヴィオも影響受けとるん？」

「うん。解除命令とか出来るかなーって思ったけど、そもそもどこへ命令を飛ばして良いやら……」

「では仕方がありません。注意して進むとしましょう」

「ううっ……何で三人とも平然と……」

身体が重たいような、五感が鈍るような——何ともいえない奇妙な感覚に平然としている三人を見、シャンテがうめく。

「実を言うとな、あの機動六課はこの環境に対して特化した部隊やったんよ」

「私は、血筋柄どうしても関わっちゃうからね……部隊長達に頼んで時々訓練を」

「私はそもそもAMF環境下での戦闘を前提とした訓練を受けてますので。付け加えるなら私のツインブレイズは、AMFの影響を一切受けない能力です」

「管理局の魔導師も、教会の騎士も、AMF環境下で戦える人は少ないからなー。そういう意味やと、期待されとるんやで、シャンテ」

「……どういコトですか？」

自分以外がこの環境に慣れていくことに、若干疎外感を覚え、心なし不貞腐れているシャンテに、はやてが微笑む。

「デイドにオットー、それからセイン。そしてシスター・シャツハ。」

現状——教会属の騎士で、今みたいな本格的なAMF環境で戦闘が行えるのはこのくらいやろ？」

それに、デイドがうなづく。

「はい。管理局以上に、AMFに対する危機感が薄いことは否めません。教会の在り方を思えば、危機感云々以前に関わらざる得ないはずなので、訓練するべきなのですが」

「えーつと、つまり……？」

はやてとデイドの言葉に眉を顰めると、ヴィヴィオがシャンテの後ろから抱きついた。

「つまりツ、シャンテは修道騎士として期待されてるってコトツ！」

「AMFの恐ろしさというのは、本物の触れたコトがないと分かりませんからね」

「すぐに馴れる言うんは当然無理や。せやけど、やばいつて言うんは、分かるやろ？」

「はっ」

はやての言う『ヤバイ』という感覚は良く分かる。

この影響下で、デイドみたいに影響の受けない能力者に襲撃されたら、教会騎士は間違いなく全滅するだろう。

「……あ、もしかして、何年か前に管理局の地上本部が襲撃されたテロ事件って……」

「だいたい、想像通りやと思うよ。もつとも、それでも尚、AMFはレア環境や言うて、危機感薄いお偉いさんが少なくないんが問題やね。局にも教会にも」

やれやれとはやてが肩を竦めると、デイドがバツが悪そうに身動きする。

「さて、お喋りはぼちぼち終わりにして、もうちよつと先へ行つてみよか」

それから、道中――

おおよそこの遺跡が、いったい何の遺跡なのかが分からなくなるような奇妙なギミツクが大量に仕掛けられていた。

飛行系・浮遊系の魔法へ特に強く作用する特殊なAMFが発生している部屋では、あちこちに床を階段化させるスイッチが設置してあり、順番通りに入れていかねば、先に進めなかった。

防壁系・障壁系の魔法へ強く作用する特殊なAMFが発生している部屋では、指定さ

れた通りの床を踏み損なうと、矢や火の玉が飛んでくるなど危険きわまりない部屋もあつた。

他にも色々あつたのだが、そういうトラップをいくつも潜り抜けていると、さすがにみんな疲労困憊にもなる。

「ぶたいちよー。ここ、AMF抜きにしても、疲れます……」

「それは私もや……」

安全を確認した壁に寄りかかりながら、ヴィヴィオとはやてがぐったりとうめく。

「シスター・デイド……魔法が使えないって、すっごい怖いし大変ですね……」

「ええ……まあ。しかしAMF抜きに考えても、この遺跡のトラップは流石に少々過剰な気もしますが……」

普段はあまりポーカーフェイスを大きく崩さないデイドも、さすがに疲労を隠せないようだ。

「やっぱ、本気で処刑用の会場とちやうんか、これ」

思わずうめくはやてに、誰も異を唱えようとはしない。

「順路から外れちゃったのかな、私たち?」

ヴィヴィオが首を傾げると、シャンテが右手で持つ双剣で壁を示した。

「……あはははは……」

それを見て、ヴィヴィオは乾いた笑いを浮かべる。

そこには、扉の横に順路と書かれた張り紙があった。

つまり、これまでの道程は間違えていないということになる。

「一息ついたなら、先へ行こか。ずっと休憩してるワケにもいかへんしな」
はやての言葉に全員がうなずくと、順路と示された扉を開けた。

7.

そこは少し開けた部屋だ。

壁や地面が隆起している——というべきだろうか。六角形をした模様が敷き詰められたような部屋で、床や壁がその模様に合わせてせり出したり引つ込んだりしている。

公園で時々ある、高さがマチマチの丸太がいっぱい並んでるような、あの光景に似ているかもしれない。

もつとも、あの丸太と違い、ジャンプで飛び乗れそうな高さから、天井に届きそうな柱まである為、ちよつとした柱の林のような雰囲気がある。

「AMFは通常のものだね……濃い濃いけど」

とはいえ、何か仕掛けがないとも限らない。

「順路はこの部屋の一番奥の扉みたいだけど……」

シャンテはそう言いながらも、視線は奥の扉には向いていない。

部屋の中央辺り。右側の壁には、ここまでの順路にあった扉とはデザインの違い——異彩を放つ大きな扉がある。

その扉に、デイドは近づき、色々と試すが——

「ダメですね。ビクともしません」

肩を疎めるデイドの横から、ヴィヴィオはひよこりと顔をだして、その扉に手を伸ばした。

同時に、扉に掘られた幾何学的な溝に虹色の光が流れ、ややすると、ガチャリという音が響く。

「……ヴィヴィオ、何をしたん？」

「え？ 普通に触っただけなんだけど……」

戸惑った顔をするヴィヴィオ。

だが、ヴィヴィオが触れたことで扉が開いた理由は容易に想像がついた。

「デイド、ヴィヴィオ、最大警戒。シャンテは万が一のフォロー」

端的にそう告げて、はやては扉に手を掛ける。

その大きな扉は、左右非対称な形状の蝶番に、ゆっくりと開いていく。

「……ッ！」

同時に、扉の奥から、曲線的なフォルムをした虫のような機械が飛び出してくる。

「IV型ッ！」

咄嗟に後ろへと飛び退くはやて。

「ツインブレイズッ！」

即座に、デイドが両手に光刃剣を生み出して、はやてに飛びかかる白銀のボディを斬り裂く。

「もう一匹いるよッ！」

シャンテの声に反応するように、ヴィヴィオも踏み込んで、二体目のガジェット・ドローンIV型に、魔力を籠めた拳を叩き込んだ。

爆発する二機。後続はなさそうだ。

「ふう……ちようびックリしたわ……！」

「お怪我が無くて何よりです」

安堵したように、はやてに微笑みかけるデイド。

それを横目にヴィヴィオが、扉の中を覗き込んだ時――

「やめておけお嬢さん。そこから先は、安全の保障はしないぞ」

聴き慣れない男の声が、部屋に響いた。

「誰や？」

「答える前にその扉を閉めてもらえないか？ この遺跡は村に通じている。先ほどのような戦闘機械が村へ放たれるのはゴメンなのでな」

はやてはうなずくと、シユベルトクロイツを扉に向け、魔力で開いた扉を引き寄せて、蝶番を閉じた。

「これでええか？」

声の主がうなずく気配がする。

「しかし、何故開かずの扉が開いたのだ……？」

それは独り言なのだろう。

声の主は訝っている。

だが、はやて達はだいたい想像がついていた。

ここが《ゆりかご》に縁のある遺跡だというのであれば、ヴィヴィオに流れる聖王の血や、^{カイゼル・ファールベ}聖王彩色の魔力光に反応したのだろう。

「開かずの扉——そう呼ぶわりには、そちらさんは何か知ってそうやな」

はやては声のする方——一際高い柱の上を見上げる。

そこには、人影が一つあった。逆光の為、姿形がはっきりとしない。だが、声からして間違いなく男性であろう。

「そうだな……」

何か思案するような素振りをした後で、男は柱の上から飛び降りてくる。

「……逆光で影だと思ってたんだけど……」

ヴィヴィオが苦笑する通り、飛び降りてきた男は黒ずくめだった。

黒い髪に黒いシャツ。黒いズボンに、おまけに黒いローブを纏っている。

「それ、聖王教会への意趣返し？」

思わずシャンテがそううめくと、影は首を横に振った。

「いや。いかにも——こういう場所で突如遭遇する謎の人物っぽいだろうか？」

彼の言葉に、

「ハリセン……持ってきたければ良かったかなあ」

はやては思わず、そう呟く。

「さて、君たちの問いに答える前に名乗ろう」

そして、こちらの様子など無視するように、彼は告げる。

「俺の名はターク。遺跡アドベンチャーのお客様安全担当員だ」

「お客様安全担当員……？」

訝しむ四人に、タークは大きな仕草でうなずいた。

「ああ。村おこしのメインでもあるこの遺跡で、お客様に万が一があっても困るのでな。中を歩くお客様の様子を常に確認し、お客様が居ない時は、主にメンテナンスを仕事としている」

「村おこし？ メンテナンス？」

訝るシャンテに、タークが不敵に笑う。

「そうッ、本物の遺跡を使ったびつくりどつきりアドベンチャー！ 開かない扉のおかげで遺跡内は一本道でぐるりと一周可能ッ！

道中に仕掛けられた罠とギミックッ！ まるで本物と見紛う出来の炎とビームのイミテーション！

あ、ちなみにそのイミテーションは村一番いたずら小僧クミン君（42）の自信作だッッ!!」

「イミテーションだったんだ……」

「本気で命の危機かと思ってたのに……」

「小僧……君……42……?」

「ツツコミどころは出来れば一つに絞って欲しいんやけど」

大仰な身振り手振りで熱弁を振るうタークに、四人はぐったりとした視線を向ける。

「ノリが悪いな、お前達」

そのトラップを本気にして、必死に逃げ回ってきたこちらからすれば、うんざりもするといふものである。

ましてや、管理局や教会が関知していなかった遺跡を使って村おこしアドベンチャーとか言われてしまうと言葉も出ない。

「死傷者とか出たりせえへんの、これ？」

「問題ない。公開以来死傷者はゼロだ」

「ほう」

思わず感心したように、はやては息を漏らす。

この手のリアルすぎるドッキリは、それに慌てた客達が、作り手の予期せぬリアクションをすることで予期せぬアクシデントなどがありえるものだ。

それを防いでいるというのであれば、それはタークの手腕に他ならぬのかもしれない。

そんなはやての感嘆を、

「まあ初めての完全外部来訪者はお前達なんだがなッ！」

「そら、死傷者もゼロなわけやなッ！」

タークはあっさり粉碎した。

今まで客がいなかったのだから、カウントなんて増えるわけがなかった。

「それにしても村おこしだなんて……閉鎖的な村だつて聞いてただけど」

「ああ、まあ閉鎖的な村であるコトは否定出来ないな」

元々隠れ里のようなものである。ほぼ自給自足で生活出来ている村だが、クラナガン等へ行くことはゼロではない。

そして、首都を見れば若い者は憧れる。そして子供達が大人になれば、この村を出ていく。そうして今は残っているのは歳をとった大人ばかりだと、タークは語る。

「実際、イミテーションを作ったクミンがこの村の最年少だしな」

「本気で切羽詰まっているのですね」

デイドの言葉にうなづく。

「諸王戦争終戦直後は、オリヴィエ・シティという名であったが、やがて人が減り、オリヴィエ・タウンに、そして気が付けば現代ではオリヴィエ・ビレッジになってしまった……。」

このままではやがて村は無くなってロスト・オリヴィエと呼ばれるようになってしまいうっ！ それだけは防ぎたい故に、こうして村おこしをしているッ！」

「いや、ロスト・オリヴィエはありえへんやろ」

「む？ だとしたらバニシング・オリヴィエか？」

「村が滅んだら名前なんてなくなつてまうちゅーとるんや」

呆れ顔ではやてがツツコミを入れると、タークは小さくうめいた。

「そうだったのか……」

「いや、そこは知つておこよう……」

そんな彼の様子に、シャンテも疲れたように呟いた。

「まあ名前はさておき……そんなワケでだ」

タークがこちらの四人を見渡す。

「この鋼林広間こうりんひろまを抜ければ、もうトラップはなく出口にたどり着く」

先導するように歩き出すタークに、四人は顔を見合わせてから、追いかけた。

「そこでお前達に訊ねたい」

歩きながら、こちらへと振り向いて、真面目な顔で彼は問う。

「実際、村おこしのアトラクションとしてはどうだった？」

9.

出口と書かれた昇降機に乗ると、高い位置にある天井が丸く開き、そこへ向けて昇つ

ていく。

そうして、昇り終えると、どうやらその出口は井戸を加工したものだっただけと分かった。

暖炉から入って井戸から脱出する……なるほど、子供にはウケがよさそうではある。実際に、ヴィヴィオは井戸から出るというシチュエーションを楽しんでいるようである。

「ヴィヴィ様、タフですね……」

「え？ 何が？」

逆に疲れた顔をしているシャンテの言葉に、ヴィヴィオはキョトンとした表情を返した。

そんなお子様二人のやりとりを看ながら、はやては、お疲れさまでした——という文字と共に、井戸の縁にかけられた簡素な階段を降りる。

「やつぱ遺跡ん中つちゆうんは身体が凝るな」

ぐーつと伸びをしながら、大きく息を吐く。

「アトラクションとして改造されていたとはいえ本物の遺跡でしたからね、緊張感もありましたからね」

伸びるはやての横で、デイドも安堵しながらうなずいた。

「でも、あれがイミテーションだつて分かったら、もう一回入りたくなくなっちゃったかも！」

ヴィヴィオはどうやら気に入ったらしい。

確かに、あれが演出だと分かったなら、探検気分を味わうアトラクションとして出来が良い方だとも言えるだろう。

「私は初めてのAMFだったから、楽しいとか怖いとか感じる余裕なかった……」

シヤンテはぐったりとしているが、様子を見るに、良い訓練にはなったようだ。

「とまあ感想としてはこんなもんなんやけど」

「参考になる。ありがたい」

最後に出てきたタークが、真面目な表情で礼を告げる。

「せや」

タークの堅い雰囲気苦笑しながら、はやてはふと思ひ出したことを訊ねる。

「安全は保障せん言うとつたけど……あの扉は何だったんよ？」

気がつけば曖昧になってしまっていたが、そこは捜査官として訊ねておかねばならないことだ。

「ああ」

それに、タークはひとつうなずいてから、答えた。

「まず安全は保障しないと言う点だが。それは最初に管理人から警告されていたはずだ。道を外れたら安全は保障しない、と」

つまりあれは思わせぶりな警告ではなく、親切心からの警告だったらしい。

「それと、あの扉だが——あれが開くのは初めて見たので推測になるが……」

開かないことが前提での、アドベンチャーと言っていたのを思い出す。ならば確かにタークも詳しくはないのかもしれないが——

「恐らくはあの扉の先にあった廊下は、管理局が『忘れられた望郷の園跡』と呼ぶ遺跡に繋がっているはずだ」

「繋がっている?」

デイドが聞き返すと、タークはそれにうなずく。

「元々は一つの施設であったかもしれない……そんな話は聞いたコトがある」

だが、それを聞いていたヴィヴィオが口を開いた

「正しくは、『園跡』の中に『聖棺』^{アーグ}があつたんですよ」

「ヴィヴィオ?」

知り得ないはずの知識を披露したヴィヴィオに、はやての不安げな表情を向ける。

それにヴィヴィオは大丈夫と微笑み、言葉が続ける。

「『忘れられた望郷の園跡』は元々工廠だったんです。」

『見棄てられた聖棺』は《第二のゆりかご》として建造されていましたが、途中で戦争が終結し、計画が頓挫した戦艦……それがセカンド・アークでした」

「詳しいな……。お嬢ちゃん——アンタ、もしかして……」

「え？ あ、いや、あの……」

ヴィヴィオは胸中でしまったと舌打ちする。

それは、はやて達も同様だ。

恐らくは遺跡内を歩いた結果、オリヴィエの記憶の一部がフラッシュバックのように脳裏によぎったのだろう。

だが、それをタークの前で口にしたのは、失敗だったかもしれない。

「相当な聖王陛下ファンだな？ 歴史に詳しいだけじゃなく、わざわざカラコンまでしているとはッ、筋金入りと見たッ！」

四人はその言葉に安心して、愛想笑いを浮かべるのだった。

10.

気がつけば、日が暮れ始めている。

トークによると村には宿がないそうだ。故に、自分の家——彼は村長の息子らしい——の空き部屋に泊めてくれるらしい。

その好意に四人は感謝しながら、彼の案内で村を歩いていく。

「そういえば、なんで村の人達は外に出てこないの？」

ヴィヴィオの問いに、トークは首を横に振る。

「余所者が珍しくてな。何を話せば良いのか、みんな分からないのだ。だから話しかけられないように自宅に隠れているだけだが？」

「それ、歓迎してないじゃん」

シャンテのもつともな言葉に、トークはさらに首を横に振った。

「心の中ではみんな大歓迎しているぞ」

「態度で示さないと分からないってッ！」

そんなやりとりを見ながら、はやては苦笑する。

「村人総コミュ障だったんかい……」

「私たちを見て、敵意を抱いたわけではないのですね」

「デイドも安心したような、どうして良いか分からないような、何とも言えない表情を浮かべる。」

「ああ。その誤解は解かないとだな、シスター」

「こちらのやりとりを聞いていたのだろう。タークがそう言つて足を止めると、デイドへと向き直つた。

「そもそも、俺たちは別に今の聖王教の教義に異があるわけではない」

「ですが、袂を分かつたと……」

「ああ」

タークはうなずく。

「聖王陛下達を英霊と崇めるか、偶像として崇めるか……その崇め方の価値観が違うんだ」

最後の聖王オリヴィエや、彼女の思想に賛同し諸王時代を戦い抜いた聖王の血族や、繋がりの深い貴族達。

彼らを英霊として尊重し、再びあのような悲劇を繰り返さないように、危険なロストアロギアの管理と回収をする。

それと同時に、今の時代の礎となった英霊達に感謝と敬意を示すと共に崇めていく――それが、デイド達の聖王教だ。

「お前達の在り方を我々は英霊派と呼んでいる」

「つてコトは、自分らのコトは偶像派とかで呼ぶん？」

「まあそうなるな。先に断つておくが、別に英霊派と敵対する気はないぞ？ 崇め方が

異なるだけで、思想や教義の根底は袂を分かつ前のままで」

それを聞いただけでも、この村に來た甲斐があつたかもしれない。

事情を説明すれば、管理局や聖王教会への協力もしてくれる可能性が生まれた。

「それで、結局崇め方の違いというのはなんなのでしょう?」

デイドの問いに、タークがどこか熱を帯びた調子で答えた。

「……我らが先祖達はツ、その存在を尊敬し、敬意を示すのではなくツ、その存在に熱狂しツ、愛でたかつたのだツ!」

「はあ……」

いまいちピンと來ないらしいデイドを無視して、タークが熱弁を振るう。

「本来であれば、聖王陛下は美しくも愛くるしい姫であつたはずだツ! だが悲しいかなツ、戦争が彼女を英雄たらしめてしまつたツ! 霸王もだツ!

彼とて文武両道にして甘いマスクのイケメンプリンスだつたはずツ! だがツ、戦争が修羅たる王へと変貌させてしまつたツ!

二人とも歌つて踊ればそれだけで停戦させるコトが出来たかもしれないのにツ!

故にこそツ、我々はツ、当時熱狂できなかった陛下達のフアンの為にも熱狂し続けるコトを選んだのだツ!

これツ、即ちオリヴィエ様は俺の嫁にしてみんなの嫁ツ!」

グツと握り拳を構えて暑苦しく叫ぶタークの頬に、ヴィヴィオの拳がめり込んだ。

「な、何をするんだお嬢さんッ!」

「え、あ……す、すみません……なんか、手が勝手に……」

殴ったヴィヴィオ自身も戸惑った様子を見せている。どうにもヴィヴィオの中のオリヴィエが拒絶反応を示したらしい。たぶん。

「……まあわからんでもないけどな」

彼の熱弁に、はやてが微妙な顔をしつつも同意すると、タークは素早く手を取ってきた。

「同志よ」

「一緒にするんやない」

ピシヤリと言いつつから、はやてはヴィヴィオの頭にどころからともなく取り出したウサ耳カチューシャを乗せた。

「え?」

「それはそれとして……ところで、デイド、シャンテ。こんなヴィヴィオをどう思う?」

「とてもお似合いかと。可愛らしさ増し増しですね」

「ん、まあ、似合ってるとは思いますが?」

それぞれが答えたところで、はやてがうなずく。

「その感情を熱狂的に拗らせまくってしまったんが、この村の先祖達つちゆうワケなんやろ」

はやての言葉に、デイドとシャンテはポカンとした顔をする。やっぱりいまいち伝わらないようだ。

「ちなみに村はずれに奉られた聖王像には、手先の器用さならこの村一番のコダワリ派が、犬耳をつけたぞ」

「バチあたりな……」

「なにを言う。非常に愛らしい像になったのだから、問題なかろう？　ちなみに犬耳以外にも、猫耳とウサ耳とで意見が割れてな。結果……村を挙げての選挙となり、犬耳が勝利した形になる」

「すこぶるどうでも良い話です」

タークとデイドのやりとりだけで、どうして袂が分かったのか、理解出来てしまう。これで派閥が分かれて、今の形になったのだろう。もともと、偶像派は主流派にはなれなかったようだが。

「偶像は偶像でも、アイドル崇拜になつとる気がするな……」

「部隊長……可愛いって褒められてるはずなのに、不思議と嬉しくないです……」

ウサ耳バンドを外しながら、ヴィヴィオが疲れたようにうめくのだった。

11.

いつまでも、タークとデイードの言い争いを聞くのも疲れるので、ヴィヴィオは話題を変えるべく、目についたそれについて訊ねることにした。

村の中心にある、直立したナメクジのようなあれだ。

「ところで、あれは何を象ってるの？」

「ああ。あれも聖王陛下だが？」

「愛で要素どこへ消えたのツ!？」

思わず叫んでから、ヴィヴィオはフラフラと膝を付く。

「何かこの村、疲れる……」

「大丈夫かお嬢さん？ 確かに都心からだところまで長旅だしな、疲れもするだろう」

「いや、そうじゃなくてですね……」

こめかみの辺りを押さえながら大きく息を吐いて、ヴィヴィオは立ち上がった。

「この像、もはや愛らしいとか通り越して人間やめてるじゃないですかッ！」

「うむ。それに関しては何村でも時々議論になるな」

至極大真面目に答えるターク。

「あの、タークさん。あれがどうして聖王陛下になるんですか？」

見るに見かねたシャンテが、先を促すように訊くとタークが答える。

「いや、時折この村では野良オリヴィエ様が目撃されてな。俺も一度見かけたコトがある」

「のら……おりうゝいえ……？」

奇妙すぎる言葉に、ヴィヴィオが半眼になって問い返す。

「うむ。正体は不明なのだが、大昔からオリヴィエ様そっくりの人影が村を徘徊するコトがあるのだ。

その野良オリヴィエ様は、ウサギや鹿を捕食しているようなのだが、襲撃する時にこの像のような姿に変身をして——」

「どう考えてもクリーチャーやないかいッ！」

たまらずはやてがツツコミを入れると、タークは困ったような顔をしながら、それでも説明を続ける。

「いやしかし、オリヴィエ様の姿をしているのだ。この村を守ってくださっているのではないかと思ひ、先々代村長があれを作ったらしい」

シャンテとディードも半眼になってモニュメントをしばらく凝視し、ややしてから、表情を変えずにそのままヴィヴィオへと視線を移した。

「あれと見比べないでッ!!」

わりと切実にヴィヴィオが叫ぶ。

「そうだな。確かに聖王様とただのフアンのお嬢ちゃんを比べるのは、聖王陛下に失礼だ」

「うわーん! ぶたいちよー……ッ!」

真顔で首肯するタークに、耐えきれなくなったヴィヴィオが泣きベソをかきながらはやてに抱きつく。

「あー……はいはい。よしよし」

そんなヴィヴィオの頭を撫でながら、はやては胸中で苦笑する。

(いやあ……知らないって残酷やああ……)

「むう……そちらのお嬢さんは似てないと言われるのがそんなにショックだったのか?」

違う、そうじゃない——そんな言葉が喉元まで出掛かったが、シャンテは寸前で飲み込んだ。

「あれ?」

それから改めて、シヤンテがどう助け船を出すか考えていると、視界の端に何か動くものを捉えた。

「どうしました、シヤンテ？」

「いや……今、あそこの茂みになにか……？」

デイドに問われ、訝しみながらも、その茂みを示す。

「もしや、野生のオリヴィエ様かッ!？」

「自分、本当に信仰心あるんか？」

思わずはやてが漏らすと、彼は拳を握りしめて力一杯うなずいた。

「もちろんだッ！ 見ろッ、信仰心がこんなにも溢れ出るといふのにッ!!」

そう言いながら纏っているローブを捲ると、その下にはI☆LOVE☆聖王とプリントされたTシャツを着ていた。

「ちなみに選挙では狐耳に投票したんだぞッ！」

「色々心底どうでもええ」

「もういつそんな村滅びればいいのに」

はやての胸元で、ヴィヴィオが地獄の奥底から響いてきたかのようなうめき声をあげるのが、幸い——なのかどうか微妙だが——タークの耳には入らなかつたようだ。

（もはや遺跡アドベンチャーのプラス分が帳消しになるくらいに荒んどるなあ……）

苦笑しながら、はやては意識をシャンテの方へ向ける。

(野良オリヴィエつちゆうんが、ただの見聞違いやネタだとは思いたいんやけど……)

大昔に目撃され、今も度々目撃されているような、タークの言い回しが引つかかる。

思考のしながら、自分が撫でている少女について、思い出す。

(……可能性はゼロやないな……)

その上で、デイドを見やる。思い出すのは、デイドの生みの親のこと。

彼が行った、大昔の研究者が自分に万が一があつた時の為の予備を作る手段。そこか

ら推測するに――

「そっツー」

シャンテが鋭い声と共に、拾った石を茂みに向かって投げつける。

それによつてはやては思考が急速に現実へと引き戻された。

「痛っ」

そして、石の投げられた茂みの影から女性の声が聞こえた。

その場にいた全員が顔を見合わせる。

ヴィヴィオも、はやてから離れて顔を拭った。

「最近のガキは礼儀がなつてないようだな」

そこから現れたのは、

「おおッ、野良オリヴィエ様ッ!」

間違いないく、肖像などに描かれた最後の聖王と同じ容姿の女性だ。

「野良……? 何を言っておる?」

「野良オリヴィエ様がしゃべったッ!」

「わしがしゃべるコトに驚くなッ! とうか、野良ってなんだ野良ってッ!」

姿形も、その声も、間違いないく女性のはずなのに、言葉遣いやその仕草の端々から感じるの年輩の男性のそれだ。

「ふ……ふふふ……ふふふふ……」

「どうどう、ヴィヴィオ、どうどう!」

「止めないで部隊長ッ!」

どうやらヴィヴィオは、野良オリヴィエの正体に気づいたようだ。

まあ気づいてなくても、この僅かな間に溜まったストレスが、野良オリヴィエ登場で爆発しただけ——という可能性もゼロではないが。

「ふむ? そちらの目の据わった小娘……なるほど。聖王は番つがひにならず生涯を終えたという話だったが、隠し子でもいたのかな?」

「さすがに気付かれてまうな」

ヴィヴィオを押さえながら、はやてが肩を竦める。

「ふーッ、ふーッ！」

「おいおい。いくらオリヴィエ様そつくりの野良オリヴィエ様に出会えたからって、ファンにしては興奮しすぎだろ」

「タークさん……頼むからこれ以上、ヴィヴィ様の機嫌損ねるような言動謹んで」

「うん？ 俺が何か言ったか？」

シヤンテの苦言を、タークは理解出来なかつたようだ。

それを横目にはやては、口の端を皮肉気味につり上げる。

「いつ目覚めて、いつからその姿なんか知らんけど……よくもまあ遺跡化した
《第二のゆりかご》^{セカンド・アーク}の中で長生きしはったなあ……」

「この辺りは自然が豊富であるしな。食料には困らぬ。ウサギや鹿もおるしな。時折遺跡に迷い込む小動物もおった。《第二のゆりかご》のキッチンも生きておったしな」

「若作りの秘訣を訊いてもええか？」

「ふッ、老化なんぞ、おまえ達が古代ベルカ時代と呼ぶ時代の超技術を用いればいくらでも防げるわッ」

「ハツタリ言いおつて……まったく」

これ見よがしに嘆息してみせると、野良オリヴィエの顔色が露骨に変わった。

「自分の正体は、古代ベルカ時代に造られた、オリヴィエ陛下の予備やろ？」

「……………」

「正解みたいやね」

シユベルトクロイツと夜天の魔導書を呼び出し、はやては構える。

それに続くように、どうやら冷静になったらしいヴィヴィオが口を開いた。

「《第二のゆりかご》は元々、戦争によって《ゆりかご》が大破してしまった場合の予備だった。

だから、オリヴィエ用に完全調整されている。

その為に、万が一《ゆりかご》が墜ち、オリヴィエの遺体すら手に入らなかった場合に備えた、オリヴィエの予備が用意されていた」

この時代では、ヴィヴィオを創り出すのに苦労したのは、採取できるモデルデータが少ないことと、古代人であることからだ。

当時であれば、今よりも容易に生み出すことが出来ただろう。

ヴィヴィオの説明に、デイドがうなずく。

「なるほど、理解しました。その上で、予備の陛下は自分達に都合の良い方がいい。

だから、研究者であるあなたは予備のオリヴィエ様に、自身の子種^{クローン}を仕込んだわけですね」

睨むように、野良オリヴィエを見つめる、はやて・ヴィヴィオ・デイド。

その後ろで、こっそりとシャンテがため息をつく。

「話についていけない……」

「うむ。野良様が予備とはどういう意味だ？」

「いやもう、野良とか忘れた方がいいと思う」

少なくとも、あの空気を台無しにする要素であるのは間違いない。

「はははははははははッ！ その通りだ。なかなか詳しいではないかッ！」

「その上で、や」

高笑いをあげる野良に冷や水を掛けるような声色で、はやては告げる。

「自分は通常の、自身のクローンを孕ませるつちゆう手段を取らず、記憶転写の要領で、

白紙の人格に自分の人格を移したつてところやろ？」

「素晴らしい。この時代ではもはや失われたと言つても差し支えない技術について、そ

こまで詳しいとは」

「それで、歳を取らないんは、これやろ？」

はやてが示すのは、あのモニユメント。

全員がその意味を訝しむ中で、野良オリヴィエだけが鋭く目を細めた。

「最初こそは朽ちた肉体を捨て、別の予備へと人格転写を行つてたんやろうけど、おそら

くは用意された予備の数にも限界があつた。

せやけど、《ゆりかご》を使うには、聖王の血と、聖王彩色の魔力光が必要で、それらを扱うには今の肉体を維持する必要がある。

そこで、何らかの化け物の遺伝子を組み込み、クローンであると同時に合成獣としての朽ちない肉体を作り出す。それが若作りの正体や。

もつとも、狩りをする時にこの村の人らに目撃されて崇められとるんは、想定外だったかもしれないけどな」

はやては推測を語り終えた後で、肩を竦めた。

「何が目的や？ どうしてそこまでして生き続けとる？」

「気に食わない小娘。お前のその眼差しは本物のオリヴィエと同じだ。正義感と責任にかぶれた、英雄気取りだ」

野良オリヴィエの言葉に、はやてはふんつと鼻を鳴らす。

「凶星、か——半分くらい思いつきのハツタリやったんやけど」

「おい」

思わず野良オリヴィエがうめく。

「だが。バレてしまったならば仕方ない。答えてやろう。

我はこの世界に再びベルカを再建する。聖王達諸王が治めるベルカではなく、この我が統治する真のベルカだ！」

両手を広げてそう語る野良オリヴィエに、はやて達四人は一斉に嘆息した。

「ぬ？」

「詰まらんなあ……」

「もうどうでもいいよ」

「くだらないですね。捻りも面白味もない」

「お話の中の悪役テンプレートって現実にも適用されるのか、勉強になった」

「お前達ッ！ これを見てもそう言っただけいられるのか！」

そう叫びながらどこからともなく取り出したのは、青い色の――

「レリック？」

「左様！ 聖王の力を最大限に引き出すのだ！」

通常のモノと違い、その制御の難しさをクリアし、より高い次元で能力を引き出す私の最高傑作ッ！

これを使えば不完全な《第二のゆりかご》も、すぐにでも浮上させられるぞッ！！

野良オリヴィエの言動に目を見開いたのはタークだ。

「待て！ 村の足下に眠る聖棺が目覚めたら、この村はフライング・オリヴィエになってしまうではないか！」

「飛ぶ途中に消えてしまっやろうなあ……」

「なるほどッ、イレイジング・オリヴィエか！」

「それはもういいよ」

うんざりと、ヴィヴィオ。

「よくわからぬが、ともかくッ！ このアナザー・レリックはより聖王に近い存在によってのみ命令できるッ！

我から奪ったところで、我以上に聖王に近い存在はあるまいッ！ いつでも呼び戻せるぞッ！」

「おいで、アナザー・レリック」

自信満々に勝ち誇る野良オリヴィエを無視して、ヴィヴィオがその名を呼ぶ。

すると、

「え？」

野良オリヴィエの手の中にあつたアナザー・レリックがヴィヴィオの手の中へと転移した。

「そんなバカな！ 世代を重ね薄れた血の方が、私の血よりも濃いというのかッ！」
「言うコト聞く良い子みたいだから、ちよつと心苦しいけどね」

驚愕する野良オリヴィエを露骨に無視して、ヴィヴィオはその手のレリックを放り投げた。

「デイド」

「御意」

そして、ヴィヴィオの命に従って、デイドはツインプレイズでそれを斬り裂いた。

「な、な、な……ッ!?!」

野良オリヴィエの驚愕は、やがて怒りへと代わり叫び声をあげ、

「貴様らあああああッ!」

女性の姿から、モニユメントそっくりの化け物へと姿を変えた。

そこへすかさず、

「む?」

はやてに頼まれたシャンテが、素早く化け物の頭にウサ耳バンドを乗せて、素早く元の場所へと戻ってくる。

それを確認したはやてが、魔法で拡声しながら、村全体へと告げる。

「良く見い、村の人ツ! 自分らは聖王を愛でる言うけどな……こんなウサ耳の似合わへん化け物に萌えるんかッ!?

元の姿が聖王陛下そっくり言うても偽物な上に、中身は枯れたオツサンや!

モニユメントまでつくって崇める価値があるんかッ! これを嫁にしたいんかッ!?

はやての言葉に、村中からざわめきが聞こえ始め、タークはぐったりと膝をつく。

「確かに……その姿形に騙されていたが、あの仕草や喋り方は愛せそうにない……そして、この姿も」

「さつきから、何なんだお前ら？」

野良オリヴィエがうめく。

その気持ちは分からなくないが、はやてのこの行動はヴィヴィオと、オリヴィエの為である。あんな化け物と同一扱いされるのはさすがに可哀想だ。

なので、はやては村人達が野良オリヴィエから興味を失うように仕向けたわけである。

その上で、

「オリヴィエの身体と魔力使っておきながら、化け物みならへんと狩りが出来へん雑魚や。」

ヴィヴィオ、シャンテ。とつと二人でぶちのめしてまえ」

はやては二人に笑い掛ける。

それに対して、二人はデバイスをセットアップすることで応えた。

12.

「ふふふふふふふふふふふふ……怒りの矛先イイイ……みいつけたあああああッ!!」

あんまりヒロインっぽくない表情で、ヴィヴィオは四肢に魔力を籠める。

「シャンテ！」

「了解！ 陛下に合わせるよッ！」

ヴィヴィオは地面を蹴って加速し、シャンテは地面を蹴ると同時に姿を消した。

「ふん、小娘二人風情……ッ！」

身構える野良オリヴィエ。その頭上からシャンテが降ってきて剣を振り下ろし、斬ると同時に姿を消す。

「な……ッ！」

突然、背中を斬られ目を見開く野良オリヴィエのボディへ、ヴィヴィオのブローが叩き込まれた。

「が……あ……ッ」

すかさず、ヴィヴィオは独特のステップで背後へ回り、強烈なソバットを繰り出した。

直後にシャンテは正面に姿を見せて、双剣による連撃を繰り出す。

ヴィヴィオのジェットステップによる変速広範囲連撃と、その隙を埋めるように繰り出されるシャンテの高速移動斬撃。

ほぼ三百六十度全域から放たれる二人のコンビネーションに、野良オリヴィエはあつと言う間に追いつめられていく。

「ぐ……あ……」

フラフラになった野良オリヴィエの前で、両手を構えるヴィヴィオ。

「くそ……ッ！」

それに対応しようとするが、時既に遅し。

ヴィヴィオが魔力を籠めた双掌そてしやうで、野良オリヴィエを思い切り突き飛ばす。

地面を滑っていく野良オリヴィエ。その背後には、ヴィヴィオが設置しておいた拘束魔法陣が展開されている。

蜘蛛の巣に引つかかるように、野良オリヴィエは魔法陣に捕まり、駄目押しとばかりに七人のシャンテが、抱きつくように拘束する。

「準備完了」

「こつちも。いつでもいいよ、陛下」

二人は互いの魔力を混ぜ合わせると、自分達の眼前に大きな魔法陣を作り出す。

「V&S、コンビネーションアサルトッ！」

「私と陛下が二人で奏でる混声歌ッ！」

二人は同時に地面を蹴ると、自分達が作り出した魔法陣を潜り抜ける。

その魔法陣によつて、二人は全身に魔力を纏い、自分自身が魔力砲弾になったかのよう
うに、動けぬ野良オリヴィエへと向かつていく。

双歌そうか
——

ヴィヴィオは拳を。

シャンテは剣を。

——
幻聖唱げんせいしょうツ!!

その砲撃のような勢いのままに、動けぬ野良オリヴィエへ、二人は己が獲物を突き立てたッ！

13.

陛下とシスター・シャンテによって討たれた野良オリヴィエは、八神司令預かりで管理局へと引き渡しされました。

また、オリヴィエ・ビレッツジ村長との話し合いの結果、『園跡』調査隊の滞在許可を得ました。

追加事項、村内の観光者向けアトラクション、遺跡探索アドベンチャーに関して。

本物のAMF体験が出来るアトラクション為、聖王教会及び管理局でのAMF体験訓練の会場として、利用してもよいという許可を得ました。

またアトラクションとして改造済みの部分以外の『ロスト・アレク聖棺』への入り口を、『園跡』内にて発見された為、アドベンチャーへ迷惑を掛けない形での調査許可も了承していただけでした。

——調査報告は以上。

なお、野良オリヴィエ像は撤去されましたが、その代わりとして、ヴィヴィオ陛下の像が新たに制作中。完成前に、ウサ耳、猫耳、犬耳……その他の装飾をどれにするかを問う選挙を行う予定とのこと。

また、村人達は今まで通りの、偶像派としての聖王崇拜とは別に、ヴィヴィオ陛下筆頭に、シスター・シャンテ含む同世代ストライク・アーツ選手に興味を持った様子。

それに伴い、推し選手グッズなどを作りはじめた結果、それが大当たりし、ストライク・アーツ選手ファンの聖地という形で、村おこしが成功しはじめています。

管理局も道の整備手配をしてくれているようなので、以後はオリヴィエ・ビレッジに對する謂われのない誹謗中傷を避けるようにお願いいたします。

また、我々英霊派の中にいた、隠れ偶像派に對する処遇などはとくになく、今後の信仰や生活に對する指導などありません。

同時に、本堂含め、今後はオリヴィエ・ビレッジ及びそれ以外からの偶像派の出入りも増えることとなると思います。

相手の主張を受け入れられずとも、否定せず、穏やかな関係を保てるよう、注意のほどをよろしくお願いします。

☆

「……シャンテ……あれ、オリヴィエ・ビレッジ製作のうちわ……アインハルトさんの名前が書いてあるよ……」

「陛下見てよ。あつちは、はっぴだつて。番長の名前が背中にあんなデカデカと……」

「でも、やっぱりシヤンテのグッズが多いね……」

「陛下のグッズ数には負けるよ……」

「あのさー……近いうちにやっちゃおうか。イレイジング・オリヴィエ」

「そうですねー……ほんと、許可が下りるならしたいよー……」

「結局さー……愛でて熱狂出来れば、何だつてよかつたのかな……」

「あー……たぶん、そうだと思う……」

ヴィヴィオとシヤンテはそんなやりとりをしながら、無駄に澄んだ青空をぼんやりと見上げ続ける。

野良オリヴィエと戦って以来——ストライク・アーツの大会の観客席が日に日に異様な光景になっていくのだが、それを止める術をヴィヴィオ達は持っていないのだった。

d. 【Eager idol worshippers, village | close

【中2】そんなある日のSkill&away

1.

ある日の昼休み。

「世の中、何が幸いするのか分からないのよね」

聖祥学園女子中等部校舎の屋上で、横に座る友人、アリサ・バニングスが唐突にそんなことを言った。

「まあ、そうやね」

余りにも突然すぎて、何と反応して良いか分からなかった八神はやては、お弁当を食べる手を止めて、それに曖昧に反応する。

考えてみると、アリサの唐突さはいつものことなのかもかもしれない。普段はその唐突な言動を通訳してくれている友人達がただけだ。

「今日は、昼休みだけでなく、放課後も三人とも不在だからね。珍しく私とアンタだけしかないのよ」

アリサの言葉に、おや——と、はやては首を傾げた。

「なのはちゃんは？」

放課後——フェイトは魔法使いのお仕事。すぐかは習い事。それは知っている。だが、今日はなのはに何か用事があったとは聞いていないのだが。

「ああ——何か、先輩に頼まれゴトがあるとかで、どっかの部活に顔を出すんだって」
「へえ」

はやては相づちを打ちながら、思索する。

なのはは優秀な魔導師ではあるが、フェイトと違って運動神経の方がお世辞にも良いとはいえない。

いつも一緒にいる自分達五人組の中では、はやてとコンビでスポーティングダメージである。

そんななのはが、先輩に頼まれゴトをする部活とはなんであろうか。

「あ、ちなみに文化系らしいわ。失礼なコト考えないでって、釘を刺された」

「お、おう……」

その釘は、アリサを経由してきつちりとはやてにまで飛んできている。流石は狙いはずさぬシューターである。感心の仕方が少し違うかもしれないが。

それはともかく——

「それで、アリサちゃんは放課後に何がしたいんよ？」

話が脱線してしまった気がするので、話題を戻す。
それにアリサはうなずき、答える。

「うちの学校つてき、基本的にいつでも部活に体験入部できるのよね」
つまるところ、今日の放課後の予定はそういうことになるらしかった。

2.

放課後——

「それで、アリサちゃん。

結局、どこの部活に突撃するか決めたん？」

「それなんだけどね」

はやての問いにうなずいて、アリサは答える。

「私達とは縁遠そうな奴がいいかなって」

「縁遠そう？」

「そうよ」

はやてが訝しむと、アリサは大仰にうなずいた。

「積極的に触りに行かないと、今後の人生で一切触れるコトなさそうな奴よ」

「ふむ?」

それに、はやては首を傾げた。

学校に部活として存在し、それでいて自分達とは縁遠そうなもの——正直、見当が付かなかつた。

「習い事としてはポピュラーだけど、私とすずかはしてないのよねー。まあ家柄、雰囲気合わないってのもあるかもだけど」

はやての眉間にますます皺が寄る。なおさら、分からなくなってきた。

「なら逆に、私らの仲で一番それが似合いそうなんは誰や?」

「なのは」

即答だった。

「私達の知らないところで、なのははこのスキルを持つても不思議じゃないわね」

「なんで?」

「関西の高町本家——ようするに桃子さんの実家ね——の親類には、これの先生をしてる人もいるらしいし、桃子さんも多少は心得あるっぽいよ。」

そうになると、高町本家に帰省した際に、なのはが習ってもおかしくないですよ?」

「まあ、わからんでもないけど」

「それに——」

「それに？」

聞き返すと、アリスは少しだけ言葉を選ぶような風に思案してから、答えた。

「士郎さんと桃子さんがフリーダムな人達だから、印象は薄いだろうけど、なのはも結構な家柄のサラブレッドよ？」

「……………言われてみると」

桃子の実家——高町は関西では結構大きな名家らしい。桃子が好き勝手に出来ているのは、末っ子だからというのも大きいだろう。

士郎の実家——不破家はすでに存在はしていない。詳細は知らないが一族は火事で全滅してしまったらしい。とはいえ、話による大きな武家屋敷で、宗家である御神家共々かなりのもだったそうで。

「うちは完全に海外、すずかは日独混合……………そして完全和風のなのとは。何気に揃っているのよね」

「ついでに、フェイトちゃんは完全異世界やし、私はまあ地球異世界混合みたいなもんやからな。何気に揃っとる」

などと二人で言ってはみたものの、何が揃っているのだから自分達でも良く分かっているのだから。

「で、士郎さんの妹さん——美沙斗さんも、何気に習ってたらしいのよね。士郎さんもや

るように言われたらしいけど、性に合わないからって逃げ回ってたらしいわ」

そんな話をしている内に、はやても段々と分かってきた。

「確かにまあ、それは私らとは縁遠そうなおコトやね」

「お、気が付いた？」

「それによつて、道を求め、道を探す——そういう意味やと御神流なんてやつとると、確かに縁がありそうやわ」

それでいて、体育会系ではなく文化系ともなれば、そう多くはない。

「これから行くくんは、華道部か茶道部やる？」

ちなみにまつたくの余談ではあるが、武術とは武を生きる術すべとし、その術だけを追求するのが身技である。武を求道の手段あるいは人生の道標とするのを心技とした——武道とは似ているようで異なっている。

故に武と違い、生きる手段にはなり難く、求道的側面が非常に強い華や茶は、道のみであり術はほとんど存在しない。

「うちの学校は、茶道・華道部。セットになつてみたいなのよね」

「それすら知らなかった程度には興味なかったんやね」

「まあね」

アリサはあつさりとしてそれを認める。

「活けられた花を愛でたり、点^たてられたお茶を飲んだりするには興味あつたけど、自分でやろうつていう気はほとんどなかつたし？」

「せやな。そこは割と私もそうやね」

「なので、自分からやろうと思わないと触れる機会がないものつていう意味では、これほどふさわしいモノはないと思うワケよ」

確かに、生け花にしろ抹茶にしろ、自分から触れにいかなければ、見たり飲んだりする機会すらないだろう。

「一応、確認するけど——顔出すの、そこでいい？」

ここまで煽っておきながら、アリサはそうやって聞いてきた。きつとはやてが首を横に振れば別の部活を見に行こうとするのだろう。

まったくもつて、わがままなようできて、気遣い屋だ。

「もちろん。やったコトあらへんコトつちゆうんは、何やかんやで楽しそうやしな」
笑つてうなずくと、アリサも嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「それじゃあ、行きましようか」

「たのもーッ!」

茶道・華道部が部室として和室のドアを開け、その先にある襖を開きながら、アリサが入っていく。

「いや、そのセリフはどうなんよ?」

何となく一緒にされたくないな——と思いつつも、はやてもお邪魔しますと言いながら、入っていくと……。

「あれ? アリサちゃん? はやてちゃん?」

「……………」

「……………」

何故か花を活けているのはがいた。

「どういたの、二人とも」

「いや……放課後暇だったから、さ」

「何や、やったコトないコトでもしてみようか思て」

思いついたのが、この部であったのだと、説明する。

そんなやりとりを横で聞いていた部長さんが、「まあ」と嬉しそうに手を合わせる。

そのまま自己紹介をされたので、こちらも自己紹介を返すと座布団を用意してくれた。

「どうぞどうぞ、お掛けください。今、必要なものを一通り持ってきてますから、まずは理屈など考えず、お好きなように活かしてくださいな」

部長さんは丁寧な口調と物腰のはずなのに、どこか巻くし立てるような調子だ。

「いや、そう言われて……」

体験入部とはいえ、興味を持って訪ねて来てくれたのがよほど嬉しいのだろう。

「私ら、そもそも、活け方の基礎みたいななんも、サッパリなワケですし」

「そこは問題ありませんわ」

小さな卓袱台に、花器と剣山。花切ハサミ。

アリサとはやての為に、それらを用意しながら、部長さんはなのはを示した。

「高町さん、お友達に教えて差し上げて」

「はい」

そううなずくなのはだったが、その仕草はどことなくいつもと違う。

「にやはは、こういう場所だしね」

こちらの視線に気が付いたのだろう。そう言って、彼女は笑った。

つまりは、和室マナーというか和式礼儀作法というか、そういうのをしつかりと意識しているということなのだろう。

そうして、なのはは部屋の隅にあるバケツの中から、適当に花を見繕い始めた。

そんな友人の後ろ姿を見つつ、はやてはふと部長さんに訪ねた。

「あの、部長さん」

「はい。何でしょう、八神さん？」

「なのはちゃん、部員やないんですよね？」

「ええ。華道・茶道ともに、それぞれ外部の講師の方が来て下さってはいませんが、それも毎回というわけではありません。」

なので、講師の方が来れない時は、経験があるという——高町さんに来て頂いてるんです。

お恥ずかしい話ですが、部長とは名前ばかりで、私はほとんど未経験なものですから「はやての中に未経験という言葉に対するポケが思い浮かんだのだが、敢えてそれを表に出すのを控える。」

「それは良いんですけど。あの——聞きづらんですけど、部長……」

そんな部長さんの話を聞いてから、アリサが部室内を見渡してから、彼女におずおず尋ねた。

「ほかの、部員は？」

それに関してはやても気になっていた。

いないのだ。部員が。部長以外に。

なのはは部員ではないものの、経験者ということで、部長が頼んで来て貰っている臨時講師のようなものだ。

そうになると、この場にいる部員は部長さんだけになってしまふ。

「ええ。その……茶道の日にはみなさん、顔を出してくださるんですけど……」

苦笑とも、嘆きともとれる表情で、部長さんは言った。

「言いたくはないんですけど、それって……」

アリサがそんな風に返そうとした時、

「そうなんだよねー」

花を選び終わったのはが、こちらへと戻って来ながら、部長さんの代わりにうなずいた。

「点てたお茶のお茶受けとして、和菓子が用意されるからね。ほとんどの部員さんがそれが目当て。茶点でだって、そこまで熱心じゃないというか、我慢すればおいしいお茶とお菓子が楽しめるっていうノリ？」

それ自体は悪いことではないのだが、露骨すぎるのも困りものだと言う。

「それでも良いのですよ。部員のみなさんが在籍して下さってますから、この部も存続出来ているのです。」

お茶の時だけとはいえ、来て下さってるから、水増しの幽霊扱いされるコトもありま

せん。それで、充分です」

部長さんは、本当に僅かな時間だけとはいえ、この部で華道や茶道に触れたことで、それらの示す道に魅せられた人なのだろう。

習い事としてではなく、学校の部活としてやるからこそ、彼女にとっては意味がある。部長さんを見てるとそんな風に思えた。

「まあ、それはともかくとして」

話を切り上げるように、なのは花を包んだ紙を、はやてとアリスの側に置く。

「こつちが、はやてちゃんの」

そこにあるのは、薄い緑色や濃い緑の花や、薄い水色の花。そして葉っぱのみの生花が多い。

赤や黄色もあるのだが、全体の三分の一もなかった。

「そして、こつちがアリスちゃんの」

アリスの方がはやてとは逆に、ハッキリとした赤や黄色に、控えめなオレンジやクリーム色など、暖色系のものでまとめられている。

「花の切り方と、活け方を簡単に教えるから、その後は、好きなように活けてみて。」

活ける上での基本ルールとかは後回し。まずは活けるコトそのものを楽しまなくっちゃね」

流派や使う花器で、ある程度の縛りルールのようなものがあるらしいが、それにこだわりすぎて窮屈になってしまうと、初めての人には面白味が薄れてしまうそうだ。

「それじゃあ、高町先生。よろしゅう頼みます」

「高町先生お願いしまーす」

「もう、二人ともからかってえ」

困り顔をするなののところへ、部長さんもやつてくる。

「私もご一緒聞かせてもらおうかしら。よろしくお願いしますね高町先生」

「部長まで……」

なのはは困ったように苦笑するが、満更でもなさそうだ。基本的に人に何かを教えるのは嫌いではないのだろう。

そうして、はやてとアリサを交えた、本日の華道部の活動が始まった。

4.

（好きに活けてええ言われてもなあ……）

花の切り方と、活け方をぎっくりと教わった後で、はやてはそんな風に、頭を悩ませる。

難しいのは後回しというのは、取っつきやすく助かるが、だからといって自由すぎるのも悩んでしまう。

(それに、この色合い……)

なのはが用意してくれた花の色合わせを見ると、ふと思う。

(サラダみたいやなー)

薄い緑や黄緑の花に、葉っぱ類はレタスやルッコラ。

鮮やかな赤や黄色の花たちは、トマトやパプリカ。

そんな風に見てたら、閃くものがあつた。

(いっそ、美味しく見えるように活けてみよかな)

美味しそう——というのは、いささかズレてるような気もするが、好きに活けていいのだから、その方向でやってみよう。

サラダを盛りつける時のように、美味しく見えるように。彩りよく見えるように。

5.

気がつけば、正座をして背筋を伸ばして、集中してやっていたらしい。

とりあえず完成はしたので、顔を上げる。

思ったよりも、こじんまりとした纏まり方をしてしまった。

横を見れば、アリスがやたらと豪快に活けている。

その花の色合いも相まって、炎のように見えなくもない。アリスらしいと言えば、アリスらしいが。

「なのはちゃん、こんなんでええんかな?」

「うん。全然OK。」

なんか美味しそうで、はやてちゃんらしい」

「あははは。料理の盛りつけのつもりで活けたからなー。ほんま、アリスちゃんやないけど、何が役に立つかわからへんもんや」

切り花の茎を切りすぎて想定より短かったり、ちゃんと活けてたつもりが倒れてしまったりと、悪戦苦闘したものの、それでも活けている時は楽しかった。

「ふふん。どうよ、なのは」

どうやらアリスも完成したらしく、なのはを呼んでいる。

「にやはは、アリスちゃんらしいね。カッコいい」

「でしょ、でしょー!」

それを見ながら、何となく気がついた。

なのはは、割と最初からこの完成系をイメージしてたのではないだろうか。

そうでなければ、自分とアリサの渡された花色の組み合わせに差があった理由がない。本来であれば、同じ花材でも問題なかったはずだ。

「お二人とも初めてなのにお上手ですね」

部長さんは嬉しそうに、はやてのアリサの作品をまじまじと見ている。

何となくそれが気恥ずかしくて、はやてはアリサへと視線を向けると――

「……………」

何やらアリサが神妙な顔をしていた。

その表情の意味に気づいたらしいなのはが、苦笑する。

「正座って、何気に集中力高まるらしいんだよね。作業に集中し始めると、自然と背筋も

伸びていくし」

机の高さとか作業のしやすさとか、そういうのがピッタリだったりすると、自分が

正座していたことを忘れるほど集中してしまうこともあるという。

それはつまり――

「アリサちゃん」

はやてはニヤリと笑い、手をわきわきとし始める。

幸い――というかなんというか――自分は、アリサのような状況にはなっていない。

自由である。

「ちよッ、はやてやめなさい。やめてちょうだい」

ジリジリと、はやてはアリサへとにじりよっていく。

「やめてください——っというか……」

だが、思うように動けないアリサは、はやての魔の手から逃れる手段はなく……

「やめろおおおお——……ッ!!」

アリサの拒絶を無視して、はやての指はアリサの痺れきった足へと伸びていった。

6.

っんっん。

「ひゃうっ!」

「ほほう……ええ声が出たなあ……」

「あ、あんた、ねえ……」

「ほれほれ」

さわさわ。

「ひゃうああああ……な、撫でないで……」

「い・や・や・♪」

さわさわ、つんつん、なでなで。

「あ、ああ……う……ひやつつうう……」

「ええ声で鳴くやないかあ〜」

「ぜ、絶対……」

つん。

「絶対にい……にやつ……!?!」

「んー? 絶対に、何やあ?」

さわり。

「ひやう……許さ、にや……いん……あう……だから、あん……ねえ……!」

「ふっふっふっふ。アリサちゃん……いつまでそんな強がり言ってるんかなあ……?」

「どこの悪役よあんたツ!……つて——あツ、ちよツ……こらあツ!」

「ふふふふ、悶絶揉み倒し拷問スペシャル……対痺れた足用フォーム!」

「やめなさいつてえええええ——ツ!!」

もみもみもみもみもみもみもみもみ……。

「あつ……やつ……あつ……んう……」

「ふいにーっしゆ！」

「ああああああああああ……んツツ!?」

7.

「絶対に……絶対に許さないんだからあ……」

はやてに組み伏せられて、痺れた足をひたすらに撫でられ突つかれ続けたアリサは、涙目となり息も絶え絶えになりつつも、気丈な顔でそう告げた。

もつとも、当のはやてはとうとうと――

「いやあ、アリサちゃんの可愛い嬌声こえと涙目かお……堪能かさせてもらうたわあ……」

全く気にかけてた様子はなく、それどころかツヤツヤしてる。

「あの、高町さん……止めなくて良かったのですか?」

「まあいつものコトですから」

「ふふ、仲が良いんですね」

「はい」

うなずきはするが、なのはの表情は苦笑いだ。

何ともみつともないところを部長さんに見せてしまった気がする。
ともあれ――

「はやてちゃん。一応、言っておくね。

覚悟、しておいた方がいいかもよ？」

「何の話や？」

滅多にないアリサ弄りのチャンスにハッスルしてしまったようではあるが、後のことを考えなさすぎる。

「はやて……」

復活したアリサが、はやての肩に手を置いた。

「お？　アリサちゃん？」

「覚悟はいいわね？」

「え？」

問答無用とばかりに、今度はアリサがはやてをうつ伏せするように押し倒すと、何やら足を絡めた。

「え、ちよ、アリサちゃん!？」

複雑に絡まった足に、アリサが力を入れた瞬間、はやての目の色が変わった。

「ちよッ!?!　アリサちゃん、これ……洒落になってへんって……!?!」

「あんたの意見は却下！」

「あ、た……痛ッ！ いたたたた……ギブギブ！」

バンバンと畳を叩くはやてだったが、アリサはそれを無視して、力を強めたり弱めたりを繰り返しているらしい。

「マジで関節キマつとるんやけどッ!？」

「マジで関節キメてるのよッ!!」

そうやってドタバタやりながらも、備品やら互いが活けた花などを倒したり壊したりしないように気をつけているのだから、大したものである。

「あの……高町さん……」

「大丈夫です。二人とも、おふぎけの線引きはしっかりしてますので」

「そうなんですか……?？」

流石に、疑わしげではあるが、なのはそれ以上何も言わなかった。

そんな中、アリサははやての足を固めながら、顔だけ部長さんに向けた。

「そういえば部長。今更なんですけど」

「なんでしよう……? っていうか八神さん大丈夫なんですか?」

「あ、コイツは自業自得なんで暫く気にしないでください」

はやてを心配する部長さんに、アリサはそう告げてから、尋ねた。

「ほかの部員も華道活動の方に呼ばないんですか？」

アリサの問いに、部長さんは苦笑した。

「そうしたいんですけどねえ」

その表情が気になったのだろう。はやても顔を上げて——背筋するかのような姿勢なので苦しそうだが——尋ねた。

「みなさん何で来ないんですか？」

「さあ……でも華道だと、お菓子とか出ませんからねえ……」

確かに食べたり飲んだりが目的ならそうだろう。

だが、少なくとも今こうやってなのはから教えてもらい、難しいこと抜きに花を活けるのは楽しかった。

その部分を理解してもらえれば、もうちよつと人は来そうなのだが——

「あ、もしかしてお花の講師の先生って怖かったりしますか？」

はやての言葉に、部長さんは首を横に振った。

「個人的には高町さんと同じくらい、優しく教えて下さって方だとは思っておりますが」
アリサは関節技レッグロックを解いて、はやてと顔を見合わせる。

自分たちの作品を見る部長さんの目は、仲間がいることを喜ぶかのような、羨ましむかのようなだった。

あんな目を見てしまうと、無駄に世話を焼きたくなってしまふのがアリサ・バニングスである。

「やりもしないで、ツマラナイとか言ってる連中がいるのは癪ね」

「アリサちゃん、無理や無茶は部長さんに迷惑かかっちゃうからね？」

なのはの刺してくる釘に、アリサは肩を竦めた。

「良い、なのは？」

私の人付き合いつて、道じゃなくて術なのよ」

「アリサちゃん……なのはちゃんの言ってる意味分かつとる？」

「分かつてるわよ」

口を尖らせるアリサに、部長さんがキョトンとした表情を浮かべている。

「だから……なのは、次にアンタが華道を手伝うのいつ？」

「え？ んー……来週の火曜日……？」

視線で部長さんに問うるのは、それに部長さんはうなずく。

「はい。来週も来ていただけるのはありがたいのですけれど……」

戸惑っている部長さんに、アリサは訊ねる。

「部長は、華道を楽しんでるんですよね？」

「ええ。先代の部長さんが文化祭で実演しているのを見て以来、自分もあんな風を楽し

そうに出来たらな、と」

それに、アリサうなずいてから、笑みを浮かべた。

「だったら、ほかの部員達にも、楽しいんだっていうのを教えないと、たぶん来てくれないですよ。」

華道——もしかして、まともに見せたコトないんじゃないですか？」

「確かに、アリサさんの言う通りですけど……」

お茶とお菓子を目的で入部した連中だ。

華道なんてそもそも見向きもしないのだろう。

それでも最初に無理矢理にでも華道をやらせれば、また少しは違っていたかもしれない。い。

だが、部長さんは茶道にさえ出席してくればそれで良いとしてしまったが故に、今の空気が生まれてしまった。

もしかしたら、華道をやりたい部員もいるのかもしれないが、空気を読むとか流れや惰性などで、来なくなってしまうている可能性がある。

だから——

「私が来るようにし向けます。」

ただし、華道へ来た部員達に、華道に興味を持たせることが出来るかどうかは部長次

第です」

もちろんアリサだって部員達に無理強いはいしない。

だが、せつかく入部したのに、もったいないと、アリサは思ったのだ。

「あの……アリサさん……」

「ダメですよ。部長さん。こうなると、アリサちゃん聞きませんから。なので、まあ、来週の火曜日。ちよつとだけやってみましょう。部長さんも、仲間が欲しいっていつも言ってるじゃないですか」

なのはに言われたのが決定的だったのだろう。

「そう……ですよね。」

アリサさん達が来てくれてこんなに嬉しかったんですもの。やってみますね!」

「そういうなくつちや!」

8.

「……それで、先週からアリサちゃんは忙しそうにしてたんだね」

翌週火曜日の放課後。

中庭のベンチで、ひとしきり説明を終えたアリサに、すずかとフェイトは納得したよ

うな顔だ。

「でもアリサ、どうやって華道の日に来ない人達を集めたの？」

フェイトのもつともな疑問に、アリサはオーバーに肩を竦めて見せた。

「別に」

生徒会長に頼んで、生徒会が保管している部員名簿を見せてもらった後、各クラスへと顔を出して、それぞれの部員と軽く話をする。

それで、華道にも興味ありそうな人には、部長さんが本当は華道活動にも顔を出して欲しいと思っている旨を伝えた。

また、本当に茶道が好きなのもいたのだが、その人には華道の方の出席率が低すぎると、片方が潰れてしまう可能性を伝える。

そして、完全にお茶とお菓子目当ての人たちには、生徒会から部長が苦言を受けていると伝え、その上で、ごちそうしてもらっている恩くらいは返してあげたらどうだろうか、と言ってみたりもした。

そうやって部員全員——と言っても十人にも満たないが——に声を掛けて回ったのである。

確かに大変ではあったが、別に大変だったただけなので、アリサは自分が何をしたかなんて、口にはしない。

だから――

「大したコトなんてしてないわ」

そう答えるだけである。

実際、大したことをしたただなんて、思っていないのだ。

「まあ……はやては生徒会長に何か頼んでみたいだけどね」

それはアリサの預かり知るところではない。

「生徒会長に頼むって……」

「何をしたんだろう?」

すずかとフェイトが顔を見合わせて、首を傾げていると、噂の本人がやってくる。

「いや、別に大したコトしたわけやあらへんのやけど」

「はやてちゃんもそう答えるんだ」

「実際、大したコトしてへんしな」

ただちよつと、生徒会長にお願ひしただけである。

茶道活動の日。部員たちが集まってくる少し前に、部室へ赴き、部長さんにお茶をこちそうになってきて欲しい、と。本当にそれだけだ。

それも一度だけ。あとは、アリサに説得された部員たちが勝手に勘違いをしたのである。

それ故に、はやては大したことなくってしていないと、そう答える。

「二人とも、実は大したコトをしてそうな気がするんだけど」

フェイトはそう言うが、二人は肩を竦めるだけだ。

その仕草に、謙遜も謙虚もなく。ただ本当に、大したことなんてしたつもりはなさそうだ。

「それで、はやて。華道活動はどうなりそう?」

「まあ完全お茶飲み派以外は、華道にも興味もつてくれたようや」

こつそりと覗きに行っていたはやての報告にアリサはうなづく。

「その完全お茶飲み派も二つに分かれたんじゃないの?」

今後もお茶を飲みに来る人と、退部予定の人とで」

「正解。そこはまあしゃーないな。部活としてではなく、完全にお茶飲み目当て。礼儀作法を学ぶ気も更々ないとなれば、ある意味で完全おじやま虫やしな」

「遅かれ早かれ、部にとつての危険因子になりかねないわけだしね。部長には申し訳ないけど、それで正解ね」

それでもなお残ってる方は、まだ見込みがある部員ということになる。

「茶道に華道かあ……縁遠い部活だよね」

アリサとはやてのやりとりを聞きながら、さすががそんなことを嘯く。

それに、フェイトもうなずいた。

「私なんてもつとだよ。なんかデタラメな茶道は、リンディ母さんがたまにやってるけど」

デタラメな茶道に心当たりがあるはやては、思わず小さく吹き出した。

その笑いの意味がわからずアリサは疑問符を浮かべる。だがすぐにそれを振り払うと、少し意地の悪い笑みを浮かべて見せた。

「学校だと制服だけど、イメージは沸いたわよね」

「何が？」

アリサの突然の言葉に、すずかが首を傾げた。

「なのはよ、なのは。」

正座して背筋伸ばして、花を活ける姿がサマになってるのよ。あれ、和服着てたら完璧ね。

私らの中で、もつとも大和撫子な姿が似合うのはあいつなの間違いないわ」

「……………」

チラチラとフェイトの方をみながらそう告げるアリサ。

それに、フェイトが真剣な顔をして聞き入っている。

ややして――

「ちよつと、和室行つてくる！」

「行くのはええけど、部活動の邪魔したらあかんよ〜」

「うんツ、大丈夫ツ！ 分かつてるツ！」

フェイトははやてにそう答えると、立ち上がった中庭から走り去っていった。

「大丈夫なんか……」

「さすがのフェイトちゃんも、部活に乱入するような無茶はしないと思うけど……」

心配そうなのはやてと、それに苦笑するすずか。

「すずかも見たかつたら行つてきたら？」

「んー……そうだね。フェイトちゃんが無茶しないように監視する意味もかねて」

口では大丈夫だと言つてはいるが、やはりフェイトのことは不安らしい。流星はフェイトの人徳である。

「そつちが七割でしょ？」

「アリサちゃんが煽つたんでしょ」

まったく、もう——と笑いながら、すずかも立ち上がった。

「それじゃあ、ちよつと行つてくるね」

「行つてらっしやーい」

手をひらひらさせながら、すずかを送り出すはやて。

そうして、彼女の姿が見えなくなってから、ベンチに腰を掛けると天を仰いだ。

「何で、なのはちゃんの居る日にしたんや?」

「それを分からないあんただとは思わないけど?」

アリサの言葉に、はやては軽くうなずいた。

「まあ、散々サボっとった人達やしな。いきなり外部講師の人と会うんも、ちよう後ろめたいかもしれへんからやろ?」

「そういうコト」

腕を組んで、肯定し、ついでに——と、アリサは補足をする。

「ついでに、部長が直接みんなに話掛けるのに意味があると思つたのよ、なのはは完全フオロー役」

「なのはちゃんは教えるの上手いしな」

流星は教導官さんや——とうなずくはやてに、アリサは少しだけ神妙な顔をした。

「そうね。綺麗に見せたり、楽しむ為の取っかかりを教えるだけなら、そうでしょうけど」

「ん? なんや含みある感じやね」

「教導隊として、魔法を使う術すべを教えるのも、確かに上手いでしょうね」

「だけど——と、一呼吸入れてから、アリサは続ける。

「どこまで行っても、術師なのよ、あの子なのはは。導師にはなれないわ」

強くなる為に、生き延びる為に技術を追求し極めていく。

華であるのなら、ひたすらに美しい——芸術としての活け方を追求していくことになるだろう。

なのはの教え方とはそういうものだ。この辺りは、彼女の兄・恭也も同じである。その辿り着く先は、自ら歩む道への悟りなどではなく誰もが認める技術の極地のみだ。

弟子と共にそこへ辿り着こうとする思考は、結果として弟子の下地作りにも余念がないものとなる。

端から見れば、良い指導者に見えるかもしれないが、弟子からすればハードワークのスパルタでしかない。

「人を殺す為の古武術の家系に生まれちゃったから、そうなのかもしれないけどね」

もつとも、そんなスパルタに着いていけるとなると、その弟子もまた導師ではなく、術師としての極地を目指せるだけの心意気を持っているのであろうが。

「だけど、なのはの面白い所は、指導者の補佐に回った時ね。今回の場合、部長なワケなんだけど。」

部長のサポートに回ったなのはは、部長の考え方を尊重した上で、部員達に花の活け方教えるでしょうから、私やはやと同様に楽しめる教え方になるんじゃないかしら」

どちらかと言えば人を振り回すことの多いアリサではあるが、見るところはちゃんと見ているようだ。

この辺りは、きつと会社経営者である父などの影響だろう。

「いやー……。なんちゆうか——ほんま、何が幸いするかわからんなー」

アリサから話を聞いて、はやてが思ったことはそんなものだった。

「何よ突然」

それにアリサが訝しむと、はやては笑いながら答えた。

「ほら、華道・茶道部に遊びに行こう言うた日、アリサちゃんがそう言っとったやろ？」

「あー……言つてた気がするわ」

アリサが相づちを打つのを確認してから、はやてが続ける。

「アリサちゃんがあの日、華道・茶道部に行こう言わへんかったら、今日の出来事にな

かったわけや」

自分も余計なお節介をすることはなかっただろう。

たまたまアリサの気まぐれが、たまたま華道活動の日で、そこになのはが居たからこ

そ、今回の奇跡は起きたのである。

「何を大袈裟な」

「そうは言うてもな、アリサちゃんのワガママが巡り巡って役に立ったわけやから、もつ

と胸張ってええんとちやうの?」

「それじゃあ普段の私は役に立たないワガママをしたい放題やつてるみたいじゃないの」

「おお? そう聞こえてもうたらなら申し訳あらへんな。せやけど、今回は張ってええんやで。胸。えへんと」

「別に自慢するコトでも誇るコトでもないでしょうに」

「そうか、張らへんのか……胸」

残念そうにはやてが呟く。

「……えへんしないんやな……胸……」

その様子に、アリサは疑わしげな半眼になってうめいた。

「あんた、私が胸張ったら何するつもりだったのよ?」

「そりやあもう、態度以上にわがままな胸それを、こう……」

口にしてから、はやてはしまったという顔をした。

「ほう? わがままな胸（これ）をどうするの……?」

「……」

「……」

はやては口を閉じ、ふう……と息を吐いてから、とても良い笑顔でアリサに告げた。

「それじゃあ、私は用事があるんで、この辺りで帰宅モードへ移行やしゅたつと手を上げてベンチから立ち上がるはやて。」

一緒にあって、アリサも無言で立ち上がる。

「……………」

「……………」

「アリサちゃん」

「なに？」

半眼のまま、アリサが問い返す。

はやては息を吸って、声を上げながら、地面を蹴った。

「ほな、また明日ッ!!」

「逃ッがすかあ…………ッ!」

全力で逃げ出すはやてを、アリサは全力で追いかけるのだった。

世の中何が幸いするか分からない。

ついでに、何が災いするか分からない。

「待ちなさいはやてッ!

あんたのそのセクハラ癖ッ、ここらで矯正してやるんだからあ……ッ!

「あ〜ん……アリサちゃんッ! か〜ん〜に〜ん〜や〜!!」

何というか、これは……

そういうお話だったと言うことで――

closed.
[An accidental flower blooms.]

【Vivid】毒蜂 街に来たりて、八角鷹 眼を光らす

【とらハ3】

「なんか、最近この辺りに暗殺者が彷徨いてるらしいから、気を付けろ」

「わかったー」

「軽ッ!？」

横で聞いていたそのやりとりにも、思わずヴィヴィオは声を上げた。

ヴィヴィオが、いとこの雫と出掛けようとした時、雫の父——恭也が軽いノリで告げてきた危険な内容を、雫も同じぐらい軽い調子で返したのだ。

「そう?」

「わりと普通だと思うが」

「その感覚がすでに普通ではないと思うのですが」

今はいわゆる年の瀬。

新年を祝うということはミッドチルダでは馴染みがない。だが、ヴィヴィオの母やその幼なじみ達は、地球の出身だったり、地球に住んでいたことがあるのでこの時期にな

ると地球へと帰省するのである。

当然、娘であるヴィヴィオも母と共に、母の実家へとやってきていた。

母の実家は喫茶店を経営しており、母はそこを例年通りに手伝いに行っている。

ヴィヴィオもちよくちよく手伝いはするのだが、今日は従姉妹の月村雫と遊ぶために、彼女の家まで遊びに来ていた。

ただ、ヴィヴィオも雫もインドア好き格闘家である。

本を読んだり、ゲームをしたりというのも好きなのだが、やはり互いに手合わせがしたくなるのだ。

そうして二人の意見が一致したところで、適当に出掛けようとした所、彼が声を掛けてきたわけである。

「あ、暗殺者とか物騒すぎるってレベルじゃないような……」

「まあ確かに暗殺者がこの街を歩いているとなると危ないわよね」

「そうだな、確かに危なくはあるな……」

ヴィヴィオの言葉に、月村親子はうんうんとうなずき、

『暗殺者が！』

そう、声を唱和させて告げるのだった。



「……………」

人氣が無い裏路地で、男は手にしたスマートフォンを操作する。

呼び出したのは一通の依頼メール。

『ターゲット：高町士郎。旧姓、不破。』

元フリーのボディガード。任務中の怪我の後遺症により引退。

現在は妻・桃子と共に喫茶店を経営している。

現在かなり有名なボディガード不破恭也、御神美由希 両名の父であり師。

不確定情報であるが、香港の元人喰い鴉で現在警防隊勤務の御神美沙斗の兄らしい。

恭也、美由希の他になのはという娘がいる。

海外にて仕事をしているという情報があるが、どの国にも高町なのはは見つからず。

時折、帰国して喫茶店を手伝っているので嘘ではないらしい。

恐らく国外で、偽名にて裏方家業をしているからではないかと推測される。

また、なのはが光を操ったという目撃情報がある。

あらゆる病院に情報が存在しないが、未登録の高機能性遺伝子障害者すなわち超能力

者の可能性あり。

年齢的にも現役である子供達には気を付けた方がいいだろう。

御神の生き残りは可能な限り消してもらいたいが、今回は士郎のみで良い。

だが、士郎以外の血縁者殺害一人ごとにボーナスは出す。

恭也の娘、雫。なのはの娘、ヴィヴィオにも、僅かばかりだがボーナスを出そう。

成功を祈る』

もう何度も読んだ文章を改めて読み返し、添付されている写真を見る。

「引退したとはいえ、ターゲットもさすがは元ガードといったところか。先ほど、マンシヨンの屋上から狙撃しようとしたら目があつた。恐ろしいコトではあるが」

それを考えると、腕はともかくカンは鈍つてはいないようだ。

そして、勘づかれてしまったのも事実。今頃は、子供達が警戒している可能性がある。

恭也と美由希の勇名は知っている。

大規模な犯罪組織『龍』^{ロウ}が衰退した原因の一旦。さらに恭也は、その関連組織ゴールドクローバーのボスの逮捕に関わっており、美由希はゴールドクローバーが雇った暗殺者スライサー・グリフを返り討ちにしている。

そして、この依頼主は知らないようだが、なのはは異世界で魔導師をしている。それも、エースオブエースと賞される最高峰の砲撃魔導師だ。

「欲は……かくものではない」

泥で濁り淀みきった沼のような声で、彼は独りごちる。

スライサー・グリフ。長剣を使う戦闘狂。性格や人格は暗殺者向きとは言えなかったが、その剣の腕は確かだった。

たまたま迷い込んだ異世界で、特殊な道具や一時的な身体強化の術を身につけ、それを用いて地球で暗殺を繰り返してきた。

その際に、当然向こうでのニュースなどを目の当たりにする機会もあつたからこそ、その魔導師の存在を知っている。だが、こんな形で白き砲撃主エース・オブ・エースと関わり合いになるとは思わなかった。

依頼を受けた時点でリスクはある。いや、リスクのない暗殺などそもそも存在しないのだ。

故に、欲はかくものではない。速やかに依頼を遂行する。

だが――

「孫は十歳と十二歳か……チャンスがあれば小遣い稼ぎは出来る」

親が親だし、家系も家系だ。武術を習っている可能性がある。だが、武に長けていようと所詮は子供だ。

御神流……二十年近く前にテロによって一族のほとんどが死亡した。

その生き残りが、子供を作り、また増えていく。

「それを好ましく思っていない人間がいるんだ。恨みはないが、仕事はさせてもらおう」
独り言は悪いクセだ——そう思いながらも、最後にそれだけ呟き、彼は裏路地の闇の中へと姿を消した。



「あー……そうか。新年の準備……」

八束神社の長い石階段を登り切った後で、目に映った光景を見て、雫は思わず苦笑した。

「つていうか、毎年ここか翠屋の手伝いしてるんだから、そういうの忘れるのはどうかと」

ヴィヴィオも釣られるように苦笑するが、ここに来るまで自分も気づかなかったので人のことは言えない。

クリスマススを過ぎれば、神社は年末年始の準備で大忙しだ。

境内なども掃除などされてるようなので、さすがにここで手合わせするのは気が引けるし、そもそも作業している皆さんの邪魔になってしまう。

「境内の裏とかは？」

「んー……」

ヴィヴィオの提案に、雫は下唇に指を当てて思索する。

境内の裏には、八束神社で以前巫女をしていた人に許可を貰ってサンドバッグが置いてあつたりするのだ。

なんでも、なのはがまだ小学生だった頃に設置され、壊れても別のサッドバッグが設置されるといふ。恐らく誰かがここで訓練しているのだろう。それが誰であるかは、ヴィヴィオも雫も教えてもらっていない。

それはともかく——そのサンドバッグがある辺りなら、本殿からも離れているし、邪魔にもならないと思うのだが。

「さすがに、この忙しい時に裏手とはいえ暴れちゃうのもね」

「じゃあ、家の道場にする？」

「それがいいかなー」

だったら、最初からそうすれば良かったね——互いにそんなことを言いながら、石階段を引き返していく。

——と、

「……………」

「雫?」

その途中、足を止め雫が周囲を見渡した。

「ヴィヴィオ……誰か、私達を見てる」

「……ッ!」

息を飲み、肩に乗せていたぬいぐるみ——クリスに、念話で索敵を指示すると、

「魔導師以外は、発見率悪いんだけどね」

そう言つてヴィヴィオは目を伏せた。

「ミッドの魔法使いさん達は、その辺り弱味だよね」

そんなヴィヴィオに、気楽な調子で雫が言ってくる。

「生体探知系の魔法——もうちょっと工夫して使えるようにした方がいいとは思うけど

……なかなかね」

実際、ミッドチルダの魔導師は魔導師適正を持たない相手を甘くみている部分があるのは事実だ。もちろん、そうでない魔導師もいるのだが、未だに少数派である。

「どう?」

「分かっているくせに……」

「心配、消えたね」

「うん……」

魔法無しに気配探知出来るあたり、個人的には反則な気もするのだが——
「クリスも見失ったみたい」

互いに肩を竦めあい、とりあえずの安堵をする。

「さつき、恭也さんが言つてた人かな？」

「だと思ふ。さて、どうしたものかな」

月村の血筋。御神の血筋。狙われる心当たりが無いわけではない。

だが、あの視線は——

「私だけじゃなく、ヴィヴィオも見てた気がする」

だとしたら、狙いは……

「もしかして、私も狙われてる？」

「かもね」

ならば、狙いは御神の一族全員なのだろう。

ヴィヴィオはあくまで養子であり、血を引いてるわけではないのだが、向こうがそこまで知らないだけだと思われる。

「とりあえず、クリスに頼んでママ達や恭也さん達にメールはしといた」

「それで何とかなるでしょ。たぶん」



「久々の休暇なんですけど、どうにも無粋な輩がのぞき見してるような気がします」

カウンター席ではなく、窓際にある四人掛けのボックス席に座ってコーヒーを啜っていたクロノ・ハラオウンは、隣のボックス席を拭いているこの店の店長——士郎に、そう嘯くと、

「気のせいじゃないんだなこれが」

店長は店長で、軽いノリでそう笑った。

日々の仕事が激務であり、こう一人でのんびりする機会がすくないクロノにとっては久々の寛ぎタイムだったのだが、どうにも気が休まらない。

「ほい」

隣の席のテーブルを拭き終わった士郎は、クロノへと一枚の写真を放った。

「これは？」

「星^{シン} 紅虎^{ホンフウ}。俺に——いや、御神の一族を忌み嫌う連中が雇った殺し屋」

「顔写真まで持つてるんでしたら、警察にでも行ったらどうですか？」

「警察がどうこう出来るやつだと思おう？」

無論、口ではそう言ったが、クロノもどうこう出来るとは思っていない。

「そんなワケで、可愛い孫達も狙われる可能性があるんで、守って欲しいんだが」
「そのお孫さん達の父親や母親は、わりと無敵な人達だったと記憶してますが」

現役の最強と賞されるボディガードに、時空管理局のエースオブエース。地球、ミッドチルダどちらの殺し屋がやってきても返り討ちは確実な実力者だ。

「そうは言うがなあ……」

士郎はやれやれと言った調子で背筋を伸ばし、わざとらしく肩を竦める。その直後に席に面した窓硝子に数点の穴とそれを中心とした放射状のヒビが入った。

「防弾硝子の窓って高いんだ」

「本音はそっちですか」

窓が防弾硝子仕様の喫茶店など、世界広しといえども翠屋くらいだろう。

「実は新宿にも一件あるぞ。防弾硝子仕様の喫茶店」

「どうせ士郎さんの現役時代の知り合いとかが経営してるんでしょう」

だとしたら、この防弾硝子は重度の職業病なのではないだろうか。

クロノと士郎は動じることなく、そのまま喋り続けているが、周囲のお客さん達は突然のその光景にどよめいていた。

だが、それを店内のスタッフ——士郎の娘や、家族つきあいのある手伝い達——が、手慣れた様子で謝罪して回っている。

「これで、もしかしたらターゲットをヴィヴィ才達に変えたかもしれないね」

「現役を退いたとはいえ、そう簡単に俺はやられるつもりはないしな」

戯けた口調でそう言う土郎に、クロノはわざとらしく音を立ててコーヒーを啜る。

「もちろん、オフ中の提督へ仕事依頼だからな。ただとは言わないよ」

「——それで、おいくらです？」

「そのケーキセット。タダつてとところで」

「引き受けました。あ、出発はこのセット完食してからです」

「ま、そのくらいなら問題ないさ」

それから、二人は示し合わせたようにケータイを取り出し、ほぼ同時に受け取った

メールの画面を開いて見せ合った。

「すでに近づいた後だったみたいだな」

「あの二人もまあ決して弱くはありませんからね」

互いにそう笑い合ってから、硝子に受け止められたライフル弾——それが数秒前まで

収まっていたであろう地点へ向けて、細く引き絞った強烈な殺気を解き放った。



「末恐ろしい子供達ではあるな」

とあるビルの屋上でライフルの準備をしながら、紅虎は呟く。

子供だから与しやすいかと後を付けていたが、ちよつとした気配を察知されてしまった。

警戒されてしまった以上、その警戒が解けるまでは、勘づかれやすくなってしまうだろう。

仕方ないので、一旦子供達からは離れ、こうして翠屋を覗けるビルの屋上へとやってきたわけなのだ。

「これだけ距離があれば——」

ライフルを構え、スコープを覗き込む。

窓際の席には黒髪の男が一人、ケーキセットを食べている。

その横で、ターゲット・高町士郎はテーブルを拭いていた。

こちらに気づいた素振りはない。あるいは、気づいていないフリをしているだけか。「どちらでもいい。弾鉄ひきがねさえ引けば、こちらの勝ちだ」

余裕を見せるつもりであるのなら、その足下をすくうだけだ。

ターゲットはテーブルを拭き終わると、隣で座っていた男と談笑を始めた。どうやら、彼は常連かなにかのようだ。

「メモ……いや、写真か？」

その男に、士郎が何かを手渡す。さすがに、ここからではそれが何であるかまでは、見ることが出来ない。

もしかしたら、士郎は昔のツテを使い情報屋のようなこともやっているのかもしれない。だとしたら、あの男はその情報屋としての客——といったところか。

「ふむ……もし情報屋をやっているのだとしたら、個人的には利用したいところだが」
これから殺してしまうのは些か惜しい。もつと早く知っていれば良かったと思わなくはない。

「まあ、そういうのもまた殺し屋の仕事の業、か」

狙いを定めたまま独りごちていると、士郎が身体を起こして軽く肩を竦めた。

チャンス——そう思うと同時に、弾鉄を引いた。都度、数度。

だが、その弾丸は予想外のものに遮られた。

「防弾硝子——だとツ!？」

一体、どこの世界に防弾硝子を用いた喫茶店があるというのだ。こんなもの、想定できむわけがない。

彼にしては珍しく取り乱している、窓硝子にヒビが入ろうともものんびり談笑してた二人が、突然こちらを睨んできた。

「……ツツ!!」

次の瞬間——心臓が止まったかのように錯覚した。

殺気に心臓を撃ち抜かれるかのような、衝撃。

たかが、殺気。されど、殺気。

士郎と黒髪の男が発した殺気は、それだけで並の人間であればその場にへたり込み泣き出しかねないほど強力なものだ。

しかも、周囲にまき散らすのではなく、それをコントロールして矢のように飛ばしてきた。

あの黒髪の男も、一般人ではないらしい。いや、こちらを見るあの眼差しは、法の番人側の目だ。

しかも警察のような生ぬるいタイプではない。自分のような暗殺者とことを構えることにも慣れている、傭兵や軍隊の類。

「これは……まずいというレベルではないな……」

恐らく、自分はその黒髪の男に目をつけられた。士郎が情報料をタダにする代わりに、何とかして欲しいなどと依頼していた場合、こちらの身が危険になる。

今回の仕事は失敗だ。これ以上、この街にいるのはまずい。

紅虎はもてる限りの全速力で片付けをすると、一つの立方体の箱を取り出した。

「とりあえずはこの場から離脱。逃げる算段はその先で考える」

その箱を撫でると、足下に魔方陣が展開される。そして、もうひと撫ですると、彼はその魔方陣の中へと吸い込まれていくのだった。



「地球つて、どんなどころかと思つてたんですが、わりとミッドと同じ感じですねっ！」
「まあこの国はわりとそうやな」

ミウラ・リナルデイは初めての異世界旅行にはしやぎながら、周囲を見渡している。それに八神はやては微笑を浮かべた。

元々家族と共にこちらへと帰省しているのだが、ミウラが「地球つてどんなどころですか?」と訪ねてきたので、一緒に連れてきたのである。

もちろん、彼女の両親には許可はとつてある。

「こつちには、ヴィヴィオちゃんも来とるやろうから、後で挨拶に行こうな」

「はいッ!」

元氣いっぱい回答する彼女を見ると、何となく幼なじみであるなのは気持ちがかかる気がしてくる。

(子供がいるって、こういうんかなあ)

ラインフォースやアギトとはまた違う、不思議な感慨のような気分。

決して不快ではなく、むしろくすぐったくもあるのだが、同時にひどく自分も歳をとってしまったようで複雑である。

「は、はやてさんッ!?!」

「どないした?」

突然、慌てたような声を上げるミウラを訝ると、彼女は何やら空き地を指さしている。

「あ、あの、あそこ……!」

「空き地がどうかして——え……?」

ミウラが示す先に視線を移すと、空き地に突然見慣れぬ魔方陣が展開し、そこから黒ずくめの男が一人、湖面から浮かび上がるように姿を現した。

瞬間、はやての中でスイッチが切り替わる。プライベートモードから、管理局員モードへ。

「すみません、時空管理局の者です。ここは管理外世界です。魔法の使用は原則禁止の
はずです。もし、転送事故等の類でしたら、出身世界と所属をお教えてもらってもよろ
しいですか?」

そう訪ねながら、はやてはミウラへ向けて念話を使って男に勘づかれないように、警

戒しておくように伝える。

男がいきなり襲いかかってきた場合、自分の手持ちの手段だとどうしても反応が遅れがちになってしまう。

ミウラを危険に晒すのは本意ではないのだが、ケースバイケースというやつだ。

「時空管理局——よりもよって、転送先に……ッ!？」

男が驚愕したのは一瞬だけだ。

すぐさま、ポケットからナイフを取り出し、はやての想定以上の速度で踏み込んでくる。

(この動き——魔導師やない。どちらかというところ、非魔導師のプロフェッショナル……ッ!)

はやては咄嗟に、目の前へ防御障壁を作り出すが、この男の持つナイフはそれを易々と切り裂く。

(あかん……!)

完全に想定外。

あのナイフは、魔力を持たない者が、魔力を持つ者へ対抗するために作られた対魔導師用。

そんなものを持った相手が、いきなり転送魔法で現れるというのは、ほとんど想定し

ていなかった。

「はああああ——ッ！」

だが、こちらも最悪を考慮してカードは伏せてある。

男より一瞬遅れて、ミウラが地面を踏みしめ、

「ハンマーシユラークッ！」

相手を撃ち貫くかのような鋭い拳を振り抜いた。

対魔ナイフがはやてに届くよりも先に、ミウラの拳が男を捉えて吹き飛ばす。

「ぐお……ッ！」

地面を滑りながら、それでも男は素早く立ち上がった。

「うわ！ あのタイミングで後ろの飛んで威力散らしましたよあの人ッ！」

「覚えておくとええよミウラ。魔法を使わん世界のプロフェツショナル——彼らは、魔

法使わず人間を越えてまう」

「人間を越えるコトなどは出来んさ。人間としての限界を極めているにすぎない。もつとも——俺よりも高い限界値を持ち、その限界ギリギリまで鍛え抜いた者達が居ないわけではないが」

暗く——汚泥に濁った水のような声に、ミウラがはやての後ろに隠れるように一歩引く。

「相手が地球のプロフェツシヨナル言うなら、余裕は微塵もあらへんな。その恐ろしさ——よう知つとるつもりや。事情は聞かん。叩きのめして、知り合いのプロフェツシヨナルに引き渡す」

「よく見れば……トリプルエースの一人——八神はやて、か」

「ミッドに知り合いがおるみたいやな。そのナイフとさっきの転送陣——出所を吐く気は……」

「あると思うか？」

「思わへんな」

言うなり、はやてが指を鳴らすと男の足下から四本の魔力鎖が現れて絡みつこうとする。

だが、男はそれに捕まることなく、あつという間にナイフですべて切り刻むと、懐から立方体の箱のようなものを取り出した。

「ミッドチルダの魔法使い達は、魔法に対して驕りがある——そう思っていたが、お前はどうかや、それでもないらしいな」

「さつきも言うたけど知り合いに地球のプロフェツシヨナルがおるからな。ええ、勉強させてもらうてる」

声と同じくらい濁った瞳をこちらに向け、男は口の端を小さくつり上げた。

「ミウラといったか——先ほどの打撃、魔力ありとはいえ悪くなかった。だが、もつと反応速度をあげるべきだな。キミは一瞬、私を殴るべきか悩んだな？」

はやての横でミウラがどう反応して良いか困っている。

だが、それにはやてが何かを言う余裕はない。迂闊なスキは命取りだ。

「魔法を使わない人間だから、魔法で殴つてはいけない——そういう甘さが時として必要がない場合もある」

「ミウラはそれでええんよ。戦闘魔導師やのうて、競技魔導師やからな」

「……………ふっ」

その笑みにどのような意味があるかは分からなかったが、彼は笑みを浮かべながら再び転送陣を足下に展開した。

「キミ達には感謝する。逃亡中とはいえ頭に血が上っていたのを冷ましてくれたからな」

それだけ言うと、男は魔方陣の中へと沈んでいく。

「あ、待ち……………ッ！」

咄嗟にはやてが手を伸ばすが、男はあつという間にその姿を消してしまった。

完全にその姿が無くなったのを確認してから、はやては大きく息を吐いた。

「ある意味、生きてるだけ儲けもんかもしれないな」

「ち、地球って怖いところなんですね……」

「こんなん特別や。普段会えないレアな化け物にでも出会った程度にしとくとええよ」
そう告げてから、やや自分の口調がピリピリしているのに気が付いた。

改めて息を吐いてから、ミウラの頭を撫でる。

「緊張して喉が渴いてもうたし……なのはちゃんのご両親がやつとる喫茶店にでも行こか」

「あ、はい！ 美味しいって話ですから楽しみです！」

そうして、二人で歩き始めた所に、はやてのケータイが鳴った。

それを取り出し、受信したメールを見て思わず苦笑する。

「星 紅虎……捕まえそこねたんは、失敗だったかもしれへんけど……」

ミウラが居たのだ。それを思えば、今回の結果が最上としておこう。

今の出来事を素早く打つと、情報の送り主へとリターンする。

「はやてさん？」

「ん、何でもあらへん。ほな、行こか」



転送陣から飛び出すなり、紅虎は思わず腹部を押さえて転げ回る。

「ぐおお……めちやくちや効いた……！ あのミウラとかいう小娘……思い切りやりやがって……ッ！」

あのまま続けていけばやばかったのはこちらであった。

だが、八神はやてが必要以上にこちらを警戒していたのが功を奏した。

ミウラのことを守ろうとしている部分もあつたので、利用させてもらったのだが——
「確かに威力を散らせたが、痛いもんは痛いんだ……くそッ」

大きく息を吐き、何とか立ち上がってから周囲を見渡す。どこかの民家の庭のよう
だ。

家の中には人の気配はあるが、こちらの気づいた様子は無い。

「でかくはないが……家の庭に道場というのもすごいな」

長居をするわけにはいかない。

家に道場があるということは、それなりに武に長けたものが住んでいる家ということ
だ。

（……ん？ 家に道場……？）

何か引つかりを覚えた、直後——

「……ッ！」

紅虎は咄嗟にナイフを振るつた。

飛来した鉄の針のようなものを弾くと、

「惜しむ」

そんな声が聞こえてきた。

声のした方へと視線を向けると、そこは道場の入り口。そこに居たのは――

「月村、雫……」

「やっぱり狙いは私……ううん、御神の関係者、かな？」

構えているのは木刀だが、十二歳とは思えぬスキの無さを見せている。油断の出来ない相手だ。

この場からも逃げるしかないだろう。

懐から、再び立方体を取り出す。

その瞬間、物陰から虹色の光弾が飛来する。

「……」

紅虎は素早くナイフでそれを切ろうとするが、光弾は綺麗にそれを躲し、彼の手に持った立方体を狙う。

それに気づいて身体を捻るが、今度は物陰からヴィヴィオが飛び出してきた。

「この――ッ！」

狙いはやはり立方体。これが転送装置であるとバテている。

さらに雫までこちらへと踏み込もうとしているのを見、一瞬対応に悩む。

その隙に、光弾が立方体をはじき飛ばした。

「しまった!」

手から離れたそれに慌てて手を伸ばそうとするが、それを空飛ぶウサギのぬいぐるみが空中でキャッチ。そのまま家の軒下の方へと飛んでいく。

「クソツタレ!」

そのウサギを視線で追うと、一人の女性がそこにいた。

戸の縁に腰を掛けていた女性が、その箱を受け取ると、ウサギの頭を撫でる。

「よくやったわ。クリス」

「お前は……?」

「名乗ってあげてもいいわよ。私は月村忍。それで、うちの可愛い娘と、可愛い姪っ子のコンビに何か?」

忍と名乗る女性は、武術などの心得はなさそうだが、その双眸に含まれる怒気は、一般的な母親のそれとは違う。その怒気のコもった瞳だけで人の心を殺せそうな——そんな殺気じみたものを感じる。

(何らかの……能力者か……?)

「忍さん、その人が紅虎だね」

「そうみたいねー」

家の奥から、女性が二人やってくる。

一人は栗色の髪をサイドアップにした女性。ミッドチルダでは知らぬ者の居ない英雄。エースオブエース。高町なのは。

もう一人は金の髪を腰元よりも長く伸ばした女性。彼女もミッドチルダでは有名だ。高町なのは、八神はやてと並び称される魔導師、フェイト・T・ハラオウン。

（最悪だ……転送装置無しに、この状況は……ッ！）

「ヴィヴィオの保護者としても、高町の人達の友人としても見過ごせない相手かな。もちろん、執務官としても」

だが、相手は子供二人と魔導師二人。一人は何らかの能力はあれど、実戦経験はなさそうな女。

やりようによっては組み伏せられる。

「何か庭が騒がしいなと思って見てみたら……あんまり、穏やかな状況じゃなさそうだね」

そして、この家の入り口だろう方から現れたのは、

「……御神、美由希……ッ！」

「そっちの名前を呼ぶっていうコトは、そっち側の人なんですね」

獲物は持っていないが、メガネを外しこちらを向くだけで、強烈なプレッシャーを感じる。

その気配から察する。真正面から勝てる相手ではない。

「ただの暇つぶしのつもりだったのだが、わりと管理局的にも見過ごせない相手だったとはね」

「まったく、窓硝子の修理代とか言うなら自分で何とかしろよと思わなくはないんだが」
さらに、美由希の後からやってきたのは、二人の黒ずくめ。

「不破恭也……それに……」

あの窓際に座っていた男。

「私のコトは分からないようなので名乗っておこう。時空管理局のクロノ・ハラオウン提督だ。こちらの言いたいコトは分かっているな?」

時空管理局の提督クラスまでもが現れるなど、思っても見なかった。

——いや、だが背後の扉を越えれば逃げることも出来る可能性がある。

そう思い、そちらに視線を向けると、空から女性と少女のコンビがそこへと降り立ってきた。

「ヴォルケンリッター、烈火の将シグナム」

「同じく鉄槌の騎士ヴィータ推参、てな」

「我らが主と弟子を襲つたらしいな？」

「つーか、この状況あたしら来た意味なくね？」

「ここへ来て、退路が完全に断たれた。」

「はは……はははははは……」

もう笑うしかない。

依頼どころか、暗殺者としての自分はどうかやらここで終わりらしい。

「人間、追い詰められると笑うのねー」

「忍さん、なんか呑気ですね」

「これだけ揃えばねー」

そうして、星 紅虎はナイフを捨てると大人しく両手を挙げるのだった。

「はは……はははははは……はははははははは……はあ……」



雫が繰り出した突きを紙一重で躲し、ヴィヴィオは踏み込んで拳を振り上げる。振り上げられた拳に対し、雫は強引に突きの勢いを殺して横へと飛び退く。

逆にヴィヴィオは拳の勢いを利用して、地面を蹴り飛び退いた雫を追いかけた。

俊足の追い足。追いつかれた相手はそれを受け止める以外に防御手段がない——そんなタイミングで繰り出された蹴りを、事もあろうか雫は自らの着地と同時に身体を深く沈め、ヴィヴィオの足を払うという無茶な手段で潰してのける。

足を払われたヴィヴィオが宙を舞う。だが、その宙を舞う勢いを無理に止めようとせず、ヴィヴィオは魔力付与した片手で地面に手を付き、ハンドスプリングの要領で飛び上がりつつ姿勢を戻す。

だが、完全に体勢を整えさせまいと、雫が力強く踏み込んでいく。

「この仕事——引き受けた時点で、失敗だったか」

拘束され、警察へと引き渡されるまでの間、ヴィヴィオと雫の組み手を見ながら、紅虎は乾いた笑みを浮かべた。

同世代の少女達とは次元が違う。

あれでまだどちらも、切り札を使ってないというのだから、未恐ろしいどころの話ではない。

喫茶店の窓が防弾硝子だった以上、仕事中の土郎を狙撃するのはほぼ不可能。なら、店内で仕掛けられたかといえばノーだ。

暗殺である以上は人質は論外だし、取ろうものなら、この場で自分を囲んだメンバー

だけでなく、他のメンバーまで集まって救出作戦などを展開されていただろう。

「なんや、さっきの殺し屋さんやないか」

その声に、苦い顔をしながら、紅虎は振り向く。

「八神……はやて……」

「もしかして、私らから逃げた後で、ここへ飛んでもうた？」

「勝手に想像しろ」

考えてみれば、トリプルエースは幼なじみだという話だ。この展開は想定出来た。

想定出来たのに、対応を考えていなかったのは完全に自分のミスである。

「やはり、この依頼——引き受けたコトそのものがミスだったか……」

「えーっと、僕はちよつと違うと思います」

独り言にはやての横にいたミウラが反応する。

「なんだと？」

「そもそも、殺し屋なんておっかない職業を選んじやったコトがミスじゃないかなって」

無邪気な子供の意見だ——そう思ったが、紅虎は同時に別のことも思っていた。

「ある意味、真理かもしれん」

足を洗う良い機会というやつなのかもしれない。

そんな風に考え始めた矢先、

「いやまあなんちゅーか、シリアスな空気出してるどころ悪いんやけど」
どこかバツの悪そうにはやてが告げる。

「この街で犯罪やらかそうって時点で失敗やと思うよ」

そうして、はやての口から様々な人物の名前を聞かされ、紅虎の顔は青ざめていく。

「多数のHG^{超能力}Sに、表の格闘技有段者にシークレットサービス……裏の有名な元殺し屋達……それに加え、ミッドのSクラスの魔導師までそんなに……」

八角鷹——あるいはハチクマと呼ばれる鷹がいる。その鷹は、雛の為にスズメバチの巣を襲う。

「ミッドに住んでた言うんなら、アースラって名前くらい聞いたことあるやろ？」

「英雄艦と賞されている次元航行艦だな、それがどうかしたのか？」

この街はまるでハチクマが住む森林だ。自分のようなスズメバチが獲物を求めやってくれば、それを逆に捕食する。

「この街、当時の提督が住んでるし元クルーも結構多いんよ。私もその一人やしな」
ハチクマの毛は分厚くその毒針が体内に届かない為、スズメバチは逃げ惑うしかない。

「……世界……いや、次元一犯罪がしにくそうな街じゃないか……」

まったくもって、今日の自分が逃げ惑うスズメバチそのものではないか。

「まあミウラの言ったことも一つの真理やけど、単純に考えるなら下調べが不足しすぎてたとちやう？」

全くもってその通りだ。もっとしつかりと人間関係を調べておけば、違約金を支払ってでもこの依頼を止めたかもしれないのだから。

がつくりと紅虎がうなだれる。

その時、

「はやてさん！ 下がって！」

ミウラが突然、はやての腕を引いた。

「わったった……！」

バランスを崩しながらその場から退くはやて。

そこへ――

「ディバイン……バスター！」

ヴィヴィオが魔力を解き放ち、雫がそれを見切つて躲し、

「……え？」

その砲撃は吸い込まれるように紅虎の足下で炸裂した。

「うわあああああああ！」

雛である孫達でさえ、これだけの才能の原石なのだ実感すると同時に、爆風によつ

て吹き飛ばされる。

紅虎は宙を舞いながら、

(もう、俺——暗殺者辞める……)

心の底からそう誓うのだった。

Occasionally a scapegoat
also preys on
an evil | cloud.

〔VVST〕知って悩んでTouch & Go!〔S〕
tS〕

0.

人は——知り得たことしか知らないし、

人は——見えた部分しか見れないし、

人は——見たい部分しか見ることはできない。

だけど、それでも——知れば変わるし、新しく見える部分は増やせるし、視点を変えれば見たい部分も変わってくる。

以前の私は、未知の部分は思いこみ、勝手に想像し、勝手に腹を立てていた。

フーちゃん和本気でぶつかって、目が覚めた今、あの時の私は苛立ち混じりに、ずいぶんとひどい思いこみで、勝手に腹を立てたなあって思う。

「気にしすぎじゃリンネ。あちらさんは、別に気にしとらん言うと思った」

「そうだけど——」

それでも、知ってしまったから——当時の自分に対する自己嫌悪でイヤになる。

キツカケなんて些細なことで、それを知り得たことはただの偶然で。始まりは、ナカジマジムとの合同合宿。

場所は次元世界カルナージにある、ホテル・アルピーノ。

そこに作られた、時空管理局の局員用、高難易度ミツシヨンの体験シミュレーター。せっかくだからと、制作したルーテシアさんの誘いですることになった体験会。

私ことリンネ・ベルリネットが体験した高難易度ミツシヨンのシミュレーションが発端の小さな小さな悩みと、ささやかな一歩の物語。

——はじまります。

1.

「某管理局魔導師達から頼まれていた、過去の高難易度ミツシヨンの時の戦況を再現し体験できるシミュレーターッ！ ついに完成したのッ！」

えへん——と、ルーテシアさんが胸を張ると、意味が理解できていられないらしいヴィヴィオさんとほか数人だけが拍手をしていて、よく分かっていない私やフーちゃんたちは、首を傾げた。

「簡単に言うと、管理局の魔導師さん達が過去に戦った、とんでもなく強かった犯罪者と

か、とんでもなく困難な状況からの脱出だとか——そういう難しいの一言じゃ済まないような状況を再現し体験できるシミュレーターよッ!」

イマイチ盛り上がらない私達に、ルーテシアさんが説明してくれますが、やっぱりよく分からない。

ただ、再現されるミッションはあまりにも難易度が高すぎて、事件当事者に改めて体験させてもクリアできるかは分からないレベルだそうで……。

再現してある状況というのはどれもこれも、魔導師達の実力と運と奇跡と偶然が噛み合わさったからの成功したようなものも多いのだとか。

ハリーさんやエルスさんは何となく分かったような顔をしているけれど、私はやっぱりよく分からなかった。

「まあ競技選手だもの、相手の経歴はともかく、強い人つて気になるでしょ?」

その部分はよく分かったので、みんなうなづく。

もちろん、私も。

「それに番長とエルスは、管理局入り考えてるんでしよう? だったら、余計に興味があるんじゃないかしら?」

「まあな」

「はい」

そういうわけで、試運転を兼ねた体験会に相成ったのでした。

2.

ルーテシアさんが作ったシミュレーターにおける体験会。

それは、競技格闘の中だけでは絶対に体験できないような、対戦相手ばかりで――

ヴィクターさんとミウラさんがタッグを組んで挑んだ相手は魔導書型のデバイスを手にした銀髪の女性。

何でも、ミウラさんがお世話になっていてる方のお姉さんなのだとか。

残念ながらすでに他界されているって話だけど、そんな方とシミュレーター上でも手合わせできるのは嬉しいと、ミウラさんは意気込んでいた。

でも、結果は大敗北。

勝利条件は一定時間足止めするか、一定以上の魔力ダメージを与えるか――なんだけど、二人はそれを満たすことはできず、それどころか収束系砲撃で二人ともまとめてKO。

強い相手、難しい相手――事前にそう説明されていても、ミウラさんやヴィクターさ

んの強さを知っている私としては驚きです。

ちなみに、ヴィヴィオさんのお母さんが九歳の頃にほぼ一人でその条件を満たされた
と聞いて、さらに驚きです。

……ヴィヴィオさんのお母さん、管理局の方だと知ってはいたけど、そんな歳の頃にこんな方と戦っていたというのはすごい話です。

私も、ルーテシアさんが一時期お世話になった人で、メガーヌさんの元上司だった人と戦わせてもらった。

正直言つて、歯が立たない。恐らく、私に有利な競技ルールで戦ったとしても、勝てない相手だったかな。

実践と競技の違いを含めた様々な要因の差もあるんだと思うけど、競技世界だけでは知ることのできない強さのようなものを感じられて、結構楽しい体験だった。

これ以外にも、ナカジマ会長のデータもあつた。

それに加えてナカジマジムの面々や聖堂教会のシスター・シャンテなどのセコンドで時々見かける人達のデータも。

でも、データ上のみなさんは、どうにも冷たい目というか、とても怖い目をしてる。

以前の私も、フーちゃんから見るとこんな目をしてたのかな？

……ウエンデイさんやシスター・セインは今とあまり変わらない顔をしているような気がするけど。

「ナカジマ会長……若い頃ヤンチャしていたって……このシミュレーターにデータがあるってコトは……」

「ジルの想像通りだよ。局に追われてたコトがある」

「良かったんですか、私達に知られてしまつて？」

「このメンツなら問題ないって思ったからな。今は一般人だよ」

そう笑っているナカジマ会長を見ると、何となくナカジマジムの人達がお人好しな理由が分かる気がする。

みんな色々あつて、それでも笑つて前に進もうとしてる人達なのかなつて。

「あの頃のあたしらはさ、当時の保護者達から常識の代わりに、管理局法の破り方ばかり教わつてたのさ」

その話から、ナカジマ会長も、私やフーちゃんと同じような境遇で育つた方なのだと想像ができる。

でも、私やフーちゃんと明確に違うのは、教え導く人が悪い人であつたこと。継るものが無い私達孤児にとってはある意味で、保護してくれている人達が全てという面があ

るから……。

ナカジマ会長とコーチのやりとりを聞きながらモニタに目を向けると、シミュレーター上のナカジマ会長と戦っていたヴィヴィオさんが、ガッツポーズを取っている。

「しょーりーッ！ 当時のノーヴェエなら、タイマンの何でもありでも勝てちゃうよッ！」
「良くやった良くやった。ある意味、当時のあれこれヘリベンジできたか？」

「んー……そういうコトはする気は特にないけど……それでもリベンジっていう言い方するなら、相手はノーヴェエじゃないかな」

「そうかい」

複雑な感情の入り交じった苦笑を浮かべながら、ナカジマ会長はヴィヴィオさんの頭を撫でていきます。

やりとりの中で聞こえた、リベンジという言葉。

エリート公務員の娘で、お嬢様学校に通う恵まれた境遇の女の子——ヴィヴィオさんのことはそう思っていたんだけど、なんだか違う気がしてきて……

上手く言えない棘のようなものが、胸に刺さったような気がした。

「ノーヴェが自分のデータを見せるのOKしたなら、私もいいかな？」

「お前がそれでいいなら、あたしは構わないよ」

「分かった。フーカさんやリンネさんになら、知られても問題ないと思うしね。」

二人のコトに勝手に首を突っ込んでしまったお詫びと、うんちやんといひますか……」

はにかむような、申し訳ないような顔で、ヴィヴィオさんがそう言うのに、フーちゃんが慌てて答える。

「や、そんなコトないです。むしろリンネと話す機会を作れたのはヴィヴィオさんたちのおかげじゃから……」

「うん。フーちゃんの言う通りだから」

私もフーちゃんに同意です。

実際、そう思っているから。

「えへへ……ありがとうございます。」

でも、せつかくですから、二人も挑戦してみてください」

そう告げると、ヴィヴィオさんはルーテシアさんのところへと向かいました。

そうして、ヴィヴィオさんの意見と、ルーテシアさんの提案から、私とフーちゃん。アインハルトさんにジークリンデさん。それからヴィクターさんの五人が選ばれました。

「五人でも荷が重いかもだし、あと二人くらい入ってもいいわよ?」

ルーテシアさんの言葉に、ハリーさんとエルスさんも名乗りをあげて、合計七人で挑戦です。

「シャンテも入っていいのよ?」

ルーテシアさんにシスター・シャンテもそう誘われるけれど、彼女は大げさに肩を竦めた。

「シミュレーション上とはいえ、彼の方に立ちほだかるのは恐れ多すぎますので、辞退させていただきます」

「シャンテそういう言い方しないでよ、もう」

「あははは。ごめんごめん」

畏まった言葉遣いをしながら嘯くように辞退したシャンテさんに、なぜかヴィヴィオさんは頬を膨らませるように文句を言っている。

——恐れ多い?

一体、私達はこれから、どんな人のデータと対するのだろうか?

首を傾げながら、言われた場所で待機していると、フレーム建造物が姿を変えて大きな黄金の扉が目の前に現れた。

その扉を見て、待機場の雰囲気は急に変わっていく。

「……ハルにやん……気合い入れるよ。シミュレーションとはいえ、ご先祖様達の思いに応えるええ機会や」

「はい。当時、相対するコトすら叶わなかったのを思えば、ただの体験会で有っても充分に意味がありますから」

二人のチャンピオンが、試合の時とは別の鋭い表情を浮かべている。

「なるほど……これが話に聞いていた……」。

霸王と鉄腕のお二人に、この雷帝——ささやかながら力添えを致しましょう」

ヴィクターさんも、普段とは何か違う顔。

「ハルさん達なんだか様子が変じゃな」

「うん。どうしたんだらう?」

私とフーちゃんで首を傾げていると、エルスさんが答えてくれました。

「あの三人にとつて、この扉はご先祖様から続く因縁があるのでしよう」

「オレらは今までの体験会のルール通り、ダウン判定やゴングが無いってのだけ気にして戦つてりやいいさ」

それを補足するように、ハリーさんも言います。

二人は何か知っているようだけど、必要以上に踏み込む必要もないという感じなので、私とフーちゃんは素直にうなずきました。

「それじゃあ、空間条件もオンにするわね」

ルーテシアさんの声が響くと同時に、急に身体が重くなる。

「なんじゃ、これ？」

「これがAMFですか」

「なかなかシンドイが、まあ動けないほどじゃねえな」

身体が重くなったのではなく、魔法をうまく使えなくする効果があるみたいです。

身体能力補正の効力が突然薄れたので急に身体が重くなったように感じたのだと思う。

「ヴィクター大丈夫か？」

「ええ。驚いたけど、不思議と身体はこれに馴れてるみたいに感じますわ」

「さすがは雷帝です」

「アインハルトにそう褒められるのは悪い気分ではありませんわね」

前の三人は、この状況をあまり気にしていないようで、落ち着いていました。

「扉を開けたらミツシオン開始になるからね。覚悟を決めてから、開けるコト」

そして、ルーテシアさんの声によって、私達七人は顔を見合わせた。

やっぱりジークリンデさん、ヴィクターさん、アインハルトさんの様子が変だ。

変——というのとは少し違うかな。まるで試合に挑む時のような、いや、それ以上の

ピリピリと痺れるような緊張感を纏っている。

それはこれまでの、どこか和気藹々とした体験会の空気とはまったく違う気配……。

「エルス、俺——ちよつとナメてたかもしれねえ」

「同感です。こんな空気の中で局員の皆様は戦っていらつしやるのでしよう」

ハリーさんとエルスさんのやりとりで私とフォーちゃんも気づいた。

「なあ、リンネ。もしかしてこの空気を——」

「うん。きつと——」

それは、普通に生活している限り、味わう機会はほとんどないもの。

これまでの体験会の中にある、楽しさ混じる緊張感とは別種の空気。

「——これが、戦場と呼ばれるものなのかも」

そう思うだけの緊張感が、今この場に満ちていました。

4.

先頭の三人がどうしてそこまでの緊張感を持っているか分からないものの、今回のシミュレーションのデータはヴィヴィオさんがルーテシアさんに使用を提案していたものです。

わざわざ、参加メンバーまで指定したんだから、何か意味があるんだと思う。

「ヴィヴィさんは、わざわざわしとリンネも参加しろと言った。つまり、この扉の向こうにはヴィヴィさんが秘密にしとった何かがあるんじゃないかな」

「うん。ナカジマ会長も、そうだったしね」

「ナカジマ会長の過去は、一歩間違えばわしらの過去にもなつてた話じゃった」

孤児だった私達を拾ったのが悪人であつたなら——そう思うと、他人事には思えない話だった。

そんな話をフリーちゃんとしていると、アインハルトさんから声をかけられました。

「フリーカ、リンネさん。準備はいいですか？」

「押忍ッ！」

「はいッ！」

魔法が使いづらい環境でも、戦い方はいくらでもある。

相手がどれだけ格上でも、一矢報いるくらいのはするつもり。

「では、開けますわ」

ヴィクターさんが扉に手をかけて、ゆっくりと押し開いていくと、大きな空間が広がっていた。

幾何学的な模様の黄金の床と、入り口から最奥まで真っ直ぐに伸びる翡翠色の道。

その道の終端。縦長の空間の最奥には玉座と呼ぶに相応しい椅子と、そこに腰掛ける、どこか見窄らしい姿をした幼い金髪の子。

私達が全員、扉を抜けるとその子が顔を上げた。

赤と緑の瞳。今と比べると随分と幼い姿だけど、それは間違いなく――

「ちんまいヴィヴィさん……？」

フーちゃんが小さく首を傾げる。

確信を得られないのは、こちらへと向けられる双眸には、押さえきれない憎しみと怒り……そして悲しみに満ちていて、今の明るいヴィヴィオさんとはまるで別人のよう。

「ママを……」

「え？」

「ママをツ、返してえええええ——ツ!!」

悲鳴のような絶叫と共に、幼いヴィヴィオさんは変身制御による大人モードへ。そしてバリアジャケツトも展開。今の白い上着じゃなくて、同じデザインの黒いもの。

バリアジャケツトと共に、憎悪と哀しみと現在の姿さんからは想像もできない濃密な魔力を纏っているヴィヴィオさんが、

「あなた達がツ、ヴィヴィオからママを奪ったツ!!」

床を蹴った。

同時にヴィクターさんも前に出てバリアでその拳を受け止める。

「くッ、話で聞いていたものと、実際に目の当たりにするのは、全然違いますわねッ！」
『ゆりかご』による戦闘強要機能と、テロリストからの催眠暗示による二重洗脳でしたか」

「さあ、かつてのヴィヴィにやんを止めよかつ、みんなッ！」

最初からある程度は知っていたらしいハリーさんとエルスさんは即座に動き始めるけれど、私はまだ頭が付いていかない。

戦闘の強要？ テロリストからの暗示？

「リンネ。ごちゃごちゃ考えるのはあとじゃッ！ 今のヴィヴィさんと動きはまったく違うが、強いのは間違いないんじゃないからなッ！」

「うんッ！」

フーちゃんに背中を強めに叩かれ、気持ちを切り替わった。

私は軽く呼吸を整えながら、ヴィヴィオさんを見る。

ヴィヴィオさんはかなり無造作な魔力を込めた回し蹴りを放つ。それをヴィクターさんは先ほどのように受け止めようとして、バリアごと吹き飛ばされて壁に激突した。

「なんなんですかッ、あの馬鹿力ッ!!」

思わず目を見張り叫ぶエルスさんに、ジークリンデさんが冷静に説明する。

「うちの鉄腕。ハルにやんやヴィクターの古流武術。クロにやんの古代魔法なんかと同じ古代技能——それがヴィヴィにやんの聖王の鎧や。身体能力の向上と全身の硬質化……それに伴う四肢の武器化を行うスキルやね。」

「ようするに全身がフーにやんの拳と同じような状態になつとるんよ」

「なんとも反則のようなスキルじゃのう」

言いながら、フーちゃんが踏み込んでいく。その言葉には私も同感だ。

死角から回り込むようなフーちゃんの動きに、だけどヴィヴィオさんは即座に反応して射撃魔法を撃ち出す。

咄嗟にフーちゃんはそれを防ぐものの、そこで足を止めてしまう。それを確認すると同時に、黒い光を纏った右腕を振りかぶるジークリンデさんへとヴィヴィオさんは視線を巡らせる。

「アカンツ！」

「ヴィヴィオさんの瞳がジークリンデさんを捉えると、そちらへと左手を掲げた。瞬間、ジークリンデさんの眼前に魔法陣が広がり、そこから拡散砲が放たれて彼女を吹き飛ばした。」

「霸王——ツ！」

意識がジークリンデさんに向かってるヴィヴィオさんへと、アインハルトさんと、復

帰したフーちゃんが同時に踏み込んでいって――

「断空拳ッ!!」

アインハルトさんと、フーちゃんが同時に拳を打ち出す。

瞬間、ヴィヴィオさんの足下から魔力の鎖が飛び出してきて、二人を絡めとった。

「ヴィヴィオさん、ただだけ目を持つとるんじや……!」

「まるで、ヴィヴィオさんのお母様と戦ってるようです……!」

私だって、それをただ眺めていたわけじゃない。

「真つ向勝負で勝ち目はないのは明白。それならば、私らしい方法で足止めをするだけッ!」

フーちゃんとアインハルトさんの隙間を縫って、私は姿勢を低くしながらヴィヴィオさんの膝へと抱きつくようなタックルをする。同時にアインハルトさんがバインドから抜け出したので、ヴィヴィオさんは戸惑った。

その一瞬の隙で充分。私はヴィヴィオさんの足に組み付いた。

鋼鉄のような肉体も、硬い骨も、高い身体能力も、組み付いてしまえば一瞬の隙からいにはなるはず。

「……離してッ!」

ヴィヴィオさんが組み付いた私へと手刀を振り下ろす。

ザクリという生々しい感触が肩から響いてくる。

クラッシュエミュレートと分かっているけど、とんでもない激痛で、私は顔をしかめた。魔力もロクに籠もってない手刀で、私のバリアジャケットを容易く切り裂き、その内側の身体まで引き裂くなんて……！

それでも、痛みで手を緩めたりすることはしないッ！

そこへ、エルスさんの声が響きます。

「これでどうですかッ！」

エルスさんが複数のバインド魔法を同時に用いてヴィヴィオさんを拘束した。

組み付いていた私はすぐにその場から離れると、ヴィヴィオさんの下半身へもエルスさんのバインドが絡みついていく。

「ハリーさんッ！」

「おう。チャージ完了だッ！ 行けッ、イレイザー!!」

動けないヴィヴィオさんへとハリーさんの放った強烈な砲撃が炸裂した。

……けれど――

「今のは、痛かった……」

ハリーさんの砲撃で吹き飛ばされたヴィヴィオさんは、泣きそうな顔をしながら立ち上がった。ダメージはあまり無さそう。

「AMFとかいので、威力が下がっちゃったか」

「いや、あの様子ではAMF関係なく、ピンピンしてたかもですよ」

エルスさんとハリーさんは苦笑しあっていますが、私も同じ気持ちだ。

七人で掛かって何とか作り出した隙に叩き込んだはずの高威力の攻撃に耐えてしまってるわけだから……。

「実際にこのヴィヴィにやんとタイマンで戦った言う、ヴィヴィにやんママは……どうやって勝ったんやろか……」

「その辺り、この戦いが終わったらヴィヴィに聞いてみるとうましよう」

「はい。まずは、出来るところまでやってみるとしましょう！」

改めてみんなで気合いを入れて挑みましたが——結果としては、敗北です。

正直、何をしてもダメージを与えられる気がしませんでした。

「いつか、一人でも勝てるようになりたいものです」

シミュレーターが終了し、玉座が消えていく中で、息を整えながらのインハルトさんのその呟きは、どこまでも真っ直ぐな力強さを感じるものだった。

5.

ホテルの一室に戻った私は、部屋の片隅で膝を抱えていた。

幼いヴィヴィオさんとの戦いの後、簡単にヴィヴィオさんの生い立ちを聞いた私は、自己嫌悪で潰れそうになっている。

知りようがない話だったとはいえ、私は随分と都合のいい思いこみをヴィヴィオさんに押しつけていたみたい。

「リンネ、入るぞー」

部屋のドアがノックされ、フーちゃんが呼びかけてくる。

私が黙っていると、フーちゃんは気にせずに部屋へと入ってきた。

「また部屋を暗くして丸まっとるんじやな」

「フーちゃん、私……」

何を言いたかったのか分からない。

何かを言おうと思って口を開いて、そこで言葉が止まる。

だけどフーちゃんは、私が言葉に詰まることなんてお見通しだったみたい、ポント私の頭に手をおいて、私の横へと座った。

「気にしすぎじゃリンネ。ヴィヴィオさんは、別に気にしとらん言ううとった」

「そうだけど——勝手に思いこんで『恵まれたお嬢様のヴィヴィオさん』に、私の前に立ちほだからないで……って、ずっとそう思ってたの」

「でも、ヴィヴィオさん本人には言うたらんのじゃろ?」

「……うん」

「なら、ええじゃないか。問題なんてどこにもないのう」

「問題……無いのかな?」

フーちゃんを見上げるように横へ視線を向けると、フーちゃんの手が私の前髪を払った。

「何が問題になるのか分からん。ヴィヴィオさんだって言われてもいない悪口について謝られても困るじゃろうが」

「……」

そう言われると、そうかもしれない。

「しかも、なんやよく分からん理由でリンネが凹んでるからの。ヴィヴィオさんも失敗したかも……なんて落ちこんどるんじゃ」

「それは……申し訳、ないかな」

「そうじゃ。謝るんじゃつたらそれじゃろ」

勝手に悪く思つて、そのことで勝手に悩んで、挙げ句に勝手に落ち込んで——確かに

ヴィヴィオさんから見ると、私ってよく分からない子になってるかも。

「いうても、ヴィヴィさんは謝る必要ないって言うじやろうけどな」

確かに、あの子ならそう言うんだらうな……。

小さく嘆息すると、フーちゃんがわしわしと、私の頭を乱暴に撫でる。院の頃から変わらぬ手付きが、ちよつと懐かしい。

「リンネは独り相撲が好きじやのう」

「好きで空回ってるワケじゃないよ」

うー……と唸りながら、私はぎゅつと自分を抱きしめる。

「その空回りも、リンネが優しいからじやけえ。悪いコトではないじやろ」

ポンポンと頭を叩きながらフーちゃんと言う。

「じゃけども、抱え込んでそのままってところは直さんとならん。優しいままでええから、もうちよつと行動せんと」

「……うん。そう、だね……」

「ヴィヴィさんがどういう反応するか、今から考えても仕方がないじやろ。リンネが謝りたいなら謝ればええんじや。何もせんまま、こうやって部屋に閉じこもつとるから、リンネは色んなもんを見落とすんじや」

困った時、何もしないまま閉じこもるから色々なものを見落とす——その言葉が、私

のなかにストンと落ちる。

この前、フーちゃんと戦って目が覚めた。常にセピア色だった世界に、鮮やかな色が灯った。夢の中のおじいちゃんが笑ってくれた。

だけど、それでも私はまだまだ相変わらずだったのかもしれない。

もっとフーちゃんやジルコーチ、ヴィクターさんに、相談とかできるようにならないと、ダメなのかも。

「フーちゃんはすごいね。何でも分かっているみたい」

「何でも分かっているわけじゃないけえの、リンネのコトだから分かるだけじゃ」

「そうなの？」

「そうなんじゃ」

フーちゃんは優しいね。

だから、つついっいフーちゃんに甘えちゃうのかもしれない。今日だって、心のどこかでフーちゃんが来てくれるって思ってたのかな——私？

「さてと」

そう漏らしながら、フーちゃんが立ち上がる。

それから、私に手を差し伸べた。

「リンネ。立てるか？」

「え？ うん。立てるけど……」

「ならヴィヴィさんとこへ一緒に行くんじや」

「今から？」

「こういうのは早い方がええじやろうが」

差し伸べられた手を取ると、フーちゃんは私を引いて立ち上がらせてくれる。

それに併せて私が立ち上がると、フーちゃんはぐいぐいと私を引きずるように引って張っていく。

「今までは知らなかった。じゃが今日は知るコトが出来た。

知れば変われるし、新しく見える部分は増やせるんじや。それに視点を変えれば見たい部分も変わってくるじやろ？」

そうは言うても見ただけじゃいかん。知っただけじゃ意味がないんじや。触ってみて、初めて分かるコトもある」

だから——と、フーちゃんは続ける。

「怖がつてないで、触わりに行く必要があるんじや。試合もそうじやろ？」

リンネは今まで触りに行くコトをサボっていたんじやから、人より多く触りに行つてもええくらいじや」

そう告げて、フーちゃんは私の背を押した。

6.

気が付けば、目の前にヴィヴィオさんがいて。

どうして良いか分からなくて、だけどニコニコしながら何かを待っているヴィヴィオさんに、何を言えればいいのか分からなくて――

「えっと、その、ゴメンなさいッ!」

とりあえず、私は頭を下げた。

フーちゃんの言ってた通り、ヴィヴィオさんは困った顔をしたけれど、とにかく私は謝りたかったんだから、これでいい。

それから、謝った理由を言えば、気にしなくていいですよなんて彼女は笑う。

それでも謝りたかったから――と、もう一度ゴメンなさいと告げた。

不思議と、それで気持ちはいぶ軽くなった。

その後は、ヴィヴィオさん達と普通にお喋りができた。

フーちゃんの言う通りだ。

悩んでるだけじゃなくて、ちゃんと動けば、こんなにも簡単なことだった。

「な？ 言った通りじゃろう？」

「うん。フーちゃんはすごいね」

「リンネがすごいくないだけじゃ」

「そっか。そうかも」

♪

人は——知り得たことしか知らないし、

人は——見えた部分しか見れないし、

人は——見たい部分しか見ることはできない。

だけどそれでも……

見えた部分、知り得た部分だけでなく、直接それに触りに行ければ、何かがきつと変わるはず。

今日の私がそうだった。

フーちゃんがそう背中を押して、教えてくれた。

これからもっと——サボっていた分を取り返す為——格闘以外もがんばらないと。
そんな風に思った一日でした。

— You can worry because you know it
— Closed.

【A, S】お塩は適量で

1

「ランサー……セット!」

《Photon Lance》

フェイトの呼び声に応じ、バルディッシュは周囲に無数の発射フォトン・スファイア体を展開する。

「ファイアツ!」

合図と共に発射フォトン・スファイア体から、眼下ののに向かつて魔力弾が発射される。

放ったフェイト自身かなり良いタイミングで打てたという確信があつた。これなら例え相手がなのもあつてもかなりの成果が上がったはずだ。

地面に炸裂した魔力弾の破裂の引き起こした大量の砂煙を見下ろしながら、フェイトは油断せずになのはの出方を伺う。

「——え?」

唐突に、それに気がついた。

なのはの魔力反応がなくなっている。

そんなバカな——と、小さく口の中でつぶやきながら、周囲を見渡す。だがもし地上

にいたのであれば砂煙が邪魔で確認が出来ない。

(どういふ……いふ……?)

もしや当たり所が——と、思いはしたが魔法そのものは非殺傷モードに設定してある為、大事には至らないはずである。ましては相手はなのはだ。この程度で終わるはずがないという確信があつた。

「はあ——はあ——はあ——……」

なのはとの戦闘演習を始めてからまださほど経っていないし、何より大した魔法を使っていないというのに肉体と精神が疲労を訴えている。

(長期戦は……いつも以上に不利……)

疲労もあるがそれ以上に向こうは周囲の魔力残滓をも利用する大技を持っているのだ。魔法の乱発はその威力を挙げるといふ危険性を伴う。

この演習を白星で終わらせるには、魔力反応からも視覚からも消えうせるという荒業をやつてのけたなのはその先の手を読む必要がある。

(前回は負けただけ……今回は勝たせてもらうよ……なのは！)

砂煙はまだ収まりそうに無い。

なのはとフェイトの戦闘演習が行われている数日前。

クロノはアルフを連れて高町邸にやってきていた。そこにフェイトの姿はない。

「フェイトちゃんか——無茶してる？」

自らが話した内容をなのはに聞き返されて、クロノは神妙にうなずいた。

無茶はいつもの事じゃないかな。そう言い掛けて、なのはは思いとどまる。いつも通りの無茶ならばクロノはわざわざ家まで訪ねくるはずがない。

「えーっと、具体的にはどんな無茶？」

「まあようするにオーバートレーニングだよ」

言っても止めてくれなくて——と、アルフが嘆く。

どうやら結構深刻らしい。

「でも、学校とか遊んでるときとか、そんな感じしないよ？」

「そりゃあ原因が君とシグナムと言っても過言じゃないからな。君やはやての前じゃあ、そんな事を口には出来ないだろう？」

「そうなの？」

「ああ」

何で気がつかないんだとでも言うようにクロノはこれ見よがしに嘆息する。

「シグナムとは性格上、よく戦闘演習として対戦しているし、互いの時間が合う時は君だつて付き合うだろう？」

「この所、彼女は負けが込んでるみたいだね。そこへこの間の演習でも君が勝つた。一種のスランプだと思うんだが、フェイト自身、少し気落ちしてるくらいがあつた。だから僕のところへやってきた簡単そうな仕事を頼んだんだ」
うまくいけばまた気を取り直せるだろうと考えてのクロノの計らいであつたのだが、それが想定外の理由により逆の効果を持つてしまったという。

「何があつたの？」

「へタレだつたのさ。その指名手配犯」

「ほえ？」

「その何が予想外だつたのだろう——アルフが忌々しげに言う言葉になのは首を傾げる。」

「逃げる素振りや変な行動をするなら撃つ——そう警告したんだ、あたし達は。そしてアイツつてばいきなり動こうとしたんでフェイトが相手の足元に向かつて軽いのを一発撃つたのさ。」

ハツタリを効かせる為に、物理効果付きでね。足元が抉ればこつちの本気だつて分かるだろうつて——あたしもそう思つたさね。でもね、何がへタレかつて、そいつ……

何をしようと思ったか知らないけど、その場で足をもつれさせて転んだんだ。

そのままそいつの身体はランサーの斜線軸に……」

フェイトはもちろん、威力は抑えて撃つただろうから犯人は大怪我をするような事はなかっただろうが……そんな事を思っているとどんよりとクロノがアルフの説明を引き継いだ。

「犯人の罪状が罪状だったからね。出来る限りの無傷の逮捕が好ましかったんだ。

そのコトを事前に僕がフェイトに話しておいたのが仇になった。犯人を無力化して逮捕することには成功したんだがフェイト自身は課せられた任務をちゃんとこなせなかったと余計に気落ちしてしまったんだ……」

「それからなんだよ。フェイトが無茶な訓練を始めたのは——い自分はまだ力足らずだからもつと力をつけないと……いつもの訓練だけじゃ足りないからもつと増やそうってさ」

負のエネルギーというか運命と言うか、そういう不運のようなものは、どういふわけか連鎖したり重なったりするのが世の常である。負けが込んだのもたまたま調子が悪い日が重なっただけかもしれないし、犯人が転んだというのも運が無かったとしか言いようが無い。

何をやってもうまくいかない——そんな状態が続くのはいわゆるスランプというや

つである。スランプと言うのは大概、何らかの要因によってコトが上手く運ばなくなつた時、意固地になつて無理を通そうとする為、失敗するという悪循環が繰り返されていくだけである。

解決法としては気分転換したり、肩の力を抜いたりというのが一番だ。自信が無くなり掛けているのなら少し難易度を下げてみるというのもアリである。

そういう意味ではクロノの判断は間違っていない。犯人が転んだのは本当に不運なだけである——もちろんフエイトの運勢が、だ。

「ところで、その犯人の罪状ってなに？」

「食い逃げ」

「は？」

なのは目を丸くする。指名手配犯とはいえそんな事件が管理局に回ってくるものなのだろうか？

しかも、かなり功績をもった執務官の元へ。

「君の考えている事は分かる」

自分もそう思った——と、クロノは続ける。

「でもこいつは、次元世界を股に駆ける食い逃げ常習犯なんだ。口癖は『俺に食い逃げできない世界はない』」

どういうワケか高度な転移魔法を身につけていて、上手いこと世界を渡り歩きながら食い逃げを繰り返してるといふ、一応次元犯罪者」

小物だけどな、と付け加える。

「うあー」

という呻き声しか出すことが出来ない。小物過ぎるにも限度がある。

「運……ないね、ここ最近のフェイトちゃん」

「そうなんだよね……」

ウンウンとアルフ。

「ここ数日の運の悪さとフェイトの真面目な性格と重なって今状態になってしまったんだらうな」

深く深く嘆息しクロノは肩を落とす。

その様子に、このままでは心配のし過ぎでクロノまでスランプに陥るのでは、となのは本気で心配する。

「そこでだ、なのは」

しばらく俯いていたクロノは顔をあげ、真っ直ぐになのはを見据えて告げた。

「はい？」

「君にフェイトの説得を頼みたい」

「いいけど……」

なのははうなずきながらなんとなく思った事を口にする。

「そういうのってお兄さんの仕事じゃないの？」

深い意味はなかったのだが、過去、なのはの姉である美由希もオーバーワークをし続けた事があり、それを兄の恭也が説得し止めさせたことがあった。

それを思い返しての言葉であつたが――

「だめだよなのは……クロノの傷口に塩をグリグリ押し付けてその上をわさびとマスタードでコーティングするような事言っちゃあ……」

「あー……えーつと……」

どうやらすでにクロノお兄ちゃんは頑張つた後のようである。

「ご、ごめんね……クロノ君」

ひどく気落ちしているクロノになのはは苦笑しながら謝つた。

「いや……いいんだ……それじゃあ失礼するよ」

「じゃあねなのは」

背後に黒い縦線を背負いアルフの肩を借りながら帰宅するクロノに手を振りつつ、なのははフェイトを説得する手段をぼんやりと考え始めていた。

といつても、いいアイデアが湧くわけでもなく、だからといつてあまり考える時間は

かけられないな——とも思う。

「やっぱり、経験者は語る——かなあ？」

そうしてなのは、姉の元へと足を向けた。

3

自宅にある道場の片隅でなのは姿勢を正して正座をし、姉から教えてもらったアドバイスを反芻しつつ、フェイトの無茶を止めさせる手段を考える。

無理な特訓を心配してる人がいるということ。頑張りすぎが逆に身体をガタガタにしているということ——その二つを分かせてあげるといい……そう、美由希は言っていた。

今のフェイトにはたぶん、誰からの説得にも応じないだろう。ならどうにか無理やり話を聞いてもらおう機会を作るしかない。

だとしたら——一戦交え、それをネタとして説得する。それが一番だろう。

だが、ただ一戦交えるだけではきつとダメだ。なら、正攻法ではなくからめ手で……出来るなら最終的にはこちらの得意分野ではなくフェイトの得意分野——ショートレンジあるいはクロスレンジからのアクションで決着を付けたい。

そうすればそれを引き合いに出せるはずだ。

ゆつくりと目を開けて立ち上がると、気が向いたら触るといいと言って、兄が用意しておいてくれているのは用の木刀を二振り手にした。

「初めて手にした目的が、訓練じゃなくて実戦って言うのは——なかなかアレかも……」

苦笑しながらも、なのはの胸中では作戦はすでに決まっていた。

4

フェイトの放ったフォトンランサーを受けずになのはは敢えて躲した。

地面に突き刺さった魔力弾は粉塵と砂煙を撒き散らす。

(……よし……)

自分の姿を砂煙が隠してくれる。これは好機だった。

なのははバリアジャケットを解除し、レイジングハートも寶石形態に戻す。

それから可能な限りの自分の魔力を隠し、さらには、予め兄から教わってきた気配の消し方をさっそく実践。完璧でなくともかなり誤魔化す事が出来るはずだ。

そして最後に杖ではなく、一対の木刀を手にする。

「レイジングハート……サポートお願いね」

《Yes. Master》

なのはは自分の魔力を押し殺したまま、微弱な魔力弾を二つ生み出し、
(うん……そのままのまま……)

それぞれを微妙にコントロールしつつ、自身はその場から離れていく。

(準備は出来た！ あとは——)

砂煙で視界を遮られているが、確かにフェイトを感じる方を見て、木刀を持つ手に力を込めた。

(魔力反応が出てきた？ でも……二つつ!?)

そのどちらも微弱である。フェイトはなのはの性格や戦術からこの先の戦法を推測しだす。

(片方は囿……？ もしかしたら両方とも囿で、本人はすでに砂煙の中にはいない……とか?)

ありえない話ではない。どこかでこちらの様子を見ながら、必殺の一撃の準備をしている可能性がある。

だが、

(それなら、もっと強い魔力反応があるはずだけど……)

では、こちらはどううって出るか——そこが出てこない。

頭を振る。どうにも思考が散漫だ。自分らしくない。なぜか集中力が下がったようにも感じる。

「とにかく、出てきたのを向かえ撃つよ、バルディッシュ！」

《H a k e n F o r m.》

力強く応える代わりに主の意を汲み取り形状を変える相棒に、フェイトは自身も力強くうなずき、どこから相手が来ても良いように構える。

そして——

「来る！」

反応を感じる魔力の一つが、急激に移動速度を増した。

その反応は素早くフェイトの足元を通過して、急上昇してくる。

(こっちは……)

砂煙から現れたのは、桜色の光弾。

「フェイク！」

《H a k e n S a b e r.》

それに向かい、バルディッシュから生み出されている魔力刃を切り離し投げ放つ。

同時に、先の魔力弾に一足遅れでもう一つの魔力反応が上昇してくる。それを向かえ撃とうとして、

(なんで……?)

気が付く。

先に放たれた魔力弾は切断できたと思っていた。だが、魔力弾は消滅すること無く、背後にある。

理由は分からないが、なのははわざわざ遠隔操作をして魔力弾にハーケンセイバーを避けさせたのだ。

(じゃあ、こっちから来るのは?)

迂闊といえば迂闊だった。ちゃんと魔力弾を消した事を確認してからでも、次発の魔力に対して反応できたはずだ。

(……本当に、らしくない)

自覚する。今の自分は何かおかしい。

背後の魔力弾の動きに注意しつつ、目線は下から来る魔力反応へと向ける。

そして二つめの魔力反応の正体は、

「こっちも、ダメー!?!」

またも魔力弾だった。

それに向かい先と同じようにハーケンセイバーを放つが、やはり魔力弾は方向転換をしてそれを避けた。

(なんで……わざわざ?)

速度はそれなりにあるが、込められた魔力は僅かだ。

ぶつかってもフェイトに対しさしたるダメージが望めるとは思えない。

だとすれば――

(何かのアレンジが組み込まれた、仕掛け弾?)

考えられなくもない。そうでなければわざわざ遠隔操作してまで、消滅を回避させる必要性がないのだから。

「なら、当たるのはまずい……」

そう判断して、まるで生きているかのように迫ってくる二つの光弾をうまく躲しつ、時折それらを消す為の魔法を放つが、その事如くが当たらない。

「くっ!」

じわじわと焦りが滲んできた時、

「――ッ!」

足元に突然、魔力反応が現れた。しかも、それはすでに加速し始めている。

(……何時の間に?!)

5

フェイトの魔力反応、そしてフェイトから放たれる魔法の反応を細かに感じ、それに合わせてなのはは魔力弾を巧みに操っていく。

あちらのの動きに焦りが感じられるようになった頃、なのははレイジングハートにおいてお願いをする。

使う魔法はブリッツァクション。なのはが得意とする移動魔法であるフラッシュムーブとは違い、直線移動を加速するのではなく、動きそのものを高速化する魔法だ。

本来なのはは遠距離型の魔道師であり、瞬間的な反応速度を得る代わり機敏な動作を捨てている。その為、なのはには向かない移動魔法である。

この魔法を得意としているのはどちらかというとフェイトだ。使用目的の主は、中距離から間合いを縮める事。

今回、敢えて接近戦でフェイトに勝とうとしているなのとはにとっては、現状にぴったりの魔法である。

しかし、本来この魔法の使い手でないなのはには制御や起動に若干問題がある。それをレイジングハートに頼んでサポートしてもらおうというワケだ。

「いくよー！ レイジングハート！」

《Yes. My master. Blitz Action.》

グンと身体が上空へと引つ張られるのを感じながら、しかしそれには逆らわず、二刀を構えたままなのはフェイトへと向かっていく。

《GO》

「えいつー！」

レイジングハートの合図に合わせて、左手の木刀を振るう。

砂煙を抜けると同時にフェイトが視界に入る。そして剣はかなりベストとも言えるタイミングで振るう事が出来た。

完全に意表を付いた攻撃だと思ったが、フェイトはギリギリで身体を捻り、その一撃をバルディッシュで受け流す。

そのまますれ違うように交差して、なのははフェイトよりも高い位置で静止して振り返る。

《Barrier Jacket.》

同時に、魔力を隠す為に解除していたバリアジャケットを再装着した。

「なのは……」

「うまくいったと思ったんだけどなー」

残念そうに言うなのはに、フェイトは眉を潜める。

「でも、すごい驚いた」

「あはは……そう言ってもらえると嬉しいな」

なのは少し照れ笑いするように答えてから、真面目な顔をして告げる。

「ねえ、フェイトちゃん」

「なに？」

「この模擬戦、私が勝ったらちよつとお話聞いてほしいな」

「別に……なのはの話なら勝負に関係なく聞くけど……」

「でもね、今のフェイトちゃんは、たぶんちゃんと聞いてくれない気がするから——」

「……もしかして、なのはもクロノやアルフみたいに、訓練を止めさせようとしているの

？」

眉を潜めて、疑わしげに言うフェイトなのはは首を振った。

「やつちやダメだなんて、私は言わないし、クロノ君やアルフさんだって言っていないはずだけど……そう思っちゃってるなら、やっぱりこの勝負に勝ってから話を聞いてもらった方がいいかな」

なのはは左を順手で、右を逆手で木刀を持ち、大きく左半身を退いて右手をやや下方気味に伸ばす。

「なのは……私と接近戦をする気？」

「うん……つて、言ったらどうする？」

「剣つていうのは——見様見真似、一朝一夕で出来るようなものじゃないよ？」

「分かつてる……でも、フェイトちゃんを納得させるにはこれしかないかな——つて」

「………わかった」

なのはが何の為にそんな事をするかが分かったわけではないだろう。しかし、なのはが自分に対して何かをする為に接近戦を挑んできているというのだ。得手不得手に関係はなく、こちらが本気を理解したという事なのだろう。

そしてフェイトも、バルデイツシユを構える。

「まだ馴染んでない武器に、戦法。そして不慣れな魔法——それで勝てるっていうの……なのは？」

「勝てるよ。今のフェイトちゃんになら！」

力強く答えて、なのははキツとフェイトを睨んだ。

「そこまで言うなら……手は抜かないよ？」

「うん！」

そして、しばらくの沈黙が流れ——

《Blitz Action》

白と黒。弾かれたように二色が同時に空を駆ける。

6

確かにフェイトにいつものキレはない。だが、それでも彼女の方が速いし、確認するまでもなく近接戦闘の腕前は向こうの方が上だ。

(それでも……勝たないと！)

なのははブリッツアクションで加速する中で、にさらにブリッツアクションを起動し、重ね崖をする。

「重ね掛け!? でも、まだ私の方が速いよ!」

フェイトが横一文字に振るうバルディッシュをなのはは躲し、さらにブリッツアクションを重ねる。

そこからなのはは左手で袈裟斬りを放つ。

難なく避けるフェイトに、なのはは袈裟懸けの時の身体の勢いを殺さずに右の木刀を突き出す。

この連撃に、フェイトは多少驚いたようではあるが、やはり避けられてしまう。

(もつと速く動かないと！)

さらにブリッツアクションを重ねる。

「これで……同じ位！」

「速度が同じでも！」

振り下ろされるバルディッシュを木刀で受ける。手がその衝撃で痺れるが、手放さなかつただけ僥倖だ。

「同じでダメなら！」

腕前で勝てないのなら、速度で勝つ。なのはもう何度目かのブリッツアクションを重ねる。

が、

「重ねがけなら私にも使える！」

同時にフェイトも重ね掛けをして、速度を上げた。

「えく！ズルい！」

「ズルくない！ っていうか、先に重ね掛けし始めたのはなのは！」

「それならこつちだって！」

重ねに重ねる。

なのはがブリッツアクションを使うたびに、それに応じてフェイトもブリッツアクションを起動する。

双方、重ね掛けによる負担が尋常ではなかった。速度の上昇による肉体への負担。魔法を重複させる事による精神への負担。そのどちらもが、なのはとフェイトへの重圧となつてのしかかつていた。

重ね掛けしている数の多い為、なのはの精神への負担が大きく、また、もとより肉弾戦用の特訓をしていない身体である、速度が上がるごとに掛かる負担も大きい。

対してフェイトは、得意とする魔法であり元もとの速度もあることから重ね掛けの負担は軽く、近接戦闘の訓練も積んでいるため肉体への負担も最小限だ。だが、それ以前に、ハードワークによつて身体へ大きな負担が掛かっている分がある。疲労度としてはなのはとそう変わらないのかもしれない。

(もつと速く……もつと速く！)

「なのは！　これ以上の速度は！」

それでもなのはは負担など気にしていないかのように重ね続け速度を上げ続ける。

細やかな移動が苦手なのはではあるが、自身でも驚くほど制御できていた。

しかし、フェイトの警告の意味もわかる。これ以上の速度が出ると、移動中の周囲の動きは人間の動体視力での知覚が難しいほどのものへと変わる。それでは戦闘どころではなくなるはずだ。それを意味してのフェイトの警告。それは理解できる。

だが、

「負けるわけにはいかないからー」

言つてなのは更に重ねる。

同時に、手足の先を冷たく感じ、軽い虚脱感に襲われる。魔力が減つてくると感じる脱力感だ。

歯を食い縛り、両手の小太刀を強く握りなのはそれに耐えて、さらに速度を上げていく。

どンドン速度をあげながら、なのははフェイトに向かつて、ほとんどカンだけで剣を振っていた。

最初は簡単に捌かれていたものの徐々に徐々にではあるが、受け流したり避けたりではなく、受け止められる事が増えてきていた。

（でも……まだ足りない……もつと、それこそフェイトちゃんの防御よりも速く動かないとー！）

なのははさらに——重ねる。

今必要なのは、速度に耐える体力。魔力の消耗に耐える精神力。剣を落とさない腕力。そしてフェイトを見失わない視覚。

（それ以外、今はいらない！）

「……くっ！」

なのはの攻撃を受け止めながら、フェイトは呻く。

(人の無茶を止めさせるとかいうわりには……なのはも充分無茶してる)

フェイトもなのはに合わせて速度を上げていくが、そろそろ自分の限界が来る。もはや互いに何重掛けしているのかが分からなくなってきたのはいるが、自分の事だ。直感的に、これ以上は無理だと分かる。

(でも……なのはは——まだ速くなる!?)

なのはの繰り出す左右の連撃を受け止める。なのはは気付いてるのだろうか——その攻撃の精度と打ち込みの強さ——そして速さが、移動速度と共の向上している事を。

(このままだと……少しマズいかな……?)

今はまだ何とか視れるレベルだが、これ以上まだ数度とブリッツアクションを重ねるなら、厳しくなる。

(でも……そこまで行けばいくら動体視力や知覚が優れてたって……)

そう、流れて見える周囲の速度が人間の限界を凌駕してしまうはずだ。

さらに速度を増したなのはの左手から突きが繰り出される。

それを受け流そうとしたとき、直前で切っ先がグンと伸びた。

(……………えっ!?)

ガツンと何かがバリアジャケットの生む障壁に打ち付けられた衝撃が走る。

純粋な物理攻撃のほとんどは、バリアジャケットが防いでくれる。だからこそノーダメージで済んだのだが――

(今のが――魔力武器による一撃だったら……)

ぞつとする。確実に致命傷だ。

「もつと行くよー!」

(まだ加速できるの!?)

あらゆる面で、なのはは限界だろうに、どうしてそこまで出来るのだろうか。

フェイトは荒息をしながら、間隔の狭まっていくなのは攻撃を必死で躲し、受け流し、弾き、受け止める。

それでもたまに、目前でなのはの手が伸びたかのように迫ってくる攻撃が混じっており、それだけが躲せなかった。

そしてなのはの攻撃速度が増すたびにそんな一撃も増えていく。

(そんな……ショートレンジの戦いで、なのはに圧倒されるなんて……)

表情には出さないものの内心で驚愕しながら、フェイトはさらに激しさを増すのは

の攻撃を受けながら、どうやって勝つかを必死で思考していた。

8

(もつと速く！ もつと速く！ もつと速く！)

何度か攻撃が通った。でも、納得の行く一撃ではない。もつとちゃんとした一撃を決めたい。

それならば、もつと速く動かないと。本当にフェイトが防御を出来なかったと確信出来る一撃が。

もうフェイトの姿を正しく見れていない。流れる中に見える、僅かな黒と金。それだけを目で追っている。攻撃をしている。

(でも……これじゃあダメだよ。ちゃんと、目で見てしっかりと攻撃できないと) だが、速くすればするほど視覚は定まらない。

(ちよつとの時間でいい。攻撃するほんの数秒だけでいいからフェイトちゃんの姿を見たい！)

フェイトが防げなかった攻撃を出した時の間隔を思い出す。時間が引き延ばされたような、フェイトの防御速度が下がって見えたような、そんな感覚。

(うん、あの感覚がもつと続けば……)

そういう一撃が出るたびに、その感覚を覚えようと集中する。

(え?)

もう何度目の事だろうか、突然、周囲の動きが遅くなっていく。

(違う……周りだけじゃなくて……私も!?)

そして徐々に世界が色を失っていく。移動しながら感じるのは、まるでゼリーの中を進んでるみたいだな……という感覚だった。

そして気が付く。

(フエイトちゃん……私の動きよりも遅い?)

そうだ。確かに遅い。このひどく緩慢な世界において自分よりも、フエイトの方が遅い。

(チャンスは——今!)

フエイトに向かって突き進む。遅々としか進まない自分にやや焦りながら、それでも後一步と言う距離まで届く。

左手を引く。

フエイトの顔が驚愕に染まる。

左の木刀を突き出す。

フェイトがバルディッシュを動かす。

狙いは首……のやや左。

(でも、私の方が——)

そしてなのはの木刀がフェイトの首を掠めつつ、

(速いよ！)

——伸び切った。

「えへへ……ね？ 私に勝てたでしょ？」

そう言ってるのはフェイトに微笑みかける。

「……負け……ちゃった」

呆然としながらも負けを認めてくれたフェイトになのはは安堵する。同時に——

「あ……あれ？」

四肢から力が抜け、身体先端が酷く冷えている。ついでの意識も遠くなっていく。

(あちゃー……ちよつと、がんばりすぎちゃったかも……)

「なのは!!」

木刀が手から零し、なのはを支えていた魔力翼が散っていくのに気が付いて、フェイトが慌ててなのはを抱きとめる。

「あ……あはは、ごめん、フェイトちゃ……ん」

「なののは? ……なののはってば!」

心配をするフェイトの呼び声を聞きながら、なのはまどろみの中へと落ちていった。

9

「ふにや……?」

目が覚めると、よく見慣れた天井だった。

「私の部屋?」

「そうだよ」

「フェイトちゃん?」

「模擬戦で無茶しすぎて意識を失ったんだそうだ。まったく、無茶を止めるのに無茶し
てどうする」

心配そうに覗き込んでくるフェイトの背後に、兄が腕組みをしながら経っていた。

どこか怒ったような顔をしているが、まあ、これが兄——恭世のデフォルトであり、ついでに長年兄妹をやっている事で手にいれた表情読み取り術により、兄が怒っていると
いうより心配してくれている事が見て取れる。

「フェイトちゃんも、お兄ちゃんも——心配掛けてごめんね」

身体を起こして謝ると、

「あう」

全身にむず痒いような筋肉痛特有の痛みが走る。

「大丈夫？」

「まあ、無理のし過ぎで身体がガタついてるだけだろう」

フェイトとは対照的に、冷静に兄がこちらの状態を汲んでくれる。

そんな二人に痛みに耐えながら笑いかける。どうにも引きつった笑みになってしま
うが。

「ところでなのは」

「何？」

「話って何かな？」

「あ——うん……」

何と言うべきか、少し考えてなのは告げた。

「あのねフェイトちゃん」

「うん」

「トカゲの尻尾って元に戻らないんだよ」

「は？」

「今のお前が言うな、なのは」

フェイトは変な顔をして、兄がぴしゃりと言い放つ。

「ごめんなさーい」

どうやら兄にはこちらの言葉の意図が伝わったようである。

「何で今ので会話が成立するのかな……？」

困った顔をするフェイトに、

「まあ、ようするにだ……」

恭也が通訳をする。

トカゲの尻尾は再生する。しかし再生した尻尾に骨は無い。特訓し過ぎ、無茶し過ぎで身体を壊し、それが完治しても後遺症が残り、訓練の成果を見せる機会を一生失えば、その無茶に意味がなくなる——つまりはそういう事だろう。

「なんていうか……わかり辛いっていうか回りくどいって言うか……」

「さすが我が妹だ」

困っているような嬉しいような、そんな複雑な表情をするフェイトと、うんうんと感心したようにうなづく恭也。

「でも確かに、今のなのはが言っても説得ないよね」

「あはは……でも、フェイトちゃん。私の事心配してくれたでしょ？」

「それはそうだよ。あんな無茶な戦い方をすれば……」

「私は無茶だとは思わなかったけど……」

「無茶だよ！ 重ね掛けをあれだけすれば、身体にも精神にもすごく負担が掛かるんだから！」

少し怒ったように、口早にそう言うフェイトに、

「うん。ありがとフェイトちゃん」

なのは嬉しそうにお礼を言った。

それから、

「でね、フェイトちゃんの無茶にも心配してくれてる人がいたんだよ」

そんな事をなのは告げる。

「別に私はそんな無茶してたつもりは……」

そう反論しかけた時に、フェイトはハツとする。これじゃあ今のなののは言い訳と同じ事だ。自分が無茶だと思っていなくても他人から見れば充分無茶だったのだ。

「もしかしたらフェイトちゃんは無茶だと思っていないかもしれないけど、模擬戦の時のフェイトちゃんって、いつものキレが無かったんだけど、気付いてた？」

それって、無茶をし過ぎて身体が弱ってたって証拠じゃないかな？」

言われて、初めて不調の原因を知ったフェイトは俯いた。

「ごめん……なのは」

しゅんとしたままフェイトは詫びる。

そんな彼女の頭に恭也は手を乗せた。

「謝るのはなのはだけに——じゃあないぞ」

「え？」

顔を上げて恭也を見るフェイトになのはが笑いかける。

「一生懸命なお兄ちゃん、心配性な使い魔さん。それから優しいお母さんに謝らない

と、ね？」

なのはの言葉に、フェイトは溢れかけた涙を拭って、

「うん！」

力強くうなずいた。